

王七年、樽里子死す。而して涇陽君を齊に質たらしむ。趙人樓緩來つて秦に相たり、趙之利とせず。乃ち仇液をして秦に之き、魏冉を以て秦の相となすを請はしむ。仇液將に行かんとす。其客宋公、液に謂つて曰く、秦、公に聽かずは、樓緩必ず公を怨みん。公若かず、樓緩に謂つて曰はんには、請ふ公の爲めに秦に急に請する毋けん。秦王、趙が魏冉を相とするを請ふの急ならざるを見ば、且に公に聽かざらん。公言つて事成らざるも、以て樓子に徳とせられん。事成らば、魏冉故より公を徳とせんと。是に於てか仇液、之に従ふ。而して秦果して樓緩を免じて、魏冉、秦に相たり。呂禮を誅せんと欲す。禮、齊に出奔す。昭王の十四年、魏冉、白起を擧げて向壽に代り將たらしめて、韓魏を攻め、之を伊闕に敗り、首を斬ること二十四萬。魏の將、公孫喜を虜にす。明年、又楚の宛、葉を取る。魏冉、病と謝し相を免す。客卿壽燭を以て相となす。其明年、燭免じ、復た冉を相とす。乃ち魏冉を穰に封じ、復た陶に益し封す。號して穰侯と曰ふ。

穰侯封せられて四歳、秦の將と爲り、魏を攻む。魏、河東の方四百里を獻す。魏の河内を拔き、城を取るに大小六十餘。昭王の十九年、秦は西帝と稱し、齊は東帝と稱す。月餘、呂禮來つて、齊秦各々復た帝を歸して王と爲る。魏冉、復た秦に相たり。六歳にして免す。免せられて二歳、復た秦に相たり。四歳にして白起をして楚の郢を拔かしむ。秦、南郡を置き、乃ち白起を封じて武安君となす。白起は穰侯の任舉する所、相善し。是に於てか穰侯の富、王室よりも富む。

昭王の三十二年、穰侯、相國たり、兵に將とし魏を攻め、芒卯を走らし、北宅に入り、遂に大梁を圍む。梁の大夫須賈、穰侯に説いて曰く、臣聞く、魏の長吏、魏王に謂つて曰く、昔、梁の惠王、趙を伐ち、戦つて三梁に勝ち、邯鄲を拔きしも、趙氏地割かずして、邯鄲、復た歸す。又齊人、衛を攻めて、故國を拔き、夫子良を殺ししも、衛人地割かずして、故地復た反る。衛趙の國全く兵勁うして地、諸侯に并せられざりし所以のものは、其の能く難きを忍びて地を出すを重みたるを以て也。宋、

中山は數々伐たれて地を割き、國、隨つて以て亡ぶ。臣以爲へらく、衛趙は法る可くして、宋、中山は戒と爲す可しと。秦は貪戾の國にして親み毋く、魏氏を蠶食し、又、晉國を盡し、戰つて暴子魏將に勝ち、八縣を割いて、地未だ畢く入らざるに、兵、復た出づ。夫の秦は何の厭くことか之れ有らん。今又芒卯を走らし、北宅に入る。此れ敢て梁を攻むるに非ず、且に王を劫かして以て多く地を割くを求めんとする也。王、必ず聽く勿れ。今、王、楚趙に背き秦に講せば、楚趙怒つて王を去り、王と爭魏うて秦に事へん。秦必ず之を受けん。秦、楚趙の兵を挾んで、以て復た梁を攻めば、則ち國亡ぶる無きを求むとも得可からざらん。願はくは王の必ず講する無からんことを。王若し講せんと欲せば、少しく割いて質質子を有せよ。然らずんば必ず欺かれんと上魏ノ長。此れ臣の魏に聞く所。願はくは君王魏侯の是を以て事を慮からんことを。周書に曰く、惟れ命、常に于てせずと。此れ幸魏の數々す可からざるを言ふ也。夫れ戰つて暴子に勝ち八縣を割くは、此れ兵力の精に非ず、又計の工也巧なるにも非ず、天幸多

しとす。今、又、芒卯を走らし、北宅に入り、以て大梁を攻むる、是れ天幸を以て自ら常と爲すなり。智者は然らず。臣聞く、魏氏は其百縣の勝甲兵以上を悉して大梁を成ると。臣以爲ふに、其人三十萬に下らざるべし。三十萬の衆を以て、梁の七仞の城を守り。臣以爲ふに、湯武成湯復た生ずとも、攻め易からじ。夫れ輕々しく楚趙の兵に背き、七仞の城を陵ぎ、三十萬の衆と戰ひて、志必ず之を擧げんとす。臣以爲ふに、天地始めて分れてより以て今に至るまで、未だ嘗て有らざるものなり。攻めて拔けずば、秦の兵必ず能れ、陶邑魏侯ノ領地必ず亡びん。則ち前功、必ず弃れん。今、魏氏方に疑ふ、少しく割くを以て魏を收め可き也。願はくは君、楚趙の兵未だ梁に至らざるに逮んで、亟かに少しく割くを以て魏を收めよ。魏方に疑うて、少しく割くを以て利と爲すを得ば、必ず之を欲せん。則ち君の欲する所を得ん。楚趙、魏の己に先つを怒り、必ず爭うて秦に事へん。從、此を以て散せん。而して君、後に擇べ。且つ君の地を得る、豈に必ずしも兵を以てせんや。晉國を割かば、秦兵攻めずして魏は必ず絳、安邑を效

し、又、陶の爲めに兩道秦ヨリ陶ニ通ズル河内、河東ノ兩道を開かん。故の宋を盡すに幾し。衛は必ず單父を效さん。秦兵、全うして安全ナリ也君、之を制す可し。何を索めてか得ざらん、何を爲してか成らざらん。願はくは君之を熟慮して危きを行ふ無からんことをと。穰侯曰く、善しと。乃ち梁の圍を罷む。

明年、魏、秦に背き齊と從親す。秦、穰侯をして魏を伐たしむ。首を斬ること四萬、魏の將暴鳶を走らし、魏の三縣を得。穰侯益し封せらる。明年、穰侯、白起、客卿胡陽と與に、復た韓趙魏を攻めて、芒卯を華陽城の下に破り、首を斬ること十萬、魏の卷、蔡陽、長社及趙氏の觀津を取り、且に趙に觀津を與へ、趙に益すに兵を以てし、齊を伐たんとす。齊の襄王懼れ、蘇代をして齊の爲めに陰に穰侯に書を遣らしめて曰く、臣聞く、往來する者言つて曰く、秦、將に趙に甲四萬を益して以て齊を伐たんとすと。臣竊に之を弊邑の王齊に必めて曰く、秦王は明にして計に熟し、穰侯は智あつて事に習る。必ず趙に甲四萬を益して以て齊を伐たじと。是れ何ぞや。夫れ三晉韓趙魏の相與す

るは秦の深讎也。百たび相背き、百たび相欺くも、秦不信と爲さず、無行と爲さず。今、齊を破つて趙を肥す、趙は秦の深讎なり、秦に利あらず。此れ一也。秦の謀者は必ず曰はん、齊を破り、晉楚を弊らし、而る後、晉楚の勝を制せんと。夫れ齊は罷國也。天下を以て齊を攻むるは、千鈞の弩を以て潰離潰レ相ナを決するが如し、必ず死せん。安んぞ能く晉楚を弊らさん。此れ二也。秦少しく兵を出さば、則ち晉楚、信せず、多く兵を出さば、則ち晉楚、秦に制せられんとす。齊恐れば、秦に走らすして、必ず晉楚に走らん。此れ三也。秦、齊を削いて以て晉楚に啖はせ、晉楚、之を案するに兵を以てせば、秦反つて敵を受けん。此れ四也。是れ晉楚、秦を以て齊を謀り、齊を以て秦を謀る也。何ぞ晉楚の智にして、秦齊の愚なる。此れ五也。故に安邑韓を得て、以て善く之に事へよ。亦、必ず患無けん。秦、安邑を有せば、韓氏必ず上黨無けん。天下の腸胃トモ稱スを取ると、兵を出して其の反せざるヲを懼すと、孰れか利なる。臣故に曰く、秦王は明にして計に熟し、穰侯は智あつて事に習る。必ず趙に甲四萬を益して

以て齊を伐たじと。是に於てか穰侯行かず、兵を引いて歸る。昭王の三十六年、相國穰侯、客卿竈に言ひ、齊を伐つて剛壽を取り以て其陶邑を廣めんと欲す。是に於て、魏人范雎自ら張祿先生と謂つて、穰侯の齊を伐ち、乃ち三晉を越えて以て齊を攻むるを譏れるが、此時を以て奸下也めて秦の昭王に説く。昭王是に於て范雎を用ふ。范雎、宣太后の制權を專にし、穰侯の權を諸侯に擅にし、涇陽君、高陵君の屬の太だ侈りて王室よりも富めるを言ふ。是に於て、秦王悟り、乃ち相國を免じ、涇陽の屬をして、皆、關を出でて封邑に就かしむ。穰侯、關を出づる、輜車車千乘有餘。穰侯、陶に卒して、因つて葬むる。秦、復た陶を收めて郡と爲す。太史公曰く、穰侯は昭王の親舅叔にして、秦、東、地を益し、諸侯を弱め、嘗て帝を天下に稱し、天下皆西に郷向つて稽首せし所以のものは、穰侯の功也。其貴極り富溢るるに及び、一夫指ス范雎ヲ開説し、身折れ勢奪はれ、憂を以て死す。況んや羈旅の臣に於てをや。

白起王翦列傳 第十三

白起は、郿の人なり。善く兵を用ふ。秦の昭王に事ふ。昭王の十三年にして、白起、左庶長となり、將として韓の新城を撃つ。是の歲、穰侯冉、秦に相たり。任鄆を擧げて以て漢中の守と爲す。其明年、白起、左更となり、韓魏を伊闕に攻む。首を斬ること二十四萬、又其將、公孫喜を虜にし、五城を拔く。起、遷つて國尉と爲る。河を涉り、韓の安邑以東、乾河に至るまでを取る。明年、白起、大良造と爲り、魏を攻め、之を拔き、城を取ること小大六十一。明年、起、客卿錯と垣城を攻めて之を拔く。後五年、白起、趙を攻め、光狼城を拔く。後七年、白起、楚を攻め、鄢郢の五城を拔く。其明年、楚を攻め、鄆を拔き、夷陵を焼いて、遂に東、竟陵に至る。楚王亡げて鄆を去り、東に走つて陳に徙る。秦、鄆を以て南郡と爲す。白起遷つて武安君と爲る。武安君、因つて楚を取り、巫、黔中の郡を定む。昭王の三十四年、白起、魏を攻め、華

陽を抜き、芒卯を走らして、三晋の將を虜にし、首を斬ること十三萬。趙の將、賈偃と戦ひ、其卒二萬人を河中に沈む。昭王の四十三年、白起、韓の陘城を攻め、五城を抜く。首を斬ること五萬。四十四年、白起、南陽の太行道を攻めて之を絶つ。四十五年、韓の野王を伐つ。野王、秦に降る。上黨の道絶ゆ。其守馮亭、民と謀つて曰く、鄭の道已に絶えば、韓必ず^韓民たるを得可からず。秦の兵、日に進む、韓、應ずる能はず。如かず、上黨を以て趙に歸せんには。趙若し我を受けば、秦怒つて必ず趙を攻めん。趙、兵を被らば、必ず韓に親しまん。韓趙、一と爲らば、則ち以て秦に當る可しと。因つて人をして趙に報せしむ。趙の孝成王、平陽君、平原君と與に之を計る。平陽君曰く、受くる勿きに如かず。之を受くるの禍は、得る所よりも大ならんと。平原君曰く、故無くして一郡を得、之を受くる、便なりと。趙、之を受く。因つて馮亭を封じて華陽君となす。

四十六年、秦、韓の穰氏、^{共ニ}蘭^{邑名}を攻めて、之を抜く。四十七年、秦、左庶長^ナ王龔

をして韓を攻めしめ、上黨を取る。上黨の民、趙に走る。趙、長平に軍して、以て上黨の民を按據す。^{安シクテ趙ニ據}。四月、龔、因つて趙を攻む。趙、廉頗をして將たらしむ。趙軍の士卒、秦の斥兵^{斥候}を犯す。秦の斥兵、趙の裨將^副茄を斬る。六月、趙軍を陥れ、二鄣^{二關}、四尉^{四人}を取^取る。七月、趙軍、壘壁を築いて之を守る。秦又其壘を攻めて、二尉を取り、其陣を敗つて、西の壘壁を奪ふ。廉頗、壁を堅くして以て秦を待つ。秦數々戦を挑む、趙兵出でず。趙王數々以て讓^責むるを爲す。而して秦の相應侯^范又人をして千金を趙に行ひ^散、反間^{離間}を爲さしめて曰く、秦の惡む所は、獨り馬服の子、趙括が將たるを畏る、耳。廉頗は與し易し。且に降らんとすと。趙王既に、廉頗の軍多く失亡し、軍數々敗れ、又反つて壁を堅くして敢て戦はざるを怒り、又秦の反間の言を聞く。因つて趙括をして廉頗に代り將として以て秦を撃たしむ。秦、馬服の子、將たりと聞き、乃ち陰に武安君白起をして上將軍とし、王龔をして尉裨將たらしむ。軍中に令すらく、敢て武安君が將たるを泄す者有らば斬らんと。趙括至れば、則

ち兵を出して秦軍を撃つ。秦軍詳り敗れて走り、二奇兵を張つて以て之を劫かす。趙軍、勝を逐ひ、追うて秦壁に造る。壁堅く秦兵能く拒いで、入るを得ず。而して秦の奇兵二萬五千人、趙軍の後を絶つ。又一軍五千騎、趙壁の間を絶つ。趙軍分れて二と爲り、糧道絶ゆ。而して秦、輕兵を出して之を撃つ。趙、戦つて利あらず。因つて壁を築いて堅守し、以て救ひの至るを待つ。秦王、趙の食道絶えたりと聞き、王自ら河内に之を、民に爵各々一級を賜ひ、年十五以上者を發して、悉く長平に詣り、趙の救ひ及び糧食を遮絶せしむ。九月に至るまで、趙卒、食を得ざること四十六日、皆内、陰に相殺して食ふ。來つて秦の壘を攻め、出でんと欲して、四隊と爲り、四五回之を復返す。出づる能はず。其將軍趙括、銳卒を出して自ら搏戦す、秦軍射て趙括を殺す。括の軍敗る。卒四十萬人、武安君に降る。武安君計つて曰く、前に秦、已に上黨を抜きしも、上黨の民、秦民たるを樂しますして趙に歸す。趙卒は反獲す。盡く之を殺すに非ずんば、恐らくは亂を爲さんと。乃ち詐を挾んで盡く之を坑殺し坑中ニ投ゲ込、只其小者供二百

四十人を遺して趙に歸す。前後、首虜を斬ること四十五萬人。趙人大に震る。

四十八年十月、秦、復た上黨郡を定む。秦、軍を分ちて二と爲す。王龔は皮牢を攻めて之を抜き、司馬梗は太原を定む。韓趙恐れ、蘇代をして幣を厚くし秦の相應侯唯に説かして曰く、武安君は馬服の子を虜にせしかと。曰く、然りと。又曰く、秦即ち邯鄲を圍まんとするかと。曰く、然りと。曰く、趙、亡びば、則ち秦王、王となり、武安君、三公と爲らん。武安君、秦の爲めに戦ひ勝ち攻め取る所の者、七十餘城。南、邯、鄲、漢中を定め、北、趙括の軍を擒にす。周邵呂望周公旦、召公奭、太公望の功と雖も、此には益コトさじ。今、趙亡び、秦王、王たらば、則ち武安君必ず三公たらん。君能く之が下たらんか。之が下たるを欲する無しと雖も、固より已むを得じ。秦嘗て韓を攻め、邢丘を圍み、上黨を困む。上黨の民、皆反つて趙の爲めにす。天下秦の民たるを樂しまざるの日久し。今、趙を亡ぼし、北地は燕に入り、東地は齊に入り、南地は韓魏に入らば、則ち君が得る所の民、幾何人も亡げん。故に因つて之韓趙ト和に割かしめ韓趙ト和、以て武安君の

功と爲す無きに如かずと。是に於て、應侯、秦王に言つて曰く、秦兵、勞る。請ふ韓趙の地を割き以て和するを許し、且つ士卒を休めんと。王、之を聽き、韓の垣雍と趙の六城とを割かしめて以て和す。正月、皆兵を罷む。武安君之を聞き、是より應侯と隙有り。

其九月、秦、復た兵を發し、五大夫五等ノ大夫王陵をして趙の邯鄲を攻めしむ。是の時、武安君病んで行くに任へず。四十九年正月、陵、邯鄲を攻む。利少し。秦益々兵を發して陵を佐く。陵の兵、五校五人ノ將校を亡ウツレふ。武安君、病、癒ゆ。秦王、武安君をして陵に代り將たらしめんと欲す。武安君言つて曰く、邯鄲は實に未だ攻め易からず。且に諸侯の救ひ日に至らんとす。彼の諸侯は秦を怨むの日久し。今、秦、長平の軍を破りたりと雖も、而れども秦卒死する者、半に過ぎ、國內空し。而ニ遠く河山を絶えて、人の國都を爭ふ。趙、其内に應じ、諸侯其外を攻めば、秦兵を破らんこと必せり。不可と。秦王自ら命すれども行かず。乃ち應侯をして之を請はしむ。武安君終に辭し

て、行くを肯んせず、遂に病と稱す。秦王、王鮪をして陵に代つて將たらしむ。八九月、邯鄲を圍めども、拔く能はず。楚、春申君及び魏の公子をして、兵數十萬に將として秦軍を攻めしむ。秦軍多く失亡す。武安君言つて曰く、秦、臣の計を聽かず、今、如何と。秦王、之を聞いて怒り、彊ひて武安君を起たしむ。武安君、遂に病篤しと稱す。應侯之を請ふ。起たす。是に於てか武安君を免じて、士伍となし、之を陰密に遷す。武安君病んで、未だ行く能はず。居ること三月、諸侯、秦軍を攻むる急にして、秦軍數を却く。使者日に至る。秦王乃ち人をして白起を遣り、咸陽中に留まるを得ざらしむ。武安君既に行き、咸陽の西門を出づる十里、杜郵に至る。秦の昭王、應侯及其他群臣と議して曰く、白起の遷る、其意尙ほ快々觀として服せず。餘言有り怨言也。秦王、乃ち使者をして之に劍を賜うて自裁せしむ。武安君、劍を引いて將に自刺せんとして曰く、我、天に何の罪ありてか此に至ると。良久しうして曰く、我、固より當に死すべし。長平の戰に、趙卒降る者、數十萬人、我許つて盡く之を阬アキ殺

す。是れ以て死するに足ると。遂に自殺す。武安君の死するや、秦の昭王の五十年十一月を以てす。死して其罪に非ず。秦人之を憐む。郷邑皆祭祀す。

王翦は、頻陽の東郷の人也。少くして兵を好み、秦の始皇に事ふ。始皇十一年、翦、將として趙の閼與を攻めて之を破り、九城を抜く。十八年、翦、將として趙を攻め、歳餘にして、遂に趙を抜く。趙王降る。盡く趙の地を定めて郡と爲す。明年、燕、荆、軻をして賊を秦に爲さしむ。秦王、王翦をして燕を攻めしむ。燕王喜、遼東に走る。翦、遂に燕の薊を定めて還る。秦、翦の子、王賁をして荆楚を撃たしむ。荆兵敗る。還つて魏を撃つ、魏王降る。遂に魏の地を定む。秦の始皇既に三晋を滅ぼし、燕王を走らせ、而た數々荆の師を破る。秦將李信なる者、年少くして壯勇、嘗て兵數千を以て燕の太子丹を逐ひ、衍水の中に至り、卒に丹を破り得たり。始皇以て賢勇と爲す。是に於て始皇、李信に問ふ、吾、荆を攻取せんと欲す。將軍に於て度るに幾何人を用ひて足れりやと。李信曰く、二十萬人を用ふるに過ぎずと。始皇、王翦に問ふ。王翦曰

く、六十萬人に非ずんば不可と。始皇曰く、王將軍老いたり、何ぞ怯なるや。李將軍、果して勢、壯勇なり。其言、是也と。遂に李信及び蒙恬をして二十萬に將として南、荆を伐たしむ。王翦、言用ひられず。因つて病と謝し、歸りて頻陽に老居す。李信は平輿を攻め、蒙恬は寢を攻め、大に荆軍を破る。信又鄢郢を攻めて之を破る。是に於てか兵を引いて西し、蒙恬と城父に會す。荆人因つて之に隨ふ。三日三夜、頓を聞いて大に怒り、自ら馳せて頻陽に如き、王翦を見て謝して曰く、寡人、將軍の計を用ひざりしを以て、李信果して秦軍を辱しむ。今、聞く、荆兵日に進んで西すと。將軍病むと雖も、獨り寡人を弄つるに忍びんやと。王翦謝して曰く、老臣、罷病悖亂心亂レテ取す。唯だ大王、更に賢將を擇べと。始皇謝して曰く、已めよ。將軍、復た言ふ勿れと。王翦曰く、大王必ず已むを得ずして臣を用ひんとせば、六十萬人に非ずんば不可と。始皇曰く、將軍の計を聽くをせん耳と。是に於てか王翦、兵六十萬人に將た

り。始皇自ら送つて湖上に至る。王翦、行々美田宅園池を始皇請ふこと甚だ多し。始皇曰く、將軍行け。何を貧しきを憂へんと。王翦曰く、大王の將たる、功有れども終に封侯を得ず。故に大王の心臣に嚮ふに及び、臣も亦時に及んで以て園池を請ひ子孫の業を爲す耳と。始皇大に笑ふ。王翦既に關に至る。使をして還つて善田を請はしむるもの、五五畝なり。或ひと曰く、將軍の乞貸ホドコシテ、亦已ハナク甚しと。王翦曰く、然らず。夫の秦王は蠶也にして人を信せず。今、秦國の甲士を空しうして、専ら我に委ぬ。我多く田宅を請うて、子孫の業を爲し、以て自ら堅くせずして、願つて秦王をして坐して我を疑はしめんやと。王翦果して李信に代り荆を襲つ。荆、王翦が軍を益して來ると聞き、乃ち國中の兵を悉して以て秦を拒ぐ。王翦至る。壁を堅くして之を守り、戰ふを肯んせず。荆兵數々出で、戰を挑む。終に出でず。王翦日々士を休め、洗沐して善く飲食走し、之を撫循ウツコフして、親ら士卒と食を同じうす。之を久しうして王翦、人をして軍中に問はしむ。戲るるか。對へて曰く、投石超距トウシキチョウキョすと。是に

於て王翦曰く、士卒用ふ可しと。荆數々戰を挑めども、秦出でず、乃ち引いて東す。翦因つて兵を擧げ之を追ひ、壯士をして擊たしめ、大に荆軍を破り、蕘南蕘水に至つて、其將軍項燕を殺す。荆兵遂に敗走す。秦因て勝に乗じて荆地の城邑を略定す。歲餘にして、荆王負芻を虜にし、竟に荆の地を平らげ、郡縣と爲す。因つて南、百越の君を征す。而して王翦の子、王賁、李信と與に、燕齊の地を破り定む。秦の始皇二十六年、盡く天下を并す。王氏、蒙氏の功多しとなす。名、後世に施く。秦の二世の時、王翦及び其子賁皆已に死す。而して又蒙氏を滅ぼす。陳勝の秦に反する、秦、王翦の孫、王離をして趙を擊たしむ。趙王及び張耳を鉅鹿城に圍む。或ひと曰く、王離は秦の名將也。今、彊秦の兵に將とし、新造の趙を攻む。之を擧ぐることに必せりと。客曰く、然らず。夫れ將たること三世なる者は必ず敗る。必ず敗るものは何ぞや。其の殺伐する所多きを以て、其後孫、其不祥不吉を受くるなり。今、王離は已に三世の將たりと。居ること何トクも無く、項羽、趙を救うて秦軍を擊ち、果して王離を虜にす。王離

の軍遂に諸侯に降る。
 太史公曰く、鄙語に云ふ、尺も短き所あり、寸も長き所有りと。白起は敵を料り楚に合し、奇を出すこと窮まり無く、弊、天下に震ふ。然るに患を應侯に救ふ能はず。王翦は秦の將たり、六國を夷らぐ。是の時に當つて、翦、宿將たり、始皇之を師とす。然るに秦を輔け徳を建て其根本を固くする能はず。儉合荀合荀して容容ココヲヲを取りて以て身を物毀ゴするに至る。孫、王離に及んで、項羽の爲めに虜にせらる。亦宜ならずや。彼各々短き所有れば也。

孟子荀卿列傳 第十四

太史公曰く、余、孟子の書を読み、梁の惠王、何を以て吾が國を利せんとすると問ふに至りて、未だ嘗て書を廢して欺せずんばあらず。曰く、嗟乎、利は誠に亂の始也。夫子孔子罕罕に利を言ふものは、常に其原源を防ぐ也。故に曰く、利に放放つて行へば、怨多しと。天子より庶人に至るまで、利を好むの弊、何を以てか異ならんや。

孟軻は、鄒の人也。業を子思の門人に受く。道既に通じ、齊の宣王に游事す。宣王、用ふる能はず。梁に適く。梁の惠王、言ふ所を果さず。則ち見て以て迂遠にして事情に闊闊しとなす。是の時に當り、秦は商君を用ひて、國を富まし兵を彊くし、楚魏は吳起を用ひ、戦勝つて敵を弱め、齊の威王、宣王は、孫子田忌の徒を用ひて、諸侯東面して齊に朝す。天下方に合従連衡を務め、攻伐を以て質となす。而るに孟軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ。是を以て如く所の者合はず。退いて萬章孟子弟子の徒と、詩書を序し、

仲尼の意を述べ、孟子七篇を作る。
 其後、騶子の屬有り。齊に、三騶子有り。其前の騶忌は、琴を鼓するを以て威王に干
 む。因つて國政に及び、封せられて成侯と爲りて、相の印を受く。孟子に先だつ。其
 次の騶衍は、孟子に後る。騶衍、國を有つ者益々淫侈淫侈にして、徳を尙んで、大雅
詩ノ大雅ニシテ此處ニテハ直ニ文王武王等ヲ指スの之徳也を身に整へ、施して黎庶百姓に及びたる若くなる能はざるを
 嘆、乃ち深く陰陽天地間ノ二氣の消息消滅を觀て、怪迂の變、終始大聖の篇、十餘萬言を作
 る。其語、閔大閔遠不經不、必ず先づ小物を驗へ、推して之を大にし、垠無カキリきに至る。
 先づ今より以上、黃帝に至るまでを序す。學者の共に術術ぶる所道、大に世の盛衰
に並ぶ道ト世ノ盛衰トナリ。因つて其禮祥吉凶ノ前兆、度制政令ノ法典を載せ、推して之を遠くし、天地
 未だ生せず、窈冥奥深ク暗にして、考へて原多の可からざるに至る。先づ中國の名山、大
 川、通谷大、禽獸、水土の殖殖する所所、物類の珍とする所所を列し、因つて之
 を推して、海外の人の睹る能はざる所所に及ぼし、天地剖判天地ト分以來、五徳五徳

土金水 轉移し、治各々宜しき有つて、符應因果茲カの若きを稱引す。以爲はく、儒者の
 所謂中國は、天下に於て、乃ち八十一分して其一に居る耳。中國を名づけて赤縣神州と
 曰ふ。赤縣神州の内、自ら九州冀、兗、青、徐、揚、あり。禹の序する九州是れなり。禹ノ序スル九州ハ
 州數と爲すを得ず。中國の外に、赤縣神州の如き者、九あり。乃ち所謂九州也。是に於て
 神海小有り之を環る。人民禽獸能く相通する者莫し。一區の中の如き者、乃ち一州と
 爲す。此の如き者、九あり。乃ち大瀛海大有り其外を環る。天地の際極なりと。其の
 術ぶる皆此類也。然れども其歸歸を要するに、必ず仁義節儉、君臣上下六觀六觀の施
 行に止まる。始の濫濫なる耳。王公大人、初め其術を見、慨然慨然として
 顯つて其術化し、而而其後之を行ふ能はず。是を以て騶子、齊に重んぜらる。梁に適く。
 惠王郊迎して賓主の禮を執る。趙に適く。平原君、側行し敬意ヲ表シテて衣裝地ニ席を撤撤
 ふ。燕に如く。昭王、替替を擁し持て先驅し、弟子の座に列して業を受くるを請ひ、
 碣石宮を築き、身親ら往いて之を帥とす。主運書を作る。其の諸侯に遊びて尊禮せ

らるゝこと此の如し。豈に仲尼の陳蔡に菜色あり顔色スルナリ、孟軻の齊梁に困みしと
 同じからんや。故に武王は仁義を以て紂を伐つて王たり。伯夷は飢ゑて周の粟を食ま
 ず。衛の靈公、陳陳也兵を問ひしも、孔子は答へず。梁の惠王、孟軻謀つて趙を攻めんと
 欲し、孟軻は周周太王の君子ハ其ノ人ヲ愛フ所以チ邪國邪國を去りしを稱稱す。此れ豈に世俗に阿
 り苟くも合ふのみに意あらんや。方枘ハツゼイ四角四角を持して、圓鑿エンサク圓孔圓孔に内れんと欲す、其れ能
 く入らんや。或ひと曰く、伊尹は鼎を負うて湯を勉めて以て王たらしめ、百里奚は牛を
 車下に針うて、繆公用つて覇たり。先づ先方ノ合ふを作し、然る後、之を大道に引くと。
 騶衍、其言、不軌軌道ヲ逸ルと雖も、儻アツルひは亦牛鼎百里奚の意有りしならんか。騶衍より
 齊の稷下先生齊ノ威宣ニ王ノ時稷門ノ淳于髡下ニ集マレル學者ヲ云フ、慎到、環淵、接子、田駢、騶夷の徒の如
 きにおよぶまで、各々書を著はして治亂の事を言ひ、以て世主に干む。豈に道ふに勝
 ふ可けんや。

淳于髡は、齊の人也。博聞強記博ク讀シテ、口ツク、學は主とする所無し。其諫説人主ヲ諫説

嬰嬰の人と爲りを慕ふ。然れども人主意を承け人主ノ色を觀るを務と爲す。客有り、
 髡を梁の惠王に見えしむ。惠王、左右を屏シテけ、獨坐して再び之を見る。髡終に言ふ無
 し。惠王之を怪しみ、以て客を讓めて曰く、子の淳于先生を稱する、管嬰管仲も及ば
 ずと。寡人に見ゆるに及び、寡人未だ得る有らず。豈に寡人、言を爲すに足らざるか。
 何の故ぞと。客以て髡に謂ふ。髡曰く、固よりなり。吾前に王に見ゆ。王之志、驅逐驅逐
馬ヲ驅ルコトに有り。後、復た王に見ゆ。王之志、音聲音聲に有り。吾是を以て默然たりと。
 客具客具に以て王に報ず。王大に駭いて曰く、嗟乎、淳于先生は誠に聖人也。前に淳于先
 生の來る、人、善馬を獻する者あり。寡人未だ視るに及ばず。會々先生至る。後に先
 生の來る、人、謳者歌ヲ謳フ者を獻する者あり。未だ試むるに及ばず。亦會々先生來る。
 寡人、人を屏くと雖も、然れども私心、彼に在り。之れ有り。後、淳于髡見ゆ。豈
 たび語り、三日三夜を連ねて倦むこと無し。惠王、卿相の位を以て之を待たんと欲す。
 髡、因つて謝し去る。是に於て送るに安車安樂ニ乘ル掛ケラ、東帛加璧東ノ帛ニ璧ヲ添ヘ、黃

金百鎰を以てす。終身仕へず。

慎到は、趙の人、田駢、接子は、齊の人、環淵は、楚の人なり。皆黄老黃帝老子 道德の術を學び、因つて發明して其指意旨を序ぶ。故に慎到は十二論を著はし、環淵は上下篇を著はす。而して田駢、接子も皆論する所有り。

騶奭は、齊の諸騶子ノなり。亦頗る騶衍の術を采つて以て文を紀すナリ。是に於て齊王之を嘉す。淳于髡の如きより以下、皆命じて列大夫と曰ひ、爲めに第宅第宅を康莊の衢衢に開き、高門大屋に、之を尊寵す。天下の諸侯の賓客を覽るに、齊能く天下の賢士を致すと言ふ當時天下ノ諸侯ノ賓客ヲ養フ中ニ齊ハ實ニヨク天下ノ賢人ヲ集メタリトノ評判ヲ得タリ。

荀卿は、趙の人。年五十、始めて來つて齊に游學す。騶衍の術は迂大にして閑辯、詭は文具はれども實際施し難し。淳于髡は久しく與に處れば、時に善言を得るコあり。故に齊人、頌頌して曰く、天を談ずるの術、龍を雕る文ノ具ハハの詭、穀過穀過、穀ハ車ノを炙るの髡髡、髡ハ車ノと也。田駢の屬、皆已に死す。齊の襄王の時にし

て、荀卿最も老師たり。齊尙ほ列大夫の缺を脩め補て、荀卿三たび祭酒名と爲る。齊人或は荀卿を讒す。荀卿乃ち楚に適く。而して春申君以て蘭陵の令となす。春申君死して荀卿廢せらる。因つて蘭陵に家す。李斯嘗て弟子たり、已にして秦に相と爲る。

荀卿、濁世世の政、亡國亂君國ヲ亡ボシ道義ヲ亂ス國君相屬し相續、聖人大道を學遂げずして、巫カ祝男ノカに惑ひ、禮祥吉凶を信じ、鄙儒鄙ビタは小拘小節ニ拘し、莊周等の如きは、又滑稽滑稽にして俗風を亂るを嫉む。是に於て備墨墨者道德の行事、興壞興ツタリ壞トを推し、序列して數萬言を著はして卒す。因つて蘭陵に葬る。而して趙に亦公孫龍有り。堅白同異の辯を爲す。劇子の言あり劇子トイフ言論。宋ヨリシテ云。魏に李悝クワイの地力を盡くすの教あり富國強兵ノコト。楚に尸子長盧あり。阿地の吁子あり。孟子の如きより吁子に至るまで、世多く其書あり。故に其傳を論せずと云ふ。蓋し墨翟は、宋の大夫、善く城守禦して、用費を節約するを爲す。或ひと曰く、孔子の時に竝ぶと。或ひと曰く、其後に在りと。

孟嘗君列傳 第十五

孟嘗君、名は文、姓は田氏。文の父を靖郭君田嬰と曰ふ。田嬰は、齊の威王の少子にして、齊の宣王の庶弟^{妾腹ニ生}也。田嬰、威王の時より、職に任せられて事を用ふ。成侯鄒忌及び田忌と與に將として韓を救うて魏を伐つ。成侯、田忌と寵を争ふ。成侯、田忌を賣る。田忌懼れて、齊の邊邑を襲ひ、勝たずして亡走す。會々^{タテマ}威王卒して、宣王立つ。成侯の田忌を賣るを知る。乃ち復た田忌を召して以て將となす。宣王二年、田忌、孫臏、田嬰と俱に魏を伐ち、之を馬陵に敗り、魏の太子申を虜にし、魏の將、龐涓を殺す。宣王七年、田嬰、韓魏に使す。韓魏、齊に服す。嬰、韓の昭侯、魏の惠王と與に齊の宣王に東阿の南に會し、盟つて去る。明年、復た梁の惠王と甄^ヅに會す。是歲、梁の惠王卒す。宣王九年、田嬰、齊に相たり。齊の宣王、魏の襄王と徐州に會して相ひ王たり。楚の威王、之を聞いて田嬰を怒る。明年、楚、齊の師を徐州に伐ち

敗りて、人をして田嬰を逐はしむ。田嬰、張丑をして楚の威王に説かしむ。威王乃ち止む。田嬰、齊に相たること十一年。宣王卒す。湣王、位に即く。位に即いて三年にして、田嬰を薛^{セツ}に封ず。初め田嬰、子四十餘人有り。其賤妾に子あり、文と名づく。文、五月五日を以て生る。嬰、其母に告げて曰く、擧ぐる^{養育ス}勿れと。其母竊に擧げて之を生^{ソナリ}つ。長するに及び、其母、兄弟に因つて其子文を田嬰に見えしむ。田嬰、其母を怒つて曰く、吾、若^{カシ}をして此子を去てしむ。而るに敢て之を生つるは、何ぞやと。文、頓首し因つて曰く、君、五月の子を擧げざる所以のものは何の故ぞと。嬰曰く、五月の子は、長^{オキ}身戸と齊しくば、將に其父母に利ならざらんとすと。文曰く、人生は命を天に受くるか、將命を戸に受くるかと。嬰、默然たり。文曰く、必ず命を天に受けば、君何ぞ愛へん。必ず命を戸に受けば、則ち其戸を高くせん耳。誰か能く^{齊ニ}至る者ぞと。嬰曰く、子、休めよと。之を久しうして、文、間^{父ノ}折^ヒを承け、其父嬰に問うて曰く、子の子を何と爲すと。曰く、孫と爲すと。孫の孫を何と爲すと。曰く、玄孫と

爲すと。玄孫の孫を何と爲すと。曰く、知る能はずと。文曰く、君、事を用ひ齊に相
 たること今に至つて三王なり。齊、廣きを加へずして、君の私家、富萬金を累ぬれども、
 門下、一賢者を見ず。文聞く、將門ノ家必す將あり、相門ノ家必す相ありと。今、君の
 後宮妾ノ類、綺穀ヲヤを蹈んで、士は短褐粗末ナを得ず、僕妾は梁肉佳肉を餘して、士
 は糟糠にだも厭かず。今、君又尙ほ積蓄を厚うし、藏貯を餘し、以て知らざる所の何人
 にか遣らんと欲して、公家の事日に損するを忘る。文、竊に之を怪しむと。是に於
 てか、嬰乃ち文を禮して、家を主り賓客を待たしむ。賓客日に進み來ル、名聲、諸侯
 に聞ゆ。諸侯皆人をして薛公田嬰に請ひ、文を以て太子たらしむ。嬰之を許す。嬰卒
 す。諡して靖郭君とす。而して文果して代り薛に立つ。是を孟嘗君となす。
 孟嘗君、薛に在り、諸侯の賓客を招致す。亡人逃亡罪有る者に及るまで、皆孟嘗君に
 歸す。孟嘗君、業家を捨て厚く之を遇す。故を以て天下の士を傾く。食客數千人あり、
 貴賤と無く、一に文と等し。孟嘗君客を待つヲシテて坐語すれば、屏風の後に常に侍

史祐有り。君の客と語り客問ふ所のノ親戚、居處を記するを主る。客去る。孟嘗君、
 已に使をして其親戚を存問ハツトし獻遣せしむ。孟嘗君曾て客を待つて夜食す。一人
 有り、火の光に蔽はる。客怒るに飯の等しからざるを以てし、食を擧めて辭し去る。
 孟嘗君起つて自ら其飯を持し、之を比す。客慙ちて自到す。士此を以て多く孟嘗君に
 歸す。孟嘗君、客擇ぶ所無く皆善く之を遇す。人人各々自ら以て孟嘗君己に親しむと
 なす。秦の昭王、其賢を聞き、乃ち先づ涇陽君をして齊に質たらしめ、以て孟嘗君を
 見るを求む。孟嘗君、將に秦に入らんとす。賓客、其行くを欲するヲ莫し。諫むれど
 る聽かず。蘇代謂つて曰く、今日初今代、外より來る。木偶人木製ノ人形、土偶人土人ノ形と相與
 に語るを見る。木偶人曰く、天雨らば子將に敗れんとすと。土偶人曰く、我は土より
 生る。敗れば則ち土に歸せん。今、天雨り、子を流して行かば、未だ干止息する所を
 知らずと。今、秦は虎狼の國也。而して君往かんと欲す。如し還るを得ざるあらば、君、
 土偶人の爲めに笑はる、無きを得んやと。孟嘗君乃ち止む。

齊の湣王二十五年、復た卒に孟嘗君をして秦に入らしむ。昭王即ち孟嘗君を以て秦の相となす。人或は秦の昭王に説いて曰く、孟嘗君は賢にして又齊の族也。今、秦に相たるも、必ず齊を先にして秦を後にせん。秦其れ危からんと。是に於てか秦の昭王乃ち止む。孟嘗君を囚へ、謀つて之を殺さんと欲す。孟嘗君、人をして昭王の幸姫寵妾に抵り、解く救解を求めしむ。幸姫曰く、妾願はくは君の狐白裘狐ノ腋下ノ白毛ニテ作レル皮裘を得んと。此時孟嘗君、一狐白裘を有す。直千金、天下無雙。秦に入つて之を昭王に獻す。更に他の裘無し。孟嘗君之を患へ、徧く客に問ふ。能く對ふる莫し。而而最下の坐に能く狗盜狗ノ眞似ヲテ物ヲ盗ムコトを爲す者あり。曰く、臣、能く狐白裘を得んと。乃ち夜、狗となつて以て秦宮の藏中に入り、獻する所の狐白裘を取りて至る。以て秦王の幸姫に獻す。幸姫爲めに昭王に言ふ。昭王、孟嘗君を釋す。孟嘗君出づるを得て、即ち馳せ去る。封傳旅行券トモ云フベキモノを更め、名姓を變じて、以て關を出づ。夜半に函谷關に至る。秦の昭王、後に、孟嘗君を出すを悔い、之を求むれば已に去る。即ち人をして傳宿次を馳せ

之を逐はしむ。孟嘗君、關に至る。關の法トシ、鶏鳴いて客を出す。孟嘗君、追ふもの、至るを恐る。客の下坐に居る者、能く鶏鳴を爲す有あり、而して鶏並く鳴く。遂に傳傳を發して出づ。出で、食頃飯ナク食ハル間如り、秦の追ふもの果して關に至る。已に孟嘗君の出づるに後る。追乃ち還る。始め孟嘗君此二人を賓客に列するや、賓客並く之を差差つ。而而孟嘗君、秦の難あるに及び、卒に此二人、之を抜く。是よりの後、客皆服す。

孟嘗君、趙に過る。趙の平原君、之を客とす。趙人、孟嘗君の賢を聞き、出で、之を觀、皆笑つて曰く、始め薛公孟嘗君を以て魁然壯大雄偉ノ貌たりとなししに、今之を視れば、乃ち眇たる小丈夫耳と。孟嘗君、之を聞いて怒る。客與に俱にする者、車下り車下リテ斬ル也して、數百人を殺し、遂に一縣を滅ばして去る。齊の湣王、其の孟嘗君を遣りしを以て自得せず心安ラズ。孟嘗君至る。則ち以て齊の相となし、政を任す。孟嘗君、秦を怨み、將に齊ガ韓魏の爲めに楚を攻むるを以て、因つて韓魏と秦を攻めて、兵食を西周

に借らんとす。蘇代、西周の爲めに謂つて曰く、君、齊を以て韓魏の爲めに楚を攻むること九年、宛、葉オウ以北を取つて以て韓魏を彊うせしを、今復た秦を攻めて以て之韓魏を益し、韓魏は南、楚の憂ひ無く、西、秦の患ひ無くば、則ち齊は危からん。韓魏必ず齊を輕んじ、秦を畏れん。臣、君の爲めに之を危ぶむ。君、弊邑周をして深く秦に合せしめて韓魏ハ楚ヲ攻メテ君攻むる無く、又兵食を借る無きに如かず。君、函谷に臨むも秦攻むる無く、弊邑をして君の情を以て秦の昭王に謂はしめて曰へ。薛公孟嘗君は、必ず秦を破つて以て韓魏を彊うせじ。而其の秦を攻むる所は、王の、楚王をして東國を割いて以て齊に與へしめ、而して秦の、楚の懷王を出して以て和和を爲すことを欲すればなりと。君、弊邑をして此を以て秦に恵ましめよ。秦、破る、無くして東國を以て自ら免る、を得ば、秦必ず之を欲せん。楚王出づるを得ば、必ず秦を徳とせん。齊、東國を得ば、益々彊くして、薛孟嘗君世々患ひ無けん。秦大に弱からずして三晋の西に處らば、三晋必ず齊を重んせん。薛公曰く、善しと。因つて韓魏をして秦を

賀せしめ、三國をして攻むる無くして、兵食を西周に借らざらしむ。是の時、楚の懷王、秦に入り、秦之を留む。故に齊ニ必ず之を出さんと欲す。秦果して楚の懷王を出さず。

孟嘗君、齊に相たり。其舍人魏子、孟嘗君の爲めに邑入國カラ米を收む。三反三度して一入を致さず一度モ其年買米。チ收メ米メナリ。孟嘗君之を問ふ。對へて曰く、賢者有り、竊に之に假し與ふ。故を以て入を致さずと。孟嘗君怒つて魏子を退く。孟嘗君相トナリ居ること數年、人或は孟嘗君を齊の湣王に毀つて曰く、孟嘗君將に亂を爲さんとすと。田甲ガ湣王を劫かすに及び、湣王、意に孟嘗君を疑ふ。孟嘗君乃ち走る。魏子が粟年買を與へし所の賢者之を聞き、乃ち上書して言ふ、孟嘗君は亂を爲さず。請ふ身を以て盟を爲さんと。遂に宮門に自到して以て孟嘗君無キを明らかにす。湣王乃ち驚いて蹤跡を驗問す。孟嘗君果して反謀無し。乃ち復た孟嘗君を召す。孟嘗君因つて病を謝し、歸つて薛に老居す。湣王之を許す。

其後、秦の亡將^ナ呂禮、齊に相とし、蘇代を困めんと欲す。代乃ち孟嘗君に謂つて曰く、周最は齊に於て至つて厚し^{厚ク取扱ヘル可キ。密ノ人ナリノ意。}而るに齊之を遂うて、親弗^クに聴いて呂禮を相とするは、秦を取らん^{秦ノ歡心ナシ}こと欲すれば也。齊秦合は、則ち親弗と呂禮とは重からん、^呂齊に用ひられれば、秦必ず君を輕んせん。君、急に兵を北して趙に趨き、以て秦魏を和し、周最を收めて、以て行^行を厚く^當し、且つ齊王の^{周最ニ}信用を反し、又天下の變を禁ずるに如かず。齊^ニ秦^ニ無^クば、則ち天下^ノ齊に集まり、親弗必ず走らん。則ち齊王、^孰と與にか其國を爲めんと。是に於て孟嘗君其計に従ふ。而して呂禮、孟嘗君を嫉害す。孟嘗君懼れ、乃ち秦の相穰侯魏冉に書を遣つて曰く、吾聞く、秦、呂禮を以て齊を收めんと欲すと。齊は天下の疆國也。子必ず輕んせられん。齊秦、相取つて以て三晋に臨まば、呂禮必ず^{齊ト}并せ相たらん。是れ子、齊に通じて以て呂禮を重んずる也。若し齊^{秦ノ}天下の兵^攻を免れば、^{呂禮ハ益々齊ニ重クシテ}其の子を^離とすること必ず深からん。^子如かず、秦王に勸めて齊を伐たんには。齊破れば、吾

請ふ、得る所を以て子を封せん。齊破れば、秦、晋の強きを畏れん。秦必ず子を重んじて以て晋を取らん。晋國、齊^ノに弊えて秦を畏れば、晋必ず子を重んじて以て秦を取らん。是れ子、齊を破つて以て功を爲し、晋を挾んで以て重きを爲さん。是れ子、齊を破つて封^地を定め、秦晋交^{コト}子を重んせん。若し齊破れず呂禮復た用ひられば、子必ず大に窮せんと。是に於て穰侯、秦の昭王に言つて齊を伐つ。而して呂禮亡く。後、齊の湣王、宋を滅ぼして益々驕り、孟嘗君を去らんと欲す。孟嘗君恐れ、乃ち魏に如く。魏の昭王以て相となす。西、秦趙に合し、燕と共に伐つて齊を破る。齊の湣王亡^亡て^齊地に在り。遂に^齊死す。齊の襄王立つて、孟嘗君、中立して諸侯と爲り、屬する所無し。齊の襄王新に立つて、孟嘗君を畏れ、與に連和して復た薛公と親しむ。文、卒す。論して孟嘗君とす。諸子立つを争ふ。而して齊魏、薛を滅ぼす。^{之ガ}孟嘗の嗣絶えて後無し。

初め馮驩、孟嘗君、客を好むと聞き、^馮驩を^踏んで^貧困ナル^之に見ゆ。孟嘗君曰く、先

る金無きが爲め也。今、富給なる家富ナキ者には以て期を要し、貧窮なる者には券書を
 燻いて以て之を捐つ。諸君強めて飲食せよ。君有ること此の如し此ノ如キ君有り。豈に此ノ
 トイフニ同シ。如キ
 君負く可けんやと。坐者皆起つて再拜す。孟嘗君、馮驩が券書を燻くを聞き、怒つて
 使をして驢を召さしむ。驢至る。孟嘗君曰く、文の食客三千人、故に錢を薛に貸す。文
 の奉邑少くして、民尙は多く時を以て其息を興カさす。客の食足らざるを恐る。故に先
 生に請うて、之を收責せしむ。而ル聞く、先生、錢を得るや、即ち以て多く牛酒を具
 へて券書を焼くと。何ぞやと。馮驩曰く、然り。多く牛酒を具へずば、即ち畢く會する能
 はず。以て其有餘餘餘ア不足不足ト者を知る無けん。餘り有る者には爲めに期を要す。足ら
 ざる者は守つて之を責むること十年なりと雖も、息息ナ與與スココ息愈々多からんのみ。急に
 催せば即ち以て逃亡し、自ら之を捐てん。若し急に催して終に以て償ふ無くば、上上
 は則ち君、利を好んで士民を愛せずとなし、下下民は則ち上に離れ負債を抵むの名有ら
 ん。士民を厲まし君の聲聲を彰はす所以に非ず。無用無用ニシ虚債の券只名バカを焚き

得可からざるの虚計虚計ムガを捐て、薛の民をして君に親しんで君の善聲を彰はさしめん
 とす。君、何の疑か有ると。孟嘗君乃ち手を捐つて之を謝す。齊王、秦楚の毀に惑ひ、
 以て孟嘗君、名其主よりも高く、齊國の權を擅にすと爲し、遂に孟嘗君を廢す。諸客、
 孟嘗君の廢せられたるを見、皆去る。馮驩曰く、臣に車一乘以て秦に入る可き者を借
 せ。サス必ず君をして國に重んせられ、奉邑益々廣からしめん。可ならんかと。孟嘗
 君乃ち車幣車トを約して之を遣る。馮驩乃ち西、秦王に説いて曰く、天下の游士、軾軾
車ノ前に憑り鞞馬ノ胸ヲ約シを結び、西、秦に入る者は、秦を強うして齊を弱めんと欲
ノ橋木せざる無く、軾に馮り鞞を結び、東、齊に入る者は、齊を強うして秦を弱めんと欲せ
 ざる無し。此れ雄雌の國也。勢、兩立して共雄たらず。雄たる者は天下を得んと。秦
 王、隠ヒソカいて之に問うて曰く、何を以て秦をして雌たる無くして可ならしむると。馮驩
 曰く、王も亦齊の孟嘗君を廢せしを知るかと。秦王曰く、之を聞くと。馮驩曰く、齊
 をして天下に重からしむる者は孟嘗君也。而ル今、齊王、毀を以て之を廢す。其心怨

んで必ず齊に背かん。齊に背いて秦に入らば、則ち齊國の情、人事の誠、盡く之を秦に委せん。レバ齊の地得可き也。豈に直に雄たるのみならんや。君、急に使をして幣を載せて、陰に孟嘗君を迎へしめよ。時を失ふ可からず。如し齊、覺悟覚悟して復た孟嘗君を用ふる有らば、則ち雌雄の在る所、未だ知る可からずと。秦王大に悦び、乃ち車十乘、黄金百鎰を遣り、以て孟嘗君を迎ふ。馮驩辭して以て使者先に行る。齊に至り、齊王に説いて曰く、天下の游士、軾に憑り鞞を結び、東、齊に入る者は、齊を強うして秦を弱めんと欲せざる無く、軾に憑り鞞を結び、西、秦に入る者は、秦を強うして齊を弱めんと欲せざる無し。夫れ秦齊は雄雌の國、秦強ければ則ち齊弱し。此れ勢、兩つながら雄たらず。今、臣、竊に聞く、秦、使をして車十乘に黄金百鎰を載せて、以て孟嘗君を迎へしむと。孟嘗君西せずんば則ち止む、西、入つて秦に相たらば、則ち天下は之に歸し、秦、雄と爲り齊、雌たらん。雌たらば則ち臨淄、即墨危からん。王何ぞ秦の使の未だ到らざるに先だち、孟嘗君を復し之に邑を益し與へて、以

て之に謝せざる。孟嘗君必ず喜んで之を受けん。秦、強國と雖も、豈に以て人の國相を請うて之を迎ふ可けんや。レコ秦の謀を折いて、其弱彊の略計を絶つなりと。齊王曰く、善しと。乃ち人をして境國に至り秦の使を候はしむ。秦の使車適齊の境に入る。齊使、還り馳せて之を告ぐ。王、孟嘗君を召して、其相位を復して、其故邑の地を與へ、又益すに千戸を以てす。秦の使者、孟嘗君復た齊に相たりと聞き、車を還して去る。齊王、孟嘗君を毀廢してより、諸客皆去る。後召して之を復す。馮驩之を迎ふ。未だ到らず。孟嘗君太息して歎じて曰く、文、常に客を好み、客を遇する敢て失する所無く、食客三千有餘人ありしは、先生の知る所也。客、文の一日廢せられしを見、皆文に背いて去り、文を顧みる者莫し。今先生に頼りて其位に復するを得たり。客亦何の面目有つて復た文に見えんや。如し復た文に見ゆる者は、必ず其面に唾して大に之を辱しめんと。馮驩、轡轡を結び馬車下り拜す。孟嘗君、車を下り之に接して曰く、先生、客の爲めに謝するかと。馮驩曰く、客の爲めに謝するに非ず。君の言失失するが

爲めなり。夫れ物には必至有り、事には固然有り。君之を知るかど。孟嘗君曰く、愚
 不謂ふ所を知らずと。曰く、生者へ必ず死有るは、物の必至也。富貴なれば士多く、貧
 賤なれば友寡きは、事の固然也。君獨り夫の朝に市に趨く者を見ずや。明日、厨を側
 て門を争うて入るも、日暮の後、市朝を過ぐる者、臂を搦つて顧みず。是朝を好んで
 御を惡むに非ず。期する所の物其中に忘れればなり。今、君、位を失うて、賓客皆去
 る。以て士を怨んで、徒らに賓客の路を絶つに足らず。願はくは君、客を遇するこ
 と故の如くせよと。孟嘗君再拜して曰く、敬んで命に従はん。先生の言を聞く、敢て
 教を奉せざらんやと。

太史公曰く、吾嘗て薛に過る。其俗、閭里率ね暴桀粗暴の子弟多く、都魯と殊なり。其
 故を問ふ。曰く、孟嘗君、天下の任俠姦人を招致し、薛中に入る、蓋し六萬餘家な
 りと。世の孟嘗君、客を好み自ら喜べりと傳ふる、名や空しからず。

平原君虞卿列傳 第十六

平原君趙勝は、趙の諸公子諸公子一也。諸公子の中、勝、最も賢。賓客を喜む。賓客益し
 至る者數千人。平原君、趙の惠文王、及び孝成王に相たり。三たび相位を去り、三た
 び位に復す。東武城に封せらる。平原君の家樓、民家に臨む。民家に覺者覺者あり。繁
 散散として行いて氷汲む。平原君の美人、樓上に居り、臨み見て、大に之を笑ふ。明
 日、覺者、平原君の門に至り、請うて曰く、臣、君の士を喜むを聞く。士の千里を遠
 しとせずして至るものは、君の能く士を貴び妾を賤しむを以て也。臣、不幸にして罷
 癘癘の病腰曲リ背骨高あり。而して君の後宮後宮臨んで臣を笑ふ。臣願はくは臣を笑ふ者
 の頭を得んと。平原君笑つて應へて曰く、諾と。覺者去る。平原君笑つて曰く、此豈
 子を觀よ。乃ち一笑の故を以て吾が美人を殺さんと欲する、亦甚しからずやと。終に
 殺さず。居ること歳餘、賓客、門下、舍人、稍稍漸稍稍漸に引き去る者過半なり。平原君之

を怪しんで曰く、勝、諸君を待つ所以のもの、未だ嘗て敢て禮を失はず。而るに去るもの、何ぞ多きやと。門下の一人前み對へて曰く、君の覺を笑ふ者を殺さざるが以に、君を以て色女を愛し士を賤しむと爲して、士即ち去る耳と。是に於てか平原君乃ち覺者を笑へる美人の頭を斬り、自ら覺者に進め因つて謝す。其後門下乃ち復た稍稍に来る。是の時、齊に孟嘗有り、魏に信陵有り、楚に春申有り、故らに争ひ相傾けて以て士を待つ。秦の邯鄲を圍むや、趙、平原君をして救を求め楚に合從せしむ。平原君、食客門下の勇力文武備具する有る者二十人と偕にせんと約す。平原君曰く、文手平和をして能く勝を取らしめば則ち善し、文にして勝を取る能はずんば、則ち血を華屋の下に歌り武カサ以テ、効カスナ云、必ず従を定めて還るを得ん。士は外に索めず、食客門下に取りらば足らんと。十九人を得たり。餘は取る可き者なく、以て二十人に満つるなし。門下に毛遂なる者あり、前み平原君に自贊自分自身ヲ贊メル也して曰く、遂聞く、君將に楚に合從せんとし、食客門下二十人と偕にせんと約し、外に索めず。今、一人を少くと。

願はくは君即ち遂を以て員に備へて行けど。平原君曰く、先生、勝の門下に處ること此に幾年ぞと。毛遂曰く、此に三年と。平原君曰く、夫れ賢士の世に處るは、譬へば錐の囊中に處るが如し、其末立に見はる。今先生、勝の門下に處ること此に三年、而る右未だ先生ノ使爾ヲ稱誦する所有らず、勝未だ聞く所有らず。是れ先生有する所ノ才無き也。先生、能はず。先生留まれと。毛遂曰く、臣乃ち今日、囊中に處るを請ふ耳。若遂をして蚤く囊中に處るを得しめば、乃ち穎錐脱して出でたらん錐ノ利鈍ニテ突キ破リテ、全ク身挺出シテ顯ハレシ、其末の見はる、而已に非ざりしならんと。平原君、竟に毛遂と偕にす。十九人相與に之を目笑す。而して未だ發せず。毛遂、楚に至る比ほひ、十九人と論議す。十九人皆服す。平原君、楚と合從し、其利害を言ふ。日出でて之を言ひ、日中まで決せず。十九人、毛遂に謂つて曰く、先生堂上れと。毛遂、劍を按じ歷階階段ノ段ヲ一階トイシテ上り、平原君に謂つて曰く、從の利害は兩言して決する耳。今、日出で、從を言ひ、日中まで決せざるは何ぞやと。楚王、平原君に謂つて曰く、客は何爲る者ぞと。平原

君曰く、是れ勝の舎人也と。楚王叱して曰く、胡ぞ下らざる。吾乃ち而の君と言ふ。
 汝何爲る者ぞと。毛遂、劍を按じ前んで曰く、王の遂を叱する所以は、楚國の衆多勢を以て也。
 今、十歩の内、王、楚國の衆を恃むを得ず、王の命は、遂が手に懸れり。
 吾が君、前に在り。叱するは何ぞや。且つ遂聞く、湯は七十里の地を以て天下に
 王たり。文王は百里の壤地を以てして諸侯を臣とすと。豈に其士卒衆多ならんや。誠に
 能く其勢に據りて其威を奮へばなり。今、楚の地は方五千里、持戢士は百萬。此れ稱
 王の資也。楚の彊を以てせば、天下當る能はじ。
 白起は小豎子のみ。數萬の衆を率ゐ、師を興して以て楚と戦ひ、一戦して鄢郢を擧げ、再戦して夷陵を焼き、三
 戦して王の先人を辱しむ。此れ百世の怨にして、趙すら羞づる所なり、而るに王、惡
 むを知らず。合従するは楚の爲めにして趙の爲めにするに非ず。吾が君、前に在り。
 叱するは何ぞやと。楚王曰く、唯唯、誠に先生の言の若し。謹んで社稷を奉じて以て
 従はんと。毛遂曰く、従、定まるかと。楚王曰く、定まると。毛遂、楚王の左右に謂

つて曰く、雞狗馬の血を取り來れと。毛遂、銅盤を奉げて、跪いて之を楚王に進めて
 曰く、王、當に血を飲りて従を定むべし。次は吾が君、次は遂と。遂、従を殿上に定
 む。毛遂、左手に盤血を持して、右手に十九人を招いて曰く、公、相與に此血を堂下
 に飲れ。公等は錄錄碌碌ナリ小石ノ集リタル貌、所謂、人に因つて事を成す者也と。平原君已に従を
 定めて歸る。歸り趙に至つて曰く、勝、敢て復た士を相斷せず。勝、士を相する、多
 きは千人、寡きは百數多ク言ハバ千人少ク言ハバ百ヲ以テ數フベシ、自ら以爲へらく天下の士を失はずと。
 今乃ち毛先生に於て之を失す。毛先生一たび楚に至りて、趙をして九鼎禹ガ九枚ノ金ヲ取ツテ鑄タル鼎
 大呂周剛ノ大鐘、共ニ國ノ寶ニシテ天子ノ重ナル所よりも重からしむ。毛先生、三寸の舌を以て、百萬の師より
 も彊かりき。勝敢て復た士を相せずと。遂に以て上客となす。
 平原君、既に趙に返る。楚、春申君をして兵に將とし赴いて趙を救はしむ。魏の信陵
 君も亦晋鄙魏ノ大將の軍を矯奪君命ヲ以テ奪ルし、往いて趙を救ふ。皆未だ至らず。秦、急に
 邯鄲趙ノ都を圍む。邯鄲、急なり、且に降らんとす。平原君甚だ之を患ふ。邯鄲の傳舎

宿の吏の子^ナ李同、平原君に説いて曰く、君、趙の亡ぶるを憂へざるかと。平原君曰く、趙亡びば、則ち勝は勝と爲らん、何爲れを憂へざらんやと。李同曰く、邯鄲の民、骨を炊き子^ヲを取易へて食ふ。急と謂ふ可し。而るに君の後宮^妾は百を以て數へ、^{君婢}妾は綺縠^{アヤ}を被り、梁肉^{其米}を餘す。而るに民は褐衣^衣だも完からず、糲糠にだも厭かず。民困しみ兵盡き、或は木を剡^ツつて矛^{ハカ}矢と爲す。而るに君の器物鐘^鐘磬^磬樂器^{石ノ}は自若たり^{動カナイテ}。秦をして趙を破らしめば、君安んぞ是を有するを得ん。趙をして全きを得しめば、君何ぞ^是有する無きを患へん。今、君誠に能く夫人以下をして士卒の間に編入^編せしめ、功を分つて作^ナし、^君家の有する所^物、盡く散じて以て士を饗せば、士は其危苦の時に方れば徳し易き耳と。是に於て平原君之に従ひ、敢死の士三千人を得たり。李同、遂に三千人と與に秦軍に赴く。秦軍之が爲めに却く^{こと}三十里。亦楚魏の救至るに會し、秦兵遂に^戰罷む。邯鄲、復た存す。李同戰死す。其父を封じて李侯と爲す。

虞卿、信陵君の邯鄲を存するを以て、平原君の爲めに封を請はんと欲す。公孫龍之を聞き、夜駕して平原君に見えて曰く、龍聞く虞卿、信陵君の邯鄲を存するを以て、君の爲めに封を請はんと欲すと。之れ有りやと。平原君曰く、然りと。龍曰く、此れ甚だ不可なり。且つ王、君を擧げて趙に相とするは、君の智能を以て、趙國に有るなしとなすに非ず。東武城を割き君を封するは、君を以て功ありとなし、而して國人を以て勳なしとなすに非ず。乃ち君が^{趙王}親戚たるの故を以て也。君、相の印を受けて、無能を辭せず、地を割きて無功を言はざるは、亦自ら親戚たるの故を以て也。今、信陵君、邯鄲を存して^君封を請ふ。是れ親戚^{トシ}城を受けて、^{國人}功を計る也。是れ甚だ不可なり。且つ虞卿、其兩權^{兩大}を操る。即事成らば、^{封地}右券^{物件}を操りて以て^{報酬}責め、事成らずんば、虚名を以て君に徳せん^{恩ニキ}とす。君必ず聴く勿れと。平原君、遂に虞卿に聽かず。平原君、趙の孝成王十五年を以て卒す。子孫代る。後、竟に趙と俱に亡ぶ。平原君、厚く公孫龍を待つ。公孫龍善く堅白の辯を爲

す。鄒衍、趙を過り、至道を言ふに及び、乃ち公孫龍を細く。
 虞卿は、游説の士也。蹠草を躡み登ノ命を擔ひ、趙の孝成王に説く。一たび見えて黃
 金百鎰、白璧一雙を賜はり、再び見えて趙の上卿と爲る。故に號して虞卿と爲す。秦
 趙、長平に戦ひ、趙、勝たず、一都尉を亡ふ。趙王、樓昌と虞卿とを召して曰く、軍
 戦つて勝たず、尉復た死す。寡人、甲を束ねて之に趨かしめば何如と。樓昌曰く、益
 無し。重使を發し媾和を爲すに如かずと。虞卿曰く、昌の媾を言ふは、以て媾せずば
 軍必ず破れんとなせば也。而して媾を制するは秦に在り。且つ王の秦を論するや、秦趙
 の軍を破らんと欲すとするか、不らずとするかと。王曰く、秦は餘力を遣さず、秦趙
 必ず且に趙の軍を破らんと欲すと。虞卿曰く、王、臣に聴き、使を發し重資を出して
 以て楚魏に附け。楚魏、王の重資を得んと欲し、必ず吾が使を内れん。趙の使、楚魏
 に入らば、秦必ず天下の合従を疑ひ、且つ必ず恐れん。此の如くならば則ち媾乃ち爲
 る可しと。趙王聽かず。平陽君と媾をなし、鄭朱を發して秦に入る。秦、之を内る。

趙王、虞卿を召して曰く、寡人、平陽君をして媾を秦に爲さしむ。秦已に鄭朱を内る。
 卿、以て奚如となすと。虞卿對へて曰く、王、媾を得じ。軍必ず破れん。天下の
 戦勝を賀する者、皆秦に在り。鄭朱は貴人也。秦に入らば、秦王、應侯と必ず顯重し
 て以て天下に示さん。楚魏は趙の媾を爲すを以て、必ず王を救はじ。秦、天下の王を
 救はざるを知らば、則ち媾成るを得可からじと。應侯果して鄭朱を顯はし、以て天下の
 戦勝を賀する者に示す。終に媾を肯んせず。趙長平に大敗し、遂に邯鄲を圍まれ、天
 下の笑と爲る。秦既に邯鄲の圍を解いて、趙王入朝す、趙郝をして事を秦に約し、
 六縣を割いて媾せしむ。虞卿、趙王に謂つて曰く、秦の王を攻むるや、倦んで歸り
 しか。王、其力尙ほ能く進むも、王を愛して攻めざりきと以ふかと。王曰く、秦の我
 を攻むるや、餘力を遣さず。必ず倦むを以て歸りしならん。虞卿曰く、秦、其力を
 以て其の取る能はざる所を攻め、倦んで歸る。王又其力の取る能はざる所を以て、以
 て之に送る。是れ秦を助けて自ら攻むる也。來年、秦、復た王を攻めば、王、救ふ

無けん。王、虞卿の言を以て趙郝に告ぐ。趙郝曰く、虞卿誠に能く秦力の至る所を盡さんか。誠に秦力の進む能はざる所を知らば、此彈丸ドホの地も與へルニ、而シテ秦をして來年、復た王を攻めしめば、王、其内を割いて媾する無きを得んやと。王曰く、請ふ子に聽いて割かんも、子能く來年秦をして、復た我を攻めざらしむるを必せんかと。趙郝對へて曰く、此れ臣の敢て任ずる責任ナ所に非ず。他日昔三晉趙韓魏の秦に交はる相善かりしも、今、秦、韓魏に善くして王を攻む、コ王の秦に事ふる所以必ず韓魏に如かざればなり。今、臣、足下の爲めに負親の攻和親ニ負クトヨリを解き、關所を開き幣幣を通じ、交を韓魏に齊しうするも、來年に至つて王獨り攻を秦に取コトナらば、此れ王の秦に事ふる所以必ず韓魏の後に在るなり。此れ臣の敢て任ずる所に非ずと。王以て虞卿に告ぐ。虞卿對へて曰く、郝、言ふ、媾せずんば、來年秦、復た王を攻めん。王、其内を割いて媾する無きを得んやと。今、媾するも郝、又、以て秦の復た攻めざるを必する能はず。ハレ今ニ秦六城を割くと雖も、何の益かあらん。來年、復

た攻めば、又其力の取る能はざる所を割いて媾せん。此れ自ら盡くるの術也。媾する無きに如かず。秦、善く攻むと雖も、六縣を取る能はず、趙、守る能はずと雖も、終に六城を失はざらん。秦、倦んで歸らば、兵必ず罷れん。ハレ我、六城を以て天下心を收め、以て罷秦を攻む。是れ我、之城を天下に失うて、償を秦に取る也。吾が國尙ほ利あり。坐して地を割き自ら弱くして、以て秦を彊うするに孰れぞや。今、郝曰く、秦の韓魏に善くして趙を攻むるは、必ず、韓魏、趙を救はずして、王の軍の必ず孤たるを以爲へばなり。有、王の秦に事ふる、韓魏に如かざるが以也と。是れ王をして歲ごとに六城を以て秦に事へしむる也。即ち坐して城盡さん。來年、秦復た地を割くを求めば、王將に之に與へんとするか。與へずば、是れ前功を棄てて秦の禍を挑む也。之に與へば、則ち地にして之に給する無けん。語に曰く、彊き者は善く攻め、弱き者は守る能はずと。今坐して秦に聽く、秦兵弊れずして多く地を得ん。是れ秦を彊うして趙を弱くする也。益々彊きの秦を以てして、愈々弱きの趙を割く、其計故より止まず。

且つ王の地は盡くる有つて、秦の求めは已む無けん。盡くる有るの地を以て、已む無きの求めに給す、其勢必ず趙無けん。趙王、計、未だ定まらず。樓緩、秦より來る。趙王、樓緩と之を計つて曰く、秦に地を予ふるは何如。予ふる毋さと孰れか吉きと。樓緩、讓辭して曰く、此れ臣の能く知る所に非ずと。王曰く、然りと雖も試に公の私人トシテを言へと。樓緩對へて曰く、王も亦夫の公甫文伯の母事^{トシテ}を聞くや。昔公甫文伯、魯に仕へて、病んで死す。女子爲めに房^{トシテ}中にて自殺する者二人。其母之を聞いて、哭せず。其相室^{傳婦ノ類}曰く、焉んぞ子死して哭せざる者あらんと。其母曰く、孔子は賢人なるも、魯を逐はれしとき、是の人^{是人トイフハ子トセズ}シテ他人トシテ辭也隨はず。而今、死して婦人が爲めに自殺する者二人。是の如きは、必ず其の長者に於ては薄くして、婦人に於ては厚き也^{故ニ哭セズ}。故に母より之を言へば、是れ賢母なり。妻より之を言へば、是れ必ず妬妻たるを免かれじ。故に其言は一也、言ふ者異なれば、則ち人心變ず。今、臣、新に秦より來りて、予ふる勿れと言はば、則ち計に非ず。之を予へよと言はば、王の、

臣を以て秦の爲めにすと爲すを恐る、也。故に敢て對へず。^併臣をして大王の爲めに計るを得しめば、之地を予ふるに如かずと。王曰く、諾と。虞卿之を聞き、入つて王に見えて曰く、此れ飾説也。王脊^{ツツ}んで予ふる勿れと。樓緩之を聞き、往いて王に見ゆ。王、又虞卿の言を以て樓緩に告ぐ。樓緩對へて曰く、然らず。虞卿は其一を得て、其二を得ず。夫れ秦趙、難を構へ^{戰爭ヲ}スル也。天下皆説ふは、何ぞや。^{天下}曰く、吾且に彊きに因つて弱きに乘せんとすと。今、趙の兵、秦に困しむ。天下の戦勝を賀する者は、則ち必ず盡く秦に在り。故に亟^{イキヤク}に地を割いて和を爲し、以て天下を疑はしめて秦の心を慰むるに如かず。然らずんば、天下將に秦の強怒に因り、趙の弊に乗じて、之を瓜分せんとす。趙且に亡びんとす。何ぞ秦を之れ圖らんや。故に曰く、虞卿は其一を得て、其二を得ずと。願はくは王、此を以て之を決せよ。復た計る勿れと。虞卿之を聞き、往いて王に見えて曰く、危い哉、樓子の秦の爲めにする所以の者や。是れ愈々天下を^{趙ヲ}疑はしめ^ルニ^カて、何ぞ秦の心を慰めん、獨^{トク}其の天下に^趙弱きを示す

を言はずや。且つ臣の予ふる勿れと言ふは、固ら予ふる勿れには非ざる而已。秦、六城を王に索む。而るに王、六城を以て齊に賂へ。齊は秦の深讐也。王の六城を得ば、趙力を并せ西、秦を撃たん。齊の王に聽かんこと、使者辭の畢るを待たじ。則ち是れ王、之を齊に失うて、償を秦に取る也。而して齊趙の深讐、以て報ゆ可くして、天下に能く爲す有るを示す也。王、此を以て聲を天下發せば、兵未だ境を窺はずして、臣、秦の重賂手原キ 附賂の趙に至りて、反つて王に媾するを請ふ見ん。秦より媾和を爲さば、韓魏之を聞き、必ず盡く王を重んせん。王を重んせば、必ず重寶を出し、以て王に先んせん。韓魏先づ重寶ヲ以テ趙ト。ノ和親ヲ願ニ來ルナラン。則ち是れ王一舉して三國の親を結んで、秦と道場を易ふる也と。趙王曰く、善しと。則ち虞卿をして東、齊王に見えしめ、之と與に秦を謀る。虞卿未だ返らず、秦の使者已に趙に在り。樓緩之を聞いて、亡げ去る。趙、是に於て虞卿を封するに一城を以てす。

虞平原君居る之を頃して、魏趙從を爲さんと請ふ。趙の孝成王、虞卿を召して謀る。

に過る。平原君曰く、卿の從を論ずるを願ふと。虞卿入つて王に見ゆ。王曰く、魏、從を爲さんと請ふと。虞卿對へて曰く、魏過てりと。王曰く、寡人固より未だ之を許さずと。對へて曰く、王も過てりと。王曰く、魏、從を請ふと。卿曰く、魏過てりと。寡人未だ之を許さずと。又曰く、寡人過てりと。然らば則ち從は終に不可なるかと。對へて曰く、臣聞く、小國の大國と事に從ふや、利あれば則ち大國其福を受け、敗れば則ち小國其禍を受くと。今、魏、小國を以て其禍を請ふ、而して王、大國を以て其福を辭す。臣故に曰く、王過てり、魏も亦過てりと。竊に目ふに、從を爲す便なりと。王曰く、善しと。乃ち魏に合し從を爲す。

虞卿既に相、魏齊の故、魏齊ノ相ニイタル、虞卿齊ト梁ニ亡ケを以て、萬戸侯卿相の印を重んぜず、魏齊と與に間行微して、卒に趙を去り、梁に困しむ。魏齊、已にして死し、卿意を得ず。乃ち書を著はす。上は春秋を採り、下は近世を觀る。曰く、節義、稱號、揣摩、政謀、凡そ八篇。以て國家の得失を刺譏す。世に之を傳へて虞氏春秋と曰ふ。

太史公曰、平原君は翩翩たる輕華往濁世の佳公子也。然れども未だ治國大體を略大體ニ。味キ也。不す。鄙語に曰く、利は智をして昏からしむと。平原君、馮亭の邪説を貪り、趙をして長平の兵四十餘萬衆を陷らしめ、邯鄲幾んど亡ぶ。虞卿、一事を料り情を揣り、趙の爲めに畫策す。何ぞ其の工巧なるや。魏齊義情に忍びざるに及び、卒に大梁に困しむ、庸夫凡すら且つ其不可を知る、況んや賢人をや。然れども虞卿、窮愁するに非ざりせば、亦書を著はし以て自ら後世に見はる、能はざりしと云はんのみ。

信陵君列傳 第十七

魏の公子無忌は、魏の昭王の少子にして、魏の安釐王の異母弟也。昭王薨じて、安釐王位に即き、公子を封じて、信陵君となす。是の時、范雎、魏を亡げて秦に相たり。魏齊を怨むの故を以て、秦兵、大梁を圍み、魏の華陽下の軍を破り、芒卯を走らす。魏王及び公子之を患ふ。公子、人と爲り、仁にして士に下る。士は賢不肖と無く、皆謙して之に禮交し、敢て其富貴を以て士に驕らず。士、此を以て方數千里、争ひ往いて之に歸す。食客三千人を致致す。是の時に當り、諸侯、公子の賢にして客多きを以て、敢て兵を加へ魏を謀らざること十餘年なり。

公子、魏王と博博突す。而して北境、烽を傳へ擧げ、言ふ、趙の寇至り且に界に入らんとす。魏王、博を釋め、大臣を召して謀らんと欲す。公子、王を止めて曰く、趙王、田獵狩する耳。寇を爲すに非ずと。復た博する故の如し。王恐れ、心、博に在らず。

居る頃シテして、復た北方より來り傳言して曰く、趙王獵する耳。寇を爲すに非ずと。魏王大に驚いて曰く、公子、何を以て之を知ると。公子曰く、臣の客に能く趙王の陰事を探り得る者あり。趙王の爲す所は、客、輒ち以て臣に報ず。臣此を以て之を知ると。是の後、魏王、公子の賢能を畏れ、敢て公子に任ずるに國政を以てせず。魏に隱士あり。侯嬴と曰ふ。年七十。家貧にして大梁の夷門の監者たり。公子、之を聞き、往き請うて厚く之に遺らんと欲す。受くるを肯んせず。曰く、臣、身を脩め行を潔イサキうすること數十年。終に、監門に困しむの故を以てして、公子の財を受けずと。公子、是に於て乃ち酒を置き大に賓客を會す。坐定まる。公子、車騎を從へ左座を虚しうし、自ら夷門の侯生を迎ふ。侯生、弊衣冠を攝め、直ちに馬車上り、公子の上坐に載つて讓らず。以て公子の轡を執ると欲す。公子、轡を執る愈々恭し。侯生、又公子に謂つて曰く、臣に客あり。市屠市中ノ屠殺業者の中に在り。願はくは車騎を枉げて之に過れと。公子、車を引いて市に入る。侯生馬車下り、其客朱亥を見て俾倪睥睨し回ハス也。

故らコトに久しく立つて其客と語り、微に公子の顔シヤカを察するに、公子の顔色愈々和ぐ。是の時に當り、魏の將相、宗室、賓客、堂に滿ち、公子を待つて酒を擧げんとす。市人皆公子の轡を執るを觀、從騎皆竊に侯生を罵る。侯生、公子の顔色の終に變せざるを視、乃ち客を謝し朱亥ニ別レテ告ゲル也車に就いて家に至る。公子、侯生を引いて上坐に坐せしめ、徧く賓客に贊ツツ告ぐ。賓客皆驚く。酒酣にして、公子起つて壽を侯生の前に爲す前ニ出テ侯生ノ壽ル也。侯生因つて公子に謂つて曰く、今日、嬴の公子の爲めにする亦足れり。嬴は乃ち夷門の抱關者番門也也。而るに公子親しく車騎を枉げ、自ら嬴を衆人廣坐の中に迎ふ。宜しく過る所あるべからざるに、今公子を故らコトに之に過らしむ朱亥ヲ訪ヘルヲナイフ也。然れども嬴、公子の名を就さんと欲し、故らコトに久しく公子の車騎を市中に立て、客に過つて以て公子を觀しむ。公子愈々恭し。市人皆嬴を以て小人と爲して、公子を以て長者にして能く士に下ると爲すと。是に於て酒を罷む。侯生遂に上客と爲る。侯生、公子に謂つて曰く、臣の過る所の屠者朱亥、此子賢者なれども、世能く知る莫し。故に屠間に隱る

る耳と。公子往いて數々之に請ふ。朱亥故らに復た謝せず。公子之を怪しむ。魏の安釐王二十年、秦の昭王、已に趙の長平の軍を破り、又兵を進めて邯鄲を圍む。公子の姉は趙の惠文王の弟平原君の夫人たり。數々魏王及び公子に書を送り、救ひを魏に請ふ。魏王、將軍晋鄙をして十萬の衆を將ゐて趙を救はしむ。秦王、使者をして魏王に告げしめて曰く、吾、趙を攻めて且暮且に下さんとす。而して諸侯敢て救ふ者は、已に趙を抜かば、必ず兵を移して先づ之を撃たんと。魏王恐れて、人をして晋鄙を止めしむ。晋軍を留め鄴に壁し（最壁也、築ケテ也）、名は趙を救ふと爲し、實は兩端（二）を持して以て觀望す。平原君の使者の冠蓋（冠ハ、蔽ノ如キモノ、陸境トシテ、相續ク也）、魏に相屬し、魏の公子を讓めて曰く、勝、自ら公子（公子）に付き婚姻を爲す所以は、公子の高義、能く人の困を急に救フするを爲すが以なり。今、邯鄲、且暮、秦に降らんとして、魏の救ひ至らず。安くにか公子の能く人の困を急にする在りや。且つ公子縦ひ勝を輕んじ之を棄て、（趙）秦に降らしむとも、獨り公子の姉を憐れまざらんやと。公子之を患へ、數々魏王に請ひ、及び賓客

辯士、王に説くこと萬端なれども、魏王、秦を恐れて、終に公子に聽かず。公子自ら終に之を王に得る能はざるを度り、計るらく獨り生きて趙をして亡びしめじと。乃ち賓客に請うて、車騎百餘乘を約し、客を以て往いて秦の軍に赴き趙と俱に死せんと欲す。行いて夷門を過ぎ侯生を見、具に秦の軍に死せんと欲する所以の狀を告げ、辭決別して行く。侯生曰く、公子、之を勉めよ。老臣從ふ能はずと。公子行くこと數里、心に快からず。曰く、吾、侯生を待つ所以のもの備はる。天下聞かざる莫し。今、吾且に死せんとす。而るに侯生曾て一言半辭も我を送る無し。我豈に失ふ所有るか。復た車を引いて還り、侯生に問ふ。侯生笑つて曰く、臣固より公子の還るを知ると。曰く、公子は士を喜み、名、天下に聞ゆ。今、難（難也）あり、他端（別ニ奇策）無くして、秦の軍に赴かんと欲す、譬へば肉を以て餒虎（餓虎ニ）に投するが若く、何の功か之れあらん。尙ほ安くにか客を事とせん。然して公子の臣を遇する厚し。公子往いて臣送らず。是を以て公子の之を恨み復た返るを知る也と。公子再拜して因つて問ふ。侯生乃ち人を屏

け間語私して曰く、嬴聞く、晋鄙の兵符は、常に王の臥内に在り。而して如姫最も幸
 愛せられ、王の臥内に入出すと。如姫ナ力能く之を竊まん。嬴聞く、如姫の父、人に
 殺され、父ノに資す如姫之殺服ヲ著ること三年。王より以下、其父の仇を報ゆるを求め
 んと欲して、能く得る莫く、如姫、公子の爲めに泣く。公子ニサヘスガレコト公子、客を
 して其仇の頭を斬らしめ、敬んで如姫に進むと。如姫の公子の爲めにせんと欲する、
 必死も辭する所無けん。願ふに未だ路有らざる耳。公子誠に一たび口を開いて如姫
 に請は、如姫必ず許諾せん。則ち虎符虎形ノ兵符を得、晋鄙の軍を奪ひ、北、趙を救う
 て西、秦を却く。此れ五霸の伐攻也と。公子其計に従ひ、如姫に請ふ。如姫果して晋
 鄙の兵符を盗み、公子に與ふ。公子行く。侯生曰く、將、外に在りては、主の令も受
 けざる所あり、以て國家に便す。公子即し符を合すも、晋鄙、公子に兵を授けずして
 復た之を請は、事必ず危からん。臣が客、屠者朱亥、與に俱にす可し。此人は力
 士なり。晋鄙聴かば、大に善し、聴かずば、之を擊たしむ可しと。是に於て公子泣く。

侯生曰く、公子、死を畏るか。何ぞ泣くやと。公子曰く、晋鄙はウツサツ嗜嗜叱叱勇たる
 宿將なり。往くも聴かざるを恐る。必ず當に之を殺すべし。是を以て泣く耳。豈に死
 を畏れんやと。是に於て公子、朱亥に請ふ。朱亥笑つて曰く、臣は乃ち市井の刀を鼓
 する屠者なるを、公子親ら數々之を存存問、安否ナリす。而レ而レ報謝答禮ノ挨拶せざりし所以
 は、小禮用ふる所無きを以爲へば也。ニ今、公子、急有り。此れ乃ち臣が命生を效
 す捧ゲの秋也と。遂に公子と俱にす。公子過つて侯生に謝す。侯生曰く、臣宜しく従
 ふべし。老いて能はず。請ふ公子の行日を數へ、晋鄙の軍に至るの日を以て、北に郷
 つて自到して以て公子を送らんと。公子遂に行く。郷に至り、魏王の令を矯め魏王ノ命
矯ル、晋鄙に代る。晋鄙、符を合せて之を疑ひ、手を舉げ公子を視て曰く、今、吾、十
 萬の衆を擁し、境上に屯す。國の重任なり。今、單車來つて之に代るは、何如ぞやと。
公子、晋ナ聴く無からんと欲す。朱亥、四十斤の鐵椎を袖にカシ、晋鄙を椎殺す。公子遂
 に晋鄙の軍を將ゐ、兵を勒部し、令を軍中に下して曰く、父子俱に軍中に在るは、父は

歸れ。兄弟俱に軍中に在るは、兄は歸れ。獨子にして兄弟無きは、歸り父母養へと。
 選兵八萬人を得、兵を進めて秦軍を撃つ。秦軍解き去る。遂に邯鄲を救ひ趙を存す。趙
 王及び平原君、自ら公子を界に迎ふ。平原君、彌矢を負ひ、公子の爲めに先引導す。
 趙王再拜して曰く、古よりの賢人、未だ公子に及ぶ者有らずと。此の時に當つて、平
 原君敢て自ら人に比肩せず。公子、疾生と決別して軍に至る。疾生果して北に
 郷つて自到す。

魏王、公子の其兵符を盗み、矯つて晉鄙を殺すを怒る。公子亦自ら知る。已に秦を却け
 趙を存し、將をして其軍を將る魏に歸らしめ、而して公子は獨り客と興に趙に留まる。
 趙の孝成王、公子の晉鄙の軍を矯り奪ひて趙を存するを徳とし、乃ち平原君と計り、
 五城を以て公子を封せんとす。公子之を聞き、意、驕矜して自ら功とするの色あり。
 客、公子に説くもの有り。曰く、物に忘る可からざるあり。或は忘れざる可からざる
 あり。夫れ人、公子に徳あるは、公子忘る可からず。公子、人に徳あるは、公子の之を

忘れんを願ふ也。且つ魏王の令を矯め、晉鄙の兵を奪うて、以て趙を救ふ。趙に於て
 は則ち功有り。魏に於ては則ち未だ忠臣となさず。公子乃ち自ら驕りて之を功と
 す。竊に公子の爲めに取らずと。是に於てか公子立ち自ら責め、身容る、所無き
 者の若くなるに似たり。趙王、掃除して自ら迎へ、主人の禮を執り、公子を
 引いて西階に就かしむ。公子、側行辭讓して、東階より上る。自ら皇過を言ひ、魏
 に負き趙に功無きを以てす。趙王、酒に侍り暮に至るも、口、五城を獻するに忍びず。
 公子の退讓するを以て也。公子竟に趙に留る。趙王、鄙を以て公子の湯沐の邑と爲す。
 魏も亦、復た信陵を以て公子に奉す。

公子趙に留まる。公子、趙に處士あり、毛公は博徒に隠れ、薛公は賣漿家
 に藏ると聞き、公子、兩人を見んと欲す。兩人自ら匿れて、公子を見るを肯んせず。
 公子、在る所を聞き、乃ち間歩して往き、此兩人に従つて遊び、甚だ歡ぶ。平原君之
 を聞き、其夫人に謂つて曰く、始め吾、夫人の弟の公子は天下無雙と聞く。今、吾、

之を聞くに、乃ち妄りに博徒、賈業者に従つて遊ぶと。公子は妄人耳と。夫人以て公子に告ぐ。公子乃ち夫人に謝して去らんとす。曰く、始め吾、平原君の賢を聞く。故に魏王に負きて趙を救ひ、以て平原君心に稱ふ。而レ平原君の游は、徒に豪舉驕奢ナル舉動耳。士を求むるに不アツず。無忌、大梁に在る時より、常に此兩人の賢を聞く。吾趙に至つて、此兩人見ゆるを得ざるを恐る。無忌を以て之に従ひ遊ぶも、尙ほ其の我を欲せざるを恐る。而レ今、平原君乃ち以て差となす。其れ從游するに足らずと。乃ち裝旅して去らんとす。夫人具ツツに以て平原君に語ぐ。平原君乃ち冠を免じて謝し、固く公子を留む。平原君の門下之を聞き、半ば平原君を去つて公子に歸す。天下の士、復た往いて公子に歸す。公子、平原君の客を傾く。

公子、趙に留まり、十年歸らず。秦、公子の趙に在るを聞き、日夜、兵を出して東、魏を伐つ。魏王之を思へ、使をして往いて公子に請はしむ。公子、其の之を怒るを恐れ、乃ち門下を誠む。敢て魏王の使の爲めに通ずる者有らば、死せんと。賓客皆魏に背い

て趙に之く。敢て公子に歸るを勸むる莫し。毛公、薛公の兩人、往いて公子に見えて曰く、公子の、趙に重んぜられ名、諸侯に聞ゆる所以は、徒に魏有るを以て也。今、秦、魏を攻め、魏急にして公子恤へず。秦をして大梁魏を破りて、先王の宗廟を夷オモハラしめば、公子當に何の面目あつてか天下に立つべきと。語未だ卒ツクるに及ばず、公子立ろに色を變じ、車に告げ駕を趣ツツし、歸つて魏を救ふ。魏王、公子を見て、相與に泣いて、上將軍の印を以て公子に授く。公子遂に將たり。魏の安釐王三十年、公子、使をして遍く諸侯に告げしむ。諸侯、公子の將たるを聞き、各々將を遣り兵を將ゐて魏を救ふ。公子、五國の兵を率ゐて、秦軍を河外に破り、蒙鰲を走らし、遂に勝に乗じて秦軍を逐ひ、函谷關に至つて秦兵を抑ふ。秦兵敢て出でず。

是の時に當つて、公子の威、天下に振ふ。諸侯の客公子兵法を進む。公子皆之に名く。故に世俗、魏公子の兵法と稱す。秦王之を思へ、乃ち金萬斤を魏に行ひ散スル、晋鄙の客を求め、公子を魏王に毀らしむ。曰く、公子亡げて外に在ること十年。今、魏の將

たり。諸侯の將、皆屬す。諸侯、徒に魏の公子あるを聞き、魏王あるを聞かず。公子も亦此の時に因つて南面を定めて王たらんと欲す。諸侯は公子の威を畏れ、方に共に之を立てんと欲すと。秦、數々反間をして偽り賀せしむ。曰公子立つて魏王たるを得しや未だしやと。魏王、日に其毀を聞いて、信せざる能はず。後果して人をして公子に代つて將たらしむ。公子自ら再び毀を以て廢せらるゝを知り、乃ち病と謝して朝せず。賓客と長夜の飲を爲し、醇酒を飲み、多く婦女を近づけ、日夜、樂飲を爲すもの四歲。竟に酒を病んで卒す。其歲、魏の安釐王も亦薨す。秦、公子死せりと聞き、蒙蹇をして魏を攻めしめ、二十城を抜き、初めて東郡を置く。其後、秦稍く魏を蠶食し、十八歲にして魏王を虜にし、大梁を屠る。

漢高祖、始め微少なる時、數々公子の賢を聞く。天子の位に即くに及び、大梁を過ぐる毎に、常に公子を祠る。高祖十二年、黥布を擊つより還り、公子の爲めに、守家郡五家を置き、世世歳ごとに、四時春分、秋分、夏至、冬至を以て公子を奉祠す。

太史公曰く、吾、大梁の墟城廢を過ぎ、其の所謂、夷門を求問するに、夷門は城の東門也。其時天下の諸公子、亦士を喜む者有り。然れども信陵君が巖穴の隱者に接し下交を耻ぢざるは、以有るかな、名、諸侯に冠たる、虚しからざる耳、高祖之に過る毎に、民をして奉祠絶えざらしめしこと。

春申君列傳 第十八

春申君は、楚人也。名は歇、姓は黄氏。游學博聞なり。楚の頃襄王に事ふ。頃襄王、歇を以て辯辯オアとなし、秦に使はす。秦の昭王、白起をして韓魏を攻めしめ、之を華陽に敗り、魏の將芒卯を禽にす。韓魏、服して秦に事ふ。秦の昭王、方に白起をして韓魏と共に楚を伐たしむ。未だ行かず。而して楚の使ナ黄歇適秦に至り、秦の計を聞く。是の時に當り、秦、已に前に白起をして楚を攻めしめ、巫、黔中の郡を取り、鄢郢を拔き、東、竟陵に至る。楚の頃襄王、東に徙り、陳縣に治む。黄歇、楚の懷王の秦に誘はれて入朝し、遂に欺かれて、秦に留死せるを見る。頃襄王は其子なり。秦之を輕んず。壹たび兵を擧げて楚を滅ばすを恐る。歇乃ち書を上つり、秦の昭王に説いて曰く、天下、秦楚より強きは莫し。今聞く、大王、楚を伐たんと欲すと。此れ猶ほ兩虎相與に闘ふがごとし、兩虎相與に闘へば、鷙犬、其弊を受く。如かず楚を善く

せんには。臣請ふ其説を言はん。臣聞く、物其極至れば則ち反る。冬夏ノ如是也。致其極至れば則ち危ふし。累基ヲ基ヲ累メルト如キ是れ也。今、大國秦ナの地は、天下に徧く、其二垂西北ノを有つ。此れ生民ありてより已來、萬乘の地、未だ嘗て有らざるなり。昔先帝、文王、莊王の秦ト身親也。三世忘れず、地を齊に接して、以て從親の要要を絶つ。今、王、盛橋をして事を韓に守らしめ、守ニ事ノ起ルチ、盛橋、其地を以て秦に入る。是れ王、甲を用ひず、威を信へずして、百里の地を得。王、能と謂ふ可し。王又甲を擧げて魏を攻め、大梁の門を杜杜ぎ、河内を擧げ、燕、酸、棗、虛、桃を拔き、邢邢丘邢に入る。魏の兵、雲翔雲霞ノ如クして、敢て採採はす。王の功も亦多し。王、甲を休め衆を息め、二年にして後之を復し、又、蒲、衍、首首、垣垣を并せ、以て仁、平丘に臨む。黄、濟陽ニテ嬰城城守スして、魏氏服す。王又濮陽の北を割き、齊秦の要要を注注り、楚趙の脊を絶つ。天下五合六聚して敢て救はず。王の威も亦單單せり。王若し能く功を持し威を守り、攻取の心を細細けて、仁義の地を肥肥し、後の患無からしめば、三王、四

とするに足らず、五伯、六とするに足らじ。王若し人徒の衆を負み、兵革の強きに仗り、魏を毀つゝの威に乗じて、力を以て天下の主を臣とせんと欲せば、臣、其の後患有らんを恐る。詩に曰く、初め有らざるは靡し。克く終有るは鮮しと。易に曰く、狐、水を涉つて、其尾を濡ほす。狐ノ干水ヲ涉ルニ初メハ其尾ヲ濡ラスマツト用心スレド、彼岸ニト。此れ違スル瞬間ニ放心シテ尾ヲ濡ラストノ義、前ノ詩句ニ對スル喻也。此れ始の易く、終の難きを言へる也。何を以て其然るを知るや。昔、智氏智伯氏は趙を伐つゝの利を見て、榆次地名の禍を知らず。智伯榆次ニ殺サル、吳は齊を伐つゝの便を見て、千隧の敗を知らず。吳王千隧ニ敗死ス。此二國は、初め大功無きに非ざりしも、利に前に没溺して患を後に易りし也。吳の趙を信するや、從へて齊を伐ち、既に齊人に艾陵に勝ち、還つて趙王に三渚の浦に禽にせらる。智氏の韓魏を信するや、從へて趙を伐ち、晋陽城を攻め、勝つこと日有り。城ヲ攻メ落ス日近キ也。韓魏之に叛き、智伯瑤を鑿臺榆次ニ在リの下に殺せり。今、王、楚の毀れざるを妬んで、楚を毀るの韓魏を強うするを忘る。臣、王の爲めに慮つて取らざる也。詩に曰く、大武武王ナル者は遠きを宅めんとて涉らず。武王遠征セシト。此に従り之を

觀れば、楚國は援也、隣國は敵也。詩に曰く、趨趨往來ノ貌たる靈鬼靈鬼、犬に遇ひ之に獲らる。他人、心有り、余之を付度付度、ハカス。と。今、王、中道にして、韓魏の、王に善きを信す。此れ正に吳の越を信する也。臣之を聞く、敵は假借假借、借す可からず。す可からず、時は失ふ可からずと。臣、韓魏の辭を卑うし患を除いて、實は大國秦ヲ指スを欺かんと欲するを恐るゝ也。何となれば則ち王、韓魏に重世の徳徳、無クして、累世の怨有ればなり。無くして、累世の怨有ればなり。夫れ韓魏の父子兄弟、踵を接して秦に死する者、將に十世ならんとす。本國殘はれ、社稷ソコナ壞られ、宗廟毀たれ、腹を刳き腸を絶ち、頸を折り頤を摺摺、折る。き、首身分離し、骸骨を草澤草澤、野也。に暴し、頭顱僵仆僵仆、倒ル也。して、境に相望み、父子老弱、脰脰、首ノ後也。を係係、繋グ。け係ケル也手を束ね、群虜と爲る者、路に相及び、鬼神孤傷孤傷、傷ム也。し、血食する所無く祭リヲ受ケザルヲ云フ、人民、生を聊聊、少し。んせず、族類離散流亡し僕妾と爲る者、海内天下に盈満す。故に韓魏の亡びざるは、秦の社稷の憂也。而今、王之を資資、助ム。けて、與に楚を攻む、亦過たすや。且つ王の楚を攻むるや、將に惡惡、ハルシク。よりか兵を出さんとす。王將に路を仇讎の韓魏に借らんとするか、兵出

づるの日にして、王、其の返らざるを憂へん。是れ王、兵を以て仇讎の韓魏を資くる也。王若し路を仇讎の韓魏に借らすんば、必ず隨水の右壤を攻めん。隨水の右壤は、此れ皆廣川大水、山林谿谷、不食の地不生地也也。王、之を有つと雖も、地を得たりと爲さず。是れ王、楚を毀るの名有つて、地を得るの實無き也。且つ王、楚を攻むるの日は、四國必ず悉く兵を起して以て王に應せん。秦楚の兵、構へて離れず、魏氏將に出で、留、方輿、銍、湖陵、礪、蕭、相を攻めんとす。故宋故宋地必ず盡きん。齊人南面して楚を攻めば、泗上必ず擧がらん。此れ皆平原四達膏腴の地にして、齊韓魏獨り攻めしめ、王は楚を破り、以て韓魏を中國に肥して、齊を勤うせん。韓魏の強きは、以て秦に校抗するに足り、齊は南、泗水を以て境と爲し、東、海を負ひ、北、河に倚つて後患無からん。天下の國、齊魏より強きは莫し。齊魏は地を得、利を謀らて、詳り秦下吏に事へば、一年の後には、帝たる未だ能はざらんも、其の王秦の帝たるを禁するに於ては力餘り有らん。夫れ王の壤土の博き、人徒の衆き、兵革軍の強きを以てして、

壹たび事を擧げて怨を楚に樹て、遲也乃ち韓魏をして帝の重きを齊に歸せしむ。是れ王の失計也。臣、王の爲めに慮るに、楚に善くするに若くは莫し。秦楚合して一と爲り、以て韓に臨まば、韓必ず手を斂めん、王、施すに東山の險を以てし、帶ぶるに曲河の利を以てせば、韓必ず關内の侯たらん。是の若くして、王、十萬を以て鄭を成らば、梁氏寒心せん。許、鄆陵は、嬰城城守也して、上蔡、召陵は往來せざる也。此の如くせば魏も亦關内の侯たらん。王壹たび楚に善くして、兩萬乗の主を關内にし、地を齊に注たば、齊の右壤は手を拱拱也いて取る可き也。王の地、東四兩海を一經して、天下を要約せん。是れ燕趙は齊楚援無く、齊楚は燕趙援無き也。然る後、燕趙を危動し動かス也、直ちに齊楚を搖かさば、此四國は痛を待たずして服せんと。昭王曰く、善しと。是に於て乃ち白起を止めて韓魏に兵ヲ出謝し、使を發して楚に賂ひ、約して與國と爲る。黃歇、約を受けて楚に歸る。楚、歇をして太子完と入つて秦に質たらしむ。秦之を留むること數年、楚の頃襄王病む。太子、歸るを得ず。而して楚の太子は秦の相應

侯と善し。是に於て黄歇乃ち應侯に説いて曰く、相國誠に楚の太子に善きかと。應侯曰く、然りと。歇曰く、今、楚王、疾ヤヒに起たざるを恐る。秦、其太子を歸すに如かず。太子立つを得ば、其の秦に事ふる必ず重くして、相國を徳とする窮り無けん。是れ與國を親しんで萬乘ノ國ノ大を儲タマくるを得る也。若し歸さずんば則ち太子咸陽の一布衣一人を絶つは、計に非ざる也。願はくは相國之を熟慮せよと。應侯、秦王に以聞上す。秦王曰く、楚の太子の傳守役をして先づ往いて楚王の疾を問はしめ、返つて後之を圖らんと。黄歇、楚の太子の爲めに計つて曰く、秦の、太子を留むるや、以て利を求めんと欲する也。今、太子は力未だ以て秦を利するある能はざるなり。歇之を愛ふる甚し。而して陽文君の子二人、中楚ノ宮に在り。王若し大命命を卒へて太子在らすんば、陽文君の子必ず立つて後と爲り、太子は宗廟を奉ずるを得ざらん。如かず秦を亡亡げ、使者と俱秦に出でんには。臣請ふ止まりて死を以て之に當らんと。楚の太子因つて衣服を

變じ、楚の使者の御御と爲り、以て關を出づ。而して黄歇、舍を守る。常に爲めに病と謝す。太子已に遠く、秦追ふ能はざるを度り、歇乃ち自ら秦の昭王に言つて曰く、楚の太子已に歸り、出づること遠し。歇、死に當す。願はくは死を賜へと。昭王大に怒り、其自殺を聽さんと欲せり。應侯曰く、歇は、人臣と爲り、身を出して以て其主に殉ふ。太子立たば、必ず歇を用ひん。故に罪する無くして之を歸し以て楚に親しむに如かずと。秦因つて黄歇を遣る。歇、楚に至りて三月、楚の頃襄王卒して、太子完立つ。是を考烈王と爲す。

考烈王元年、黄歇を以て相と爲し、封じて春申君と爲し、淮北の地十二縣を賜ふ。後十五歳、黄歇之を楚王に言つて曰く、淮北の地は齊に邊す、其事急なり。請ふ以て郡と爲さば便ならんと。因つて淮北の十二縣を并せ獻じ、更メ封を江東に請ふ。考烈王之を許す。春申君因つて故の呉の城城に城城き、以て自ら都邑と爲す。春申君既に楚に相たり。是の時、齊に孟嘗君あり、趙に平原君あり、魏に信陵君あり、方に争ひ士に

下り、賓客を招致し、以て相傾奪し、國を輔け權を持す。春申君、楚の相たる四年、秦、趙の長平の軍四十餘萬を破る。五年、邯鄲を圍む。邯鄲、急を楚に告ぐ。楚、春申君をして兵に將とし往いて之を救はしむ。秦の兵亦去る。春申君歸る。春申君、楚に相たる八年、楚の爲めに北伐して魯を滅ぼし、又荀卿を以て蘭陵の令と爲す。是の時に當つて、楚復た強し。趙の平原君、人を春申君に使はす。春申君之を上舍に合せしむ。趙の使、楚に夸^誇らんと欲し、璫^{タウ}の簪^シを爲り、刀劍の室^室は珠玉を以て之を飾り、命を春申君の客に請ふ。春申君の客三千餘人、其上客は皆珠履を躡み、以て趙の使を見る。趙の使大に慙づ。春申君相たる十四年、秦の莊襄王立ち、呂不韋を以て相と爲し、封じて文信侯と爲す。^{文信侯}東周を取る。春申君相たる二十二年、諸侯、秦の攻伐已む時無きを思へ、乃ち相與に合從し、西、秦を伐つ。而して楚王、從の長たり。春申君、事を用ふ。函谷關に至る。秦、兵を出して諸侯の兵を攻む。^{諸侯皆敗走す。}楚の考烈王以て春申君を咎む。春申君此を以て益々疎んせらる。客に觀津の人朱英あ

り、春申君に謂つて曰く、人皆楚は強たれども君之を用ひて弱しと以ふ。其れ英に於ては然らず。先君の時秦に善きこと二十年、而して楚を攻めざりしは、何ぞや。秦、^巴陝の塞を踰えて楚を攻むるは不便、道を兩周に假り韓魏を背にして楚を攻むるは不可なればなり。今は則ち然らず。魏は且暮に亡びんとすれば、許、鄆陵を愛^愛む能はず、其許を魏割いて以て秦に與へつ、秦兵、陳を去ること百六十里なり、臣の觀る所の者は、^將秦楚の日に闘ふを見んと。楚、是に於て陳を去り、壽春に徙る。而して秦は衛を野王に徙し、東郡を作置す。春申君、此に由つて封に吳に就き、相の事を行ふ。楚の考烈王、子無し。春申君之を思へ、婦人の子に宜しき者を求め、之を進むる甚だ多し。卒に子無し。趙人李園、其女弟^妹を持つて、之を楚王に進めんと欲す、^其其の子に宜しからざるを聞き、久しくして寵母^{寵母}からんを恐る。李園、春申君に事へ舍人と爲るを求む。已にして謁歸^{謁ヲ請フテ歸ル也}し、故らに期^期を失ひ還り謁す。春申君、之が狀を問ふ。李園對へて曰く、齊王、使をして臣の女弟を求めしむ。臣、其使者と飲み、故に期

を失ふ。春申君曰く、婦納入るか。對へて曰く、未だしと。春申君曰く、見るを得可きかと。曰く、可なりと。是に於て李園乃ち其女弟を進む。即ち春申君に幸愛せらる。李園其の身身める有るを知る。李園乃ち其女弟と謀る。園の女弟春申君問を承け、以て春申君に説いて曰く、楚王の君を貴幸する、王兄弟と雖も如かざる也。今、君、楚に相たる二十餘年、而して王、子無し。即し百歳の後王死後、將に更に王兄弟を立てんとせば、則ち楚更に君君主を立つるの後、亦各々其故の親しむ所を貴ばん。君又安んご長く寵有るを得んや。徒に然るのみに非ず、君貴くして事を用ふる久しく、多く禮を王の兄弟に失ふ。兄弟誠に立たば、禍且に身に及ばんとす。何を以てか相の印、江東の封を保たんや。今、妾、自ら身身めるあるを知る、而して人知る莫し、妾、君に幸愛せられて未だ久しからず。誠に君の重きを以てして、妾を楚王に進めば、王必ず妾を幸せん。妾、天天に頼り子男子男有らば、則ち是れ君の子、王たる也。楚國盡く得可し。身、不測の罪に臨むに孰孰興ぞやと。春申君大に之を然りとし、乃ち李園の女弟を

出し讒んで合せしめ合ニ置クナリ、而して之を楚王に言ふ。楚王召し入れて之を幸す。遂に子男を生む。立て、太子と爲し、李園の女弟を以て王后と爲す。楚王、李園を貴び、園、事を用ふ。李園、既に其女弟を入れ、立ちて王后たり、子は太子たり。春申君の語泄れて益々驕らんを恐れ、陰に死士を養ひ、春申君を殺して以て口を滅さんと欲す。而して國人頗る之を知る者有り。春申君相たる二十五年、楚の考烈王病む。朱英、春申君に謂つて曰く、世に母望の福望マズンあり、又母望の禍あり。今、君、母望の世に處し、母望の王に事ふ。安んぞ以て母望の人無かる可けんやと。春申君曰く、何をか母望の福と謂ふと。曰く、君、楚に相たる二十餘年、名は相國と雖も、實は楚王也。今、楚王病み、旦暮且に卒せんとす。而して君、少主を相け、因つて代り立つて國に當ること伊尹、周公の如くし、王長じて政を反し、不レずんば即ち遂に南面して孤と稱して楚國を有たん。此れ所謂母望の福なりと。春申君曰く、何をか母望の禍と謂ふと。曰く、李園、國を治めざるも、君の仇仇也、兵を爲めずして死士を養ふの日久し。楚

王卒せば、李園必ず先づ入り、楹に據つて君を殺して以て口を滅さん。此れ所謂母望の禍なりと。春申君曰く、何をか母望の人と謂ふと。對へて曰く、君、臣を郎中宮中ノ吏に置き。楚王卒せば、李園必ず先づ入らん。臣、君の爲めに李園を殺さん。此れ所謂母望の人なりと。春申君曰く、足下之を置き。李園は弱人なり。僕又之に善し。且つ又何ぞ此に至らんと。朱英、言の用ひられざるを知り、禍の身に及ばんを恐れ、乃ち亡げ去る。後十七日、楚の考烈王卒す。李園果して先づ入り、死士を棘門の内に伏す。春申君、棘門に入る。園の死士、春申君を俛伏刺し、其頭を斬り、之を棘門の外に投ず。是に於て遂に吏をして盡く春申君の家を滅ぼさしむ。而して李園の女弟、初め春申君に幸せられて身ハタめる有りて、之を王に入れ、生む所の子なる者遂に立つ。是を楚の幽王と爲す。是の歳や、秦の始皇帝立つて九年、嫪毐ウカイ亦亂を秦に爲し、覺はれて其三族を夷ウツげられて、呂不韋廢せらる。

太史公曰く、吾、楚に適き、春申君の故城宮室を觀るに、盛んなるかな。初め春申君

の秦の昭王に説き、及身を出し太子を遣り歸すや、何を其智の明かなるや。後李園に制せらる、施セせるかな。語に曰く、當に斷すべくして斷せざれば、反つて其亂を受く。と。春申君、朱英を失するの謂か。

范 雎 蔡 澤 列 傳 第 十 九

范雎は、魏の人也。字は叔。諸侯に游説し、魏王に事へんと欲す。家貧しく、以て自ら資する無し。乃ち先づ魏の中大夫須賈に事ふ。須賈、魏の昭王の爲めに齊に使す。范雎從ふ。留まる數月、未だ報を得ず。齊の襄王、雎の辯口^口を聞き、乃ち人をして雎に金十斤、及び牛酒を賜はしむ。雎、辭謝して、敢て受けず。須賈之を知り、大に怒り、雎、魏國の陰事を持つて齊に告ぐ、故に此^物を得ると以爲ひ、雎をして其牛酒を受け、其金を還さしむ。既に歸り、心に雎を怒り、以て魏の相に告ぐ。魏の相は、魏の諸公子^{ニシテ}一人、魏齊と曰ふ。魏齊大に怒り、舍人をして雎を管鑿^{管鑿}せしめ、脅骨^{脅骨}を折り齒を摺^{ツク}く。雎佯はり死す。即ち卷くに簧^簧を以てし、廁^{ヤカハ}中に置く。賓客飲む者酔うて更^{カガク}々雎に溺^{イバ}りし、故らに僂辱^{ハツカシ}して以て後を懲らし、妄言する者無からしむ。雎、簧中より守者に謂つて曰く、公能く我を出さば、我必ず厚く公に謝

せんと。守者乃ち簧中の死人を出し棄てんと請ふ。魏齊酔うて曰く、可なりと。范雎出づるを得たり。後に魏齊悔い、復た^{守者}召して之を求めしむ。魏人鄭安平之を聞き、乃ち遂に范雎を操りて亡げて、伏匿す。名姓を更めて張祿と曰ふ。此の時に當り、秦の昭王、謁者王稽を魏に使はす。鄭安平、詐りて卒となり、王稽に侍す。王稽問ふ、魏に賢人の與に俱に西に遊ぶ可き者有りやと。鄭安平曰く、臣が里中に張祿先生あり、君に見えて天下の事を言はんと欲す。其人、仇あり、敢て盡見えずと。王稽曰く、夜、與に俱に來れと。鄭安平、夜、張祿と與に王稽を見る。語未だ究まらず、王稽、范雎の賢を知り、謂つて曰く、先生、我を三亭^{魏ノ境}の南に待てと。與に私^{ヒツカ}に約して去る。王稽、魏を辭して去るや、過つて范雎を載せ、秦に入る。湖關に至り、車騎の西より來るを望見す。范雎曰く、彼の來る者は誰と爲すと。王稽曰く、秦の相穰侯の東のかた縣邑^邑を行るなりと。范雎曰く、吾聞く、穰侯、秦の權を專にし、諸侯の客を内る^レを惡むと。是れ恐らくは我を辱しめん。我寧ろ且^レ車中に匿れんと。

頃ありて、穰侯果して至り、王稽を勞ふ。因つて車を立て、語つて曰く、關東に何の變あると。曰く、有るなしと。又王稽に謂つて曰く、謁君、諸侯の客子客と俱に来る無きを得んや。客客子益無し、徒に人の國を亂す耳と。王稽曰く、敢てせずと。即ち別れ去る。范雎曰く、吾聞く、穰侯は智士也と。其の事を見るや遅し。郷者車中に人あるを疑ひ、之を索むるを忘ると。是に於て范雎、車を下り走つて曰く、此れ必ず之を悔いんと。行くこと十餘里、果して騎をして還り、車中を索めしむ。客なし。乃ち已む。王稽、遂に范雎と與に咸湯に入る。已に使を報じ、因つて言つて曰く、魏に張祿先生あり、天下の辯士也。曰ふ、秦王の國は、累卵よりも危ふし。臣を得ば則ち安からん。然れども書を以て傳ふ可からざる也と。臣故に載せて來ると。秦王信せず、舍して草具粗食野菜ノ器具、下を食はしむ。唯命を待つ歳餘なり。

是の時に當り、昭王已に立つて三十六年、南、楚の郢都を拔く。楚の懷王、秦に幽レテ死す。秦、東、齊の湣王を破り、常カク通トて帝と稱す、後之帝を去る。數々三晉を困

む。天下の辯士を厭うて、信する所なし。穰侯、華陽君は昭王の母ナ宣太后の弟にして、涇陽君、高陵君は、皆昭王の同母弟也。穰侯、相たり、三人の者更々將として封邑を有つ。太后の故を以て、私家の富、王室よりも重し。穰侯、秦の將と爲り、且に韓魏を越えて齊の綱壽を伐たんと欲せんとし、以て其陶の封を廣めんと欲するに及び、范雎、乃ち書を上つて曰く、臣聞く、明主の政を立つるや、功ある者は賞せざるを得ず、能ある者は官にせざるを得ず、勞大なる者は其祿厚く、功多き者は其爵尊く、能く衆を治むる者は其官大なり。故に能なき者は敢て職に當らず、能ある者も亦蔽隠するを得ずと。臣の言を以て可と爲さしめば、願はくは行うて益々其道を利也せよ。臣の言を以て不可と爲さば、久しく臣を留むるも、爲す無き也。語に曰く、庸凡主は愛する所を賞して惡む所を罰す、明主は則ち然らず、賞は必ず功あるに加へて、刑は必ず罪あるに斷すと。今臣の何は以て堪堪ハ質質ハ莖莖ハ構構ハ貫貫ハ對對ハ刃刃ハに當るに足らずして、要要ハ也也ハ以て斧鉞サカノ、マを待つテ斧鉞ナに足らず其卑賤ニシテ殊チ加フ。豈に敢て疑事を以て王に嘗試試みん

や。王^者 臣を以て賤人と爲して輕辱す雖も、獨り臣を任^保する者^王の王に反復^反す
ること無きを重んぜざらんや。且つ臣聞く、周に砥^石あり、宋に結^絲あり、
梁に縣^黎あり、楚に和^朴あり。此四寶は、土地の生ずる所、良工の^明失
ふ所^{シテ}、而も天下の名器たりと。然らば則ち聖王の奔つる所の者、獨り以て國家
を厚^カんにするに足らざらんや。臣聞く、善^クく家を厚^カんにする者は、之^有を國に取^リ、
善^クく國を厚^カんにする者は、之^を諸侯に取ると。天下、明主あれば、則ち諸侯、擅^ニ厚
んにするを得ざるは、何ぞや。其^諸侯^ノ國^ノ策^者の策を削^クが爲め也。良醫は病人の死生
を知り、聖主は成敗の事に明かなり。利なれば則ち之を行ひ、害あれば則ち之を舍て、
疑はしきは則ち少しく之を嘗^ハむ。舜禹、復た生すと雖も、之^ヲ改むる能はざる已。語の
至れる者は、臣敢て之を書に載せず、其淺き者は、又聽くに足らざるなり。意者臣愚
にして王の心に概^感せざるか、^將其の臣を言ふ者^王指^ス賤にして^從用^テふ可からざ
る^レにからんや。然るに非ざるよりは、臣願はくは少しく游^觀の間を賜ひ、顔色を望見

するを得ん^謁見^テ。一語、効無くんば、請ふ斧^質に伏せん^諫と。
是に於て秦の昭王大に説び、乃ち王稽に謝し^中傳^言、傳車を以て范唯を召さしむ。是
に於て范唯乃ち離宮に^王見^ルゆるを得、^詳述^スりて永巷^宮中^ノを知らざる爲して、其
中^永巷^中に入る。王來る。而して宦者^人怒り之を逐うて曰く、王至ると。范唯繆はり爲
て曰く、秦安んぞ王^ヲを得ん、秦には獨り太后^ト穰侯^トある耳と。以て昭王を感怒せ
しめんと欲す。昭王至り、其^唯の宦者と争言するを聞く。遂に延き迎へ謝して曰く、
寡人、身を以て命^命を受く宜きや久し。而^ル會^々義渠^國の事急にして、寡人、且
妻、自ら太后に請ふ。今や義渠の事已む。寡人乃ち命を受くるを得、竊に^思闕^然暗
不敏なれども、敬んで賓主の禮を執らんと。范唯辭讓す。是の日、范唯の見ゆるを觀
る者、群臣、洒^然懼^恐として色を變じ容を易へざるは莫かりき。
秦王、左右を屏く。宮中虚しくして人無し。秦王^跪いて請うて曰く、先生何を以て
幸に寡人に致ふると。范唯曰く、唯唯^{ハイ}と。間あつて、秦王復た跪いて請うて曰く、

先生何を以てか幸に寡人に教ふると。范唯曰く、唯唯と。是の若くする者三たび、秦王隠いて曰く、先生卒に幸に寡人に教へざるかと。范唯曰く、敢て然るに非ざる也。臣聞く、昔者呂尙の文王に遇ふや、身、漁父と爲つて涓涓に釣る耳。是の若くなれば交り疎き也。已に説んで立て、太師と爲し、載せて與に俱に歸る者は、其言深き也。故に文王遂に功を呂尙に收めて、卒に天下に王たりと。郷に文王をして呂尙を疎んじて、與に深く言はざらしめば、是れ周、天子の徳無くして、文武、與に其王業を成す無かりしならん。今臣は穉旅の臣也。交り王に疎くして、而も陳するを願ふ所の者は、皆君を匡すの事、人の骨肉の間に處す。愚忠を効さんと願ふも、未だ王の心を知らず。是れ王が三たび問うて敢て對へざる所以のもの也。臣畏る、有つて敢て言はざるに非ず。臣、今日之を前に言つて明日誅に後に伏するを知る。然れども敢て避けざるなり。大王、信に臣の言を行は、死すとも以て臣の患と爲すに足らず、亡ぶとも以て臣の憂と爲すに足らず、身に漆し、腐と爲り、髪を被りて狂狂と

爲るとも、以て臣の耻と爲すに足らじ。且つ五帝の如聖人を以てして死し、三王の如仁者にして死し、五伯の如賢人にして死し、鳥獲、任鄙の如力變者にして死し、成荆、孟賁、王慶忌、夏育の如勇者にして死す。死は人の必ず免かれざる所なり。必然の勢に處し、以て少しく秦に補ある可くんば、此れ臣の大に願ふ所也。臣又何をか患へんや。伍子胥は囊載（ツクコロ）して、昭關を出で、夜行き盡伏して、陵水に至る。以て其口を劔する無し（食盡キ。巴ムチ。得ズ。シ也）。膝行（膝ニテスリ。行クナリ）。蒲伏（匍伏也）。稽首（頭チ地ニ附ケルナリ）。肉袒（膚ヲ脱シ、シ也）。腹を鼓し篳篥を吹き、食を呉の市中に乞ふ。卒に吳國を興し、閭閻を伯（覇）とせり。臣をして謀を盡すこと、伍子胥の如くなるを得しめば、之に加ふるに幽囚（獄舎ニ繫ガレル也）を以てし、終身復た見えずとも、是れ臣の説行はる、也。臣又何ぞ憂へん。箕子、接輿は、身に漆して腐と爲り、髪を被りて狂と爲りしも、ハ主に益無かりき。假ひ臣をして行ひを箕子に同じうするを得しむとも、以て賢とする所の主に補ある可くんば、是れ臣の大榮なり。臣何の耻かあらん。臣の恐る、所の者は、獨り臣が死するの後、天下、臣の

忠を盡して而かも身死するを見、因つて是を以て口を杜^ツぎ足を喪^ツみ、背^アて秦に郷^ハふ^ハ莫^クからんを恐る、耳。足下、上は太后の嚴を畏れ、下は姦臣の態に惑ひ、深宮の中に居り、阿保^シ守の手を離れず、終身迷惑し、與に姦を昭かにする無くば、大にしては宗廟滅^ス覆し、小にしては身以て孤危^クせん^クナル也。此れ臣の恐る、所耳。夫の窮辱の事、死亡の患の若きは、臣敢て畏れざる也。臣死して秦治まらば、是れ臣の死は生に賢れり。

秦王聽いて曰く、先生是れ何の言ぞや。夫れ秦國は僻遠、寡人は愚不肖なり。先生乃ち幸に辱く此に至る。是れ天、寡人を以て先生を恩^カして、先王の宗廟を存する也。寡人、命を先生に受くるを得る、是れ天の、先王に幸して其孤を弃てざる所以也。先生奈何なれば言是の若きぞ。事、小大と無く、上は太后に及び、下は大臣に至るまで、願はくは先生悉く以て寡人に教へよ。寡人を疑ふ無かれと。范雎拜す、秦王も亦拜す。范雎曰く、大王の國は、四塞以て固めと爲す。北には甘泉、谷口^{共ニ}あり、南には涇渭

涇水^ヲを帶び、隴、蜀を右にし、關阪を左にす。奮擊百萬、戰車千乘あり。利なれば則ち出で、攻め、利ならざれば則ち入つて守る。此れ王者の地也。民は私闘に怯にして、公戦に勇む。此れ王者の民也。王は此二者を并せて之を有つ。夫れ秦卒の勇、車騎の衆を以て、以て諸侯を治む、譬へば韓盧^犬を馳せて蹇兔^ノを搏つが若し。霸王の業致す可き也。而るに群臣、其位に當る莫く、今に至るまで關を閉づること十五年、敢て兵をして山東を窺はしめざるは、是れ穰侯、秦の爲めに謀つて忠ならずして、大王の計も失ふ所あれば也と。

秦王聽いて曰く、寡人願はくは失計を聞かんと。然れども左右、竊に聽く者多し。范雎恐れて未だ敢て内を言はず、先づ外事を言ひ、以て秦王の俯仰^{向背ト謂}を觀んとし、因つて進みて曰く、夫の穰侯、韓魏を越えて齊の綱^綱を攻むるは、計に非ざるなり。少しく兵を出せば、則ち以て齊を傷るに足らず、多く師を出せば、則ち秦に害あり。臣意^{オホ}ふに、王の計、少しく師を出して韓魏の兵を悉さんと欲するは、則ち不義なり。

今、與國の親しまざるを見ながら、人の國を越えて攻むる、可ならんや。其の計に於て疎なり。且つ昔、齊の湣王、南、楚を攻め、軍を破り將^將唐を殺し、再び地を辟^辟也^{開く}こと千里、而も齊が尺寸の地も得る無かりしは、豈に地を得るを欲せざらんや、形勢有つ能はざりければ也。諸侯、齊の罷弊し君臣の和せざるを見て、兵を興して齊を伐ち、大に之を破り、士辱しめられ兵^兵甲頓る。皆其王を咎めて曰く、誰か此計を爲す者ぞと。王曰く、文子^{文子}田之を爲す、大臣、亂を作すと。文子出で走る。故に齊の大に破れし所以は、其の楚を伐つて韓魏を肥したるを以て也。此れ所謂賊に兵を借し盜に糧を齎^齎らすもの也。王、遠く交はつて近く攻むるに如かず。寸を得れば則ち王の寸也、尺を得れば亦王の尺也。今、此を釋て、遠く攻む、亦^亦謬^謬らすや。且つ昔者中山の國、地方五百里、趙獨り之を吞み、功成り名立つて利附きたれど、天下之を能く害する^莫かりき。今夫れ韓魏は、中國の處にして、天下の樞也。王其れ翊たらんと欲せば、必ず中國に親しみ、以て天下の樞を爲し、以て楚趙を威^威せ。楚強くば則ち趙を引附け、

趙強くば則ち楚を引附けん。楚趙皆附かば齊必ず懼れん。齊懼れば、必ず辭を卑うし幣を重くして以て秦に事へん。齊附かば韓魏因つて虜にす可き也と。昭王曰く、吾、魏に親しまんと欲する^久し。而れども魏は變多きの國也、寡人親しむ能はず。請ひ問ふ魏に親しむ奈何せん。對へて曰く、王、詞を卑うし幣を重くし以て之に事へよ。可かずんば、則ち地を割いて之に賂^{夫ニ}へ。可^可かずんば、因つて兵を擧げて之を伐てと。王曰く、寡人敬しんで命を聞かんと。乃ち范雎を拜して客卿と爲し、兵事を謀る。卒に范雎の謀を聽き、五大夫^{五大夫}ノ^ノ縮^縮をして魏を伐つて懷を抜かしむ。後二歳、邢丘を抜く。

客卿范雎、復た昭王に説いて曰く、秦韓の地形、相錯^錯はること^{五色ノ}縹^縹の如し。秦の韓あるや、譬へば木の蠶^{木中}あり人の心腹の病あるが如し。天下變無くんば則ち已む、天下變有らば、其の秦の患を爲す者、孰れか韓より大ならん。王、韓を收むるに如かずと。昭王曰く、吾、固より韓を收めんと欲すれども、韓聽かず。之を爲す奈何と。

を御し上を蔽ひ、以て其私_私を成し、主の爲めに計らず、而も主、覺悟_{サト}せず、故に其國を失ひしなり。今、有秩_{田間、大夫}より以上、諸の大吏に至り、下、王の左右に及ぶまで、相國の_{部下}人に非ざるは無く、王の獨り朝に立つを見る。臣竊に王の爲めに、萬世の後に秦國を有つ者は、王の子孫に非ざらんを恐るゝ也と。昭王之を聞いて、大に懼れて曰く、善しと。是に於て太后を廢し、穰侯、高陵、華陽、涇陽君を關外に逐ひ、秦王乃ち范雎を拜して相と爲し、穰侯の印を收め_{取リ上、ケル也}、陶に歸らしむ。因つて縣官をして車_ト牛_トを給し、以て_二徙らしむ_一。穰侯、千乘有餘。關に到る。關_關其寶器を閱するに、寶器、珍怪物、王室よりも多し。秦、范雎を封するに應_地名を以てし、號して應侯と爲す。是の時に當り、秦の昭王四十一年也。

范雎既に秦に相たり、秦號して張祿と曰ふ。而して魏は知らず、以爲へらく范雎已に死して久しと。魏、秦の且に東、韓魏を伐たんとするを聞き、魏、須賈を秦に使はす。范雎之を聞いて微行を爲し、敝衣間歩して邸_客に之き、須賈を見る。須賈之を見て驚

いて曰く、范叔、固恙無きかと。范雎曰く、然りと。須賈笑つて曰く、范叔、秦に説く有るか。曰く、不_アざる也。唯、前日過_カを魏の相に得。故に亡_カ逃して此に至る。安んぞ敢て説かんやと。須賈曰く、今、叔は何を事とすると。范雎曰く、臣、人の爲めに庸_賃事_賃すと。須賈、意に之を哀れみ、留めて輿に坐し飲食す。曰く、范叔、一寒_生此の如きかと。乃ち其一_{粗末ナ袖}緋袍_{ノ緒入}を取り、以て之に賜ふ。須賈因つて問うて曰く、秦、張君を相とす、公之を知るか。吾聞く王に幸_寵せられ、天下の事、皆相君に決すと。今吾が事の去留は張君_中に在り。孺子_唯、豈に客の相君に習_サる、者ありやと。范雎曰く、_臣主人翁、之を習知す、唯_一唯も亦_二君_一謁するを得たり。唯請ふ君の爲めに張君に見えしめんと。須賈曰く、吾が馬病み、上_其車_ノ軸折る。大車駟馬に非ざれば、吾出ですと。范雎曰く、願はくは君の爲めに大車駟馬を主人翁に借らんと。范雎歸り、大車駟馬を取り、須賈の爲めに之を御し、秦の相府に入る。府中_々人望み見て、識る有る者は皆避け匿る。須賈之を怪しむ。相舍の門に至り、須賈に謂つて曰

く、我を待て。我、君の爲めに先づ入つて相君に通せん。須賈、門下に待ち、車を持する良久し。門下人に問うて曰く、范叔出でざるは、何ぞやと。門下曰く、范叔なるもの無しと。須賈曰く、郷者我と載つて入る者なりと。門下曰く、乃ち吾が相張君也と。須賈大に驚き、自ら賣られしを知り、乃ち肉袒膚ヲ脱ケテ也、陸行陸ヲ行ク也し、門下の人に因つて罪を謝す。是に於て范雎、帷帳帷帳ヲを盛んにし侍者甚だ衆くして、之を見る。須賈、頓首して死罪を言つて曰く、賈、君が能く自ら青雲の上に致す立身出世スを意はず、賈、敢て復た天下の書を讀まず、敢て復た天下の事に與らじ。賈、湯鑊の罪湯鑊ノ罪ニテウテ殺サルあり。請ふ自ら胡貉の地胡貉ノ地ニシテ屏カに屏かん、唯だ君之を死生せよ殺ストモ生カストモ意ノメ、ナルヲ云フ也。范雎曰く、汝が罪、幾ばくか有ると。曰く、賈の髮を擻き、以て賈の罪を續續カふも、尙ほ未だ足らずと其罪髪ノ數ノ如ク極メテ多キナラフ也。范雎曰く、汝が罪三有るのみ。昔者昭王の時にして、申包胥、楚の爲めに吳の軍を卻く。楚王之を封するに、荆の五千戸を以てす。包胥辭して受けず、蓋シ包胥ノ先祖ノ丘墓ニ荆の荆に寄りしが爲め也。今、唯の先人の丘

墓も亦魏に在り故ニ魏國ヲ賣ル如キ。而シテ公前ニ唯を以て齊に外心ありと爲して、唯を魏齊に惡す。公の罪一也。魏齊の我を廁中に辱しむるに當り、公止めず。公罪二也。更々々醉うて我に溺辱す、公其れ何ぞ忍べるや。罪三也。然れども公の死する無きを得る所以は、縹袍ナタリシテ、纒シム、故人友の意有るを以てなり。故に公を釋すと。乃ち謝し罷む。入つて之を昭王に言ひ、罷めて須賈を歸す。須賈、范雎を辭す。范雎大に供具饗應ス、折節來合し、盡く折節來合諸侯の使を請うて、與に堂上に坐し、食飲甚だ設け食ハノ飲モル也。須賈を堂下に坐せしめ、坐豆豆ト豆ヲ細セタマハカヒバを其前に置き、兩鵞徒鵞ト徒ニ處セテ人をして夾夾んで之を馬食せしめ、數めて曰く、我が爲めに魏王に告げ、急に魏齊の頭を持し來れ。然らずんば、我且に大梁を屠らんとすと。須賈歸り、以て魏齊に告ぐ。魏齊恐れて、亡げて趙に走り、平原君の所に匿る。

范雎既に相たり。王稽、范雎に謂つて曰く、事、知る可からざる者三有り、奈何ともす。可からざる者も亦三有り。宮車一日晏駕す君主ノ崩御スルヲ謂フ、是れ事の知る可からざる者の一

也。君、卒然^猝として館舍を捐つ^{死スル}、是れ事の知る可からざる者の二也。臣をして卒然として溝壑に填せしむ^{コレ亦死ス、ルヲ訓フ}、是れ事の知る可からざる者の三也。宮車一日晏駕せば、君、臣を^{用ヒザ}恨むと雖も、奈何ともす可き無く、君卒然として館舍を捐てば、君、臣を^{用ヒザ}恨むと雖も、亦奈何ともす可き無く、臣をして卒然として溝壑に填せしめば、君、臣を^{用ヒザ}恨むと雖も、亦奈何ともす可き無けん^{臣ヲ疾ク用ト。范唯懼はず。}乃ち入つて王に言つて曰く、王稽の忠に非ざれば、能く臣を函谷關に内る、莫く、大王の賢聖に非ざれば、能く臣を貴くする莫し。今、臣の官は相に至り、爵は列侯に在り。而^ニ王稽の官は尙ほ謁者に止まる。其の臣を内る、の意に非ざる也と。昭王、王稽を召し、拜して河東の守知と爲す。王稽三歳、計を上らず。昭王又^昭鄭安平を任ず。昭王以て將軍と爲す。范唯是に於て家の財物を散じ、盡く以て嘗て困厄せし^{時ニ交}所の者に報ゆ。一飯の徳も必ず償ひ、^{范唯ナリ}此^{范唯}の怨も必ず報ゆ。

范唯、秦に相たる二年、秦の昭王の四十二年、東、韓の小曲、高平を伐つて、之を拔

く。秦の昭王、魏齊^ガ平原君の所に在りと聞き、范唯の爲めに必ず其仇を報いんと欲し、乃ち^ト詳^トはり好^ミ結^バ書^ヲを爲り、平原君に遺つて曰く、寡人、君の高義を聞く。願はくは君と布衣の友と爲らん、君幸に寡人所に過れ。寡人願はくは君と十日間の飲を爲さんと。平原君、秦を畏れ、且つ以て然りと爲して、秦に入り、昭王に見ゆ。昭王、平原君と飲むこと數日。昭王、平原君に謂つて曰く、昔、周の文王は呂尙を得て以て太公と爲し、齊の桓公は管夷吾を得て以て仲父と爲せり。今、范君も亦寡人の叔父なり。范君の仇、君の家に在り。願はくは人をして歸りて其頭を取り來らしめよ。然らずんば、吾、君を關より出さじと。平原君曰く、貴うして友たる者は、賤しかりし^{トキ情交}が爲めなり、富んで交を爲す者は、貧しかりし^{トキ情交}が爲め也。夫の魏齊は、^{深カリシ}勝の友也、在りとも固より出さざる也。今、又臣の所に在らずと。昭王乃ち趙王に書を遺つて曰く、王の弟は秦に在り、范君の仇魏齊は平原君の家に在り。王、人をして疾く其頭を持し來らしめよ。然らずんば、吾、兵を擧げて趙を伐たん、又王の弟を關

より出さじと。趙の孝成王、乃ち卒を發し、平原君の家を圍む。急なり。魏齊夜亡げ、出で、趙の相虞卿を見る、虞卿、趙王の終に説く可からざるを度り、乃ち其相印を解き魏齊と亡げ、間行す。諸侯を念ふに、以て急に抵る可き者莫し。乃ち復た大梁に走り、信陵君に因りて以て楚に走らんと欲す。信陵君、之を聞き、秦を畏れ、猶豫して未だ見るを肯んせず。曰く、虞卿は何如なる人ぞと。時に侯嬴、旁に在り、曰く、人は固より未だ知り易からず、人を知るも亦未だ易からざる也。夫の虞卿は履を躡み笠を擔ひ、一たび趙王に見えて、白璧一雙、黄金百鎰を賜はり、再び見えて、拜せられて上卿と爲り、三たび見えて、卒に相の印を受け、萬戸侯に封せらる。此の時に當り、天下争うて之を知る。夫の魏齊、窮困して虞卿に過る。虞卿敢て爵祿の尊きを重んぜず、相の印を解き、萬戸侯を捐て、間行し、士の窮を急にして、公子に歸す。而公子曰く、何如なる人ぞと。人は固より知り易からず、人を知るも亦未だ易からざる也と。信陵君大に愜ち、駕して野に如き之を迎ふ。魏齊、信陵君の初め之を見るを難んせしを聞き、

怒つて自刎す。趙王之を聞き、卒に其頭を取り、秦に手ふ。秦の昭王、乃ち平原君を出して趙に歸す。

昭王四十三年、秦、韓の汾陰を攻めて、之を拔き、因つて河上の廣武に城く。後五年、昭王、應侯の謀を用ひ、反間を縱つて趙を賣る。趙、其故を以て馬服の子をして廉頗に代り將たらしむ。秦大に趙を長平に破り、遂に邯鄲を圍む。已にして武安君白起と隙有り、王言つて之を殺し、鄭安平に任じ、將として趙を擊たしむ。鄭安平、趙の困急する所と爲り、兵二萬人を以て趙に降る。應侯、筵に席し、罪を請ふ。秦の法、人に任じて任ずる所善からざれば、各々其罪を以て之を罪す。是に於て、應侯の罪、三族を收むるに當す。秦の昭王、應侯の意を傷るを恐れ、乃ち令を國中に下す、敢て鄭安平の事を言ふ者あらば、其罪を以て之を罪せんと。相國應侯に食物を加賜すること日に益々厚く、以て其意に順適す。後二歳、王稽、河東の守と爲り、諸侯と通じ、法に坐し誅せらる。而して應侯日に益々懌ばず。昭王、朝に臨み歎息す。

を譲めて曰く、子は常に宣言して、我に代り秦に相たらんと欲すと。寧ろ之れ有るか。と。對へて曰く、然りと。應侯曰く、請ふ其説を聞かんと。蔡澤曰く、吁、君何ぞ見るの晩きや。夫れ四時の序、功を成す者は去る。夫れ人生れて百體堅強に、手足便利に、耳目聰明にして、心の聖智なるは、豈に士の願に非ざるかと。應侯曰く、然りと。蔡澤曰く、仁を質とし義を乗り、道を行ひ徳を施き、志を天下に得、天下、懷樂敬愛して之を尊慕し、皆以て君王とするを願ふ。豈に辯智のノ期士期願望スルならずやと。應侯曰く、然りと。蔡澤復た曰く、富貴顯榮にして、萬物を成理し、各々其所を得しめ、性命壽長、其天年を終へて、天傷死せず、天下其統を継ぎ其業を守り、之を無窮に傳へて、名實純粹、澤澤千里に流れ、世世之を稱して絶つ無く、天地と終始同する、豈に道徳の符効にして、聖人の所謂吉祥善事なる者かと。應侯曰く、然りと。蔡澤曰く、夫の秦の商君、楚の吳起、越の大夫種ノの若き、其れ卒然として亦願ふ可きかと。應侯、蔡澤の己を困しめ以て説かんと欲するを知り、復た認つて曰く、何爲れぞ不可ならん。

夫の公孫鞅の孝公に事ふるや、身を極め盛て武慮無く、公を盡して私私を顧みず、刀鋸刑を設けて以て奸邪を禁じ、賞罰を信かアヤにして以て治を致し、腹心を披き、情素素を示し、怨咎を蒙オホし、舊友を欺き、魏の公子印を奪ひ、秦の社稷を安んじ、百姓を利し、卒に秦の爲めに將を禽にし敵を破り、地を攘ウくこと千里なりき。吳起の悼王に事ふるや、私をして公を害するを得ず、讒をして忠を蔽ふを得ざらしめ、言は苟も合ふを取らず、行は苟も容れらるゝを取らず、危ふきが爲めに行を易へず、義を行うて難を辟サけず、然して主を覇とし國を強うする爲めには、禍凶をも辭せず。大夫種の越王に事ふるや、主は困辱すれども、忠を悉して解オコ也解らず、主は絶亡すれども、能を盡して離れず、功を成して矜アらず、貴富にして驕怠せず。此三子者の若きは、固に義の至り也、忠の節也。是の故に君子は義を以て難に死し、死を視ること歸するが如し。生きて辱しめられんよりは、死して榮あるに如かず。士は固に身を殺して以て名を成すあり。唯だ義の在る所ナラ、死す雖も、恨むる所無し。何爲れぞ不可ならんやと。蔡

澤曰く、主聖に臣賢なるは、天下の盛福なり。君明かに臣直なるは、國の福也。父慈に子孝に、夫信に妻貞なるは、家の福也。故に比干は忠にして、而も殷を存する能はず、子胥は智にして、而も吳を完うする能はず、申生は孝にして、而も晉國亂れぬ。是れ皆、忠臣孝子あつて而も國家滅亂せるは、何ぞや。明君賢父の以て之を聽く無かりければなり。故に天下、其君父を以て僂辱人と爲して、其臣子を憐れむ。今、商君、吳起、大夫種の人臣たるは是也、其君は非也。故に世、三子の、功を致して徳とせられざるを稱す。豈に世に遇はずして死せるを慕はんや。夫れ死を待つて後以て忠を立て名を成す可くんば、是れ微子は仁とするに足らず、孔子は聖とするに足らず、管仲は大とするに足らざる也。夫れ人の功を立つる、豈に成全を期せざらんや。身と名と俱に全きは、上也、名法ノリる可くして身死するは、其次也、名、僂辱に在つて、身全きは、下也。是に於て應侯善しと稱す。

蔡澤少しく間を得て因りて曰く、夫れ商君、吳起、大夫種が、其の人臣と爲り、忠を

盡し功を致すは、則ち願ふ可きも、関天関天の文王に事へ、周公の成王を輔くるや、豈に亦聖ならずや。君臣を以て之を論すれば、商君、吳起、大夫種の、其の願ふ可きは、関天、周公に孰與ぞやと。應侯曰く、商君、吳起、大夫種は若かざる也と。蔡澤曰く、然らば則ち君の主の、慈仁にして忠に任じ、舊故舊故に悖厚なる、其賢智と有道の士と膠漆交りを爲し、義、功臣に負かざるは、秦の孝公、楚の悼王、越王に孰與ぞやと。應侯曰く、未だ何如を知らざる也と。蔡澤曰く、今、主の、忠臣に親しむこと、秦の孝公、楚の悼王、越王に過ぎず。君の、智能を設へ、主の爲めに危を安んじ、政を修め、亂を治め兵を強くし、患を批ち難を折き、地を廣め穀を殖る、國を富まし家を足し、主を強くし、社稷を尊び、宗廟を顯はし、天下敢て其主を欺犯する莫く、主の威、海内を蓋震し、功、萬里の外に彰はれ、聲名光輝、千世に傳ふること、君、商君、吳起、大夫種に孰與ぞと。應侯曰く、若かすと。蔡澤曰く、今、主の、忠臣を親しむ舊故を忘れざるは、孝公、悼王、句踐に若かすして、君の功績、愛信親幸せらる

るは、又商君、吳起、大夫種に若かず。然り而して君の祿位は貴盛にして、私家の富は三子に過ぐ。而るを身退かすんば、恐らくは患の三子よりも甚しきものあらんか。竊に君の爲めに之を危ぶむ。語に曰く、日ニ天中すれば則ち移り、月満つれば則ち虧け、物盛んなれば則ち衰ふるは、天地の常數也。進退盈縮、時と變化するは、聖人の常道也。故に國、道あれば則ち仕へ、國、道無ければ則ち隠ると。聖人曰く、飛龍、天に在りルニ聖人時ヲ得、大人を見るに利し。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如しと。今、君の怨已に讎クいて、徳已に報い、意欲至りて、變ニ計無し。竊に君の爲めに取らざる也。且つ夫れ翠ニ鶴ノ犀象、其の勢に處るは死に遠からざるに非ざるも、而も死する所以は、餌に惑へば也。蘇秦、智伯の智、以て辱を辟け死に遠ざかるに足らざるに非ざりしも而も死せし所以は、貪利に惑ひ所ニ止まらざりければ也。是を以て聖人、禮を制し欲を節し、民に取るに度限あり、之民を使ふに時を以てし、之民を用ふるに止制あり。故に志溢れず行驕らず、常に道と俱にして失はず、故に天下、

承けて絶えず。昔者齊の桓公は、諸侯を九ニ合し、天下を一ニ匡したりしかども、葵丘の會に至り、驕矜の志あり、爲メ畔きし者九國。吳王夫差は、兵、天下に敵無く、勇猛以て諸侯を輕んじ、齊晋を凌ぐ、故に遂に以て身を殺し國を亡ぼす。夏育、太史噉は叱呼大聲ヲ怒鳴ルナリして三軍を駭かす、然れども身、庸夫人凡庸ノ手に死せり。此れ皆至盛に乗じて道理に返らず、卑退卑下に居り儉約に處らざるの患也。夫の商君は秦の孝公の爲めに法令を明かにし、姦の本を禁じ、尊爵必ず賞し、有罪必ず罰し、權衡を平にし度量を正し、輕重を調へ、阡陌田ヲ齒スルを决裂し、以て生民の業を靜静カにして、其俗風を一にし、民に耕農を勸めて土を利し、一室一家に二ニ個事無く、田農を力めて米穀積積蓄し、戰陳戰の事を習はす。是を以て兵動けば地廣まり、兵休めば國富む。故に秦、天下に敵無く、威を諸侯に立て、秦國の業を成す。功已に成る。而して遂に以て車裂せらる。楚は地方數千里、持戟百萬。而レ白起、數萬の師を率ゐ、以て楚と戦ひ、一戰して鄢郢を擧げ、以て夷陵を燒き、再戰して南、蜀漢を并す。又韓魏を越

えて疆趙を攻め、北、馬服括趙を坑にし、四十餘萬の衆を誅屠し、之を長平の下に盡す。流血、川を成し、沸聲、雷也の如く、遂に入つて邯鄲を圍み、秦をして帝業を有たしむ。楚趙は天下の疆國にして、秦の仇敵也。是よりの後、楚趙皆懾伏して敢て秦を攻めざりしは、白起の勢力也。身、服する所の者、七十餘城、功已に成る。而して遂に劍を賜はりて杜郵に死せり。吳起は楚の悼王の爲めに法を立て、大臣の威重を卑減し、無能を罷め、無用を廢し、不急の官を損し、私門の請を塞ぎ、楚國の俗を一にし、游客の民を禁じ、耕戰の士を精うし、南、楊越を收め、北、陳蔡を并せ、横衝を破り従合を散じ、馳説の士游説をして、其口を開く所無からしめ、朋黨徒を禁じて以て百姓を勵まし、楚國の政を定め、兵は天下に震ひ、威は諸侯を服す。功已に成る。而して卒に枝解四肢ヲ斬リセラル也せらる。大夫種は、越王の爲めに深謀遠計し、會稽の危を免かれしめ、亡を以て存と爲し、辱に因つて榮を爲し、草を墾きて離散セ邑に入れ、地を辟きて穀を殖ゑ、四方の士を率ゐ、上下の力を專にし、句踐の賢を輔け、夫差の讎を報い、

卒に勁吳を擒にして、越をして覇を成さしむ。功已に彰はれ而して信ヨ句踐終に負いて之を殺せり。此四子は、功成りて去らず、禍此に至る。此れ所謂信びて訕する能はず、往いて返る能はざる者なり。范蠡は之を知り、超然として世を辭け、長く陶朱公と爲れり。君獨り夫の博者賭博を觀すや、或ハは大に投せんと欲し、或ハは功利を分たんと欲す。此れ皆君の明かに知る所也。今、君、秦に相となり、計つて席を下らず座席ヲ下ラズ、シテ事ヲ計ル、謀つて廊廟を出でず、坐して諸侯を制し、利は山川に施び、以て宜陽に實て、羊腸の險を決し、太行の道を塞ぎ、又范、中行の塗路を斬ち、六國、合従するを得ず、機道千里、蜀漢に通じ、天下をして皆秦を畏れしむ。秦の欲得て、君の功極まる。此れ亦秦の、功を分つの時也應侯獨リ功利ヲ專ニ、此の如くにして退かず。んば、則ち商君、白公起、吳起、大夫種、是れ也。吾之を聞く、水カシガに鑒ミルシテ見ルシテ見ル者、面カホの容カシチを見、人カホに鑒ミル者、吉カホと凶カホとを知ると。昔に曰く、成功の下には、久カホしく處カホる可カホからずと。四子即チ商君、白起、吳起、大夫種、の禍中、君何れにか居らんとする。君何を

此時を以て相の印を歸し、賢者に譲りて之に授け、退いて巖居巖穴山村ニ川觀ニ游觀せざる。レサス必ず伯夷の廉ありて、長く應侯と爲り、世世孤と稱して、許由、延陵の季子季札の讓、喬松王子喬赤松子の壽あらん。禍を以て終るに孰與ぞや。即ち君、何れにか居らんとする。忍忍陰んで自ら離る、能はず、疑うて自ら決する能はずんば、必ず四子の禍あらん。易に曰く、亢盛陽ヲ極龍メタル龍悔ありと。此れ、上つて下る能はず、信びて訕する能はず、往いて自ら返る能はざる者を言ふ也。願はくは君之を孰計計熟せよと。應侯曰く、善し。吾聞く、欲して止まるを知らざれば、其の欲する所以を失ひ、有して足るを知らざれば、其の有する所以を失ふと。先生幸に唯に教ふ。敬んで命を受けんと。是に於て乃ち坐に延き入れて、上客と爲す。

後數日、入朝して、秦の昭王に言つて曰く、客新に山東より來る者あり、蔡澤と曰ふ。其人辯士にして、三王の事、五伯の業、世俗の變に明かに、以て秦國の政を寄託するに足る。臣の人を見る甚だ衆きも、及ぶもの莫し。臣も如かざる也。臣敢て以聞聞上す

と。秦の昭王召し見て與に語り、大に之を説び、拜して客卿と爲す。應侯因つて病と謝し、相の印を歸さんと請ふ。昭王強ひて應侯を起たす。應侯遂に病篤しと稱す。范雎、相を免せらる。昭王、新に蔡澤の計畫を説び、遂に拜して秦の相と爲し、東、周室を收む。蔡澤、秦に相たる數月、人或は之を惡す。誅を懼れ、乃ち病と謝し、相の印を歸す。號して綱成君と爲す。秦に居る十餘年、昭王、孝文王、莊襄王に事へ、卒に始皇帝に事ふ。秦の爲めに燕に使す。三年にして、燕、太子丹をして入つて秦に質たらしむ。

太史公曰く、韓子に稱す、長袖ナ著善く舞善ク舞ハレひ善ク舞ハレ、多錢善く買ふと。信なるかな是の言や。范雎、蔡澤は、世に所謂一切の辯士なり。然れども諸侯に游説し、白首白頭に至るまで遇ふ所無きは、計策の拙かりしに非ず、説を爲す所ノ國力少かりしなり。二人羈旅にして秦に入るに及び、踵を繼いで卿相を取り、功を天下に垂る、は、固に強弱の勢異なりたれば也。秦ノ疆カリシガタメナルヲ云フ。即チ長袖善舞、多錢善買モノ也。然れども士も亦偶合有り、賢者多く

は此二子の如く、意を盡すを得ざる、豈に一々舉道ふに勝ふ可けんや。然れども二子にして困辱せざりせば、悪んぞ能く激勵せんや。

樂毅列傳 第二十

樂毅は、其先祖を樂羊と曰ふ。樂羊、魏の文侯の將と爲り、伐つて中山を取る。魏の文侯、樂羊を封するに靈壽を以てす。樂羊死し、靈壽に葬る。其後子孫因つて靈壽家す。中山、國を復恢復す。趙の武靈王の時に至り、復た中山を滅ぼす。而して樂氏の後、樂毅あり。樂毅、賢にして兵を好む。趙人之を擧ぐ。武靈王時沙丘の亂あるに及び、樂毅乃ち趙を去り魏に適適く。會燕の昭王時子之の亂を以てして、齊大に燕を敗り、ハレ、燕の昭王、齊を怨み、未だ嘗て一日も齊に報するを忘れず、燕の國、小にして辟遠僻遠、力齊制する能はず、是に於て身を屈し士に下り、先づ郭隗を禮し、以て賢者を招くと聞き、樂毅是に於て魏の昭王の爲めに燕に使す。燕王、客禮を以て之樂毅を待つ。樂毅辭讓し、遂に質質也を委ねて臣と爲る。燕の昭王、以て亞卿上卿と爲す。之を久しうす。是の時に當り、齊の湣王強く、南、楚の相唐昧を重丘に敗り、西、三晋を觀津に

摧き、遂に三晋と秦を擊ち、趙を助けて中山を滅ぼし、宋を破り、地を廣むること千餘里、秦の昭王と重きを争ひ帝と爲り、已にして復た之帝を歸す。諸侯皆秦に背いて齊に服せんと欲す。湣王自ら矜り、百姓堪へず。是に於て燕の昭王、齊を伐つの事を問ふ。樂毅對へて曰く、齊は霸國の餘業也、地大いに人衆く、未だ獨り攻め易からざる也。王必ず之を伐たんと欲せば、趙及び楚魏に與するに如く莫しと。是に於て樂毅をして趙の惠文王に約せしめ、別に趙魏を連ねしめ、趙をして秦に嚙はすに齊を伐つの利を以てせしむ。諸侯、齊の湣王の驕暴を害とし、皆争ひ合從して、燕と與に齊を伐つ。樂毅還り報ず。

燕の昭王悉く兵を起し、樂毅をして上將軍たらしむ。趙の惠文王、相國の印を以て、樂毅に授く。樂毅是に於て趙、楚、韓、魏、燕の兵を并せ護り、以て齊を伐つて、之を濟西に破る。諸侯の兵罷め歸る。而して燕の軍、樂毅獨り追うて、臨菑齊都に至る。齊の湣王の濟西に敗る、や、亡げ走つて莒を保つ。樂毅獨り留まり齊を徇ふ。師ヲ巡ラシ合。ヲ宣フル也。

齊皆城守す。樂毅攻めて臨菑に入り、盡く齊の寶財物祭器を取り、之を燕に輸送す。燕の昭王大に説び、親ら濟上に至り、軍を勞ひ、賞を行ひ士を饗す。樂毅を昌國に封じ、號して昌國君と爲す。是に於て燕の昭王、齊の鹵獲品分捕を收め以て歸る。而して樂毅をして復た兵を以て齊の城の下らざる者を平らげしむ。樂毅留まり、齊を徇ふること五歲、齊の七十餘城を下し、皆郡縣と爲し、以て燕に屬せしむ。唯だ莒と即墨のみ未だ服せず。

會々燕の昭王死し、子立つ。燕の惠王となす。惠王、太子たりし時より、嘗ツネに樂毅に快からず。位に即くに及び、齊の田單之を聞き、乃ち反間を燕に縱つて曰く、齊の城の下らざる者は兩城耳。然れども早く抜かざる所以は、聞く、樂毅、燕の新王と隙あり、兵を連ね且つ齊に留まり南面して齊に王たらんと欲するがゆゑなりと。齊の患ふる所は、唯だ他將の來らんを恐ると。是に於て、燕の惠王固より已に樂毅を疑ひしに、齊の反間を得たれば、乃ち騎劫をして代り將たらしめて、樂毅を召す。樂毅、燕の惠

王の善からずして之を代ふるを知り、誅を畏れて、遂に西、趙に降る。趙、樂毅を觀津に封じ、號して望諸君と曰ふ。樂毅を尊寵して、以て燕齊を驚動す。齊の田單、後、騎劫と戰ふ。果して詐計を設けて燕の軍を誑き、遂に騎劫を即墨の下に破りて、轉戰して燕を逐ひ、北、河上に至り、盡く復た齊の城を得て、襄王を莒に迎へ、臨菑に入る。

燕の惠王、後、騎劫をして樂毅に代らしめ、故を以て軍を破り將を亡ぼし齊を失ひしを悔い、又樂毅の趙に降れるを怨み、且趙が樂毅を用ひて燕の弊に乗じて以て燕を伐たんを恐れ、燕の惠王乃ち人をして樂毅を讓め且つ之に謝せしめて曰く、先王、國を舉げて將軍に委ね、將軍、燕の爲めに齊を破り先王の讎を報い、天下震動せざるはなし。寡人豈に敢て一日も將軍の功を忘れんや。先王、群臣を弃つる本スルに會ひ、寡人新に位に即く。左右者寡人を誤る。寡人の騎劫をして將軍に代らしめしは、將軍の久しく外に暴露南風烈日ニサラサル也するが爲めに、故に將軍を召し、且く休めて事を計らんと

てなりき。將軍、過り聽き、寡人と隙あるを以てし、遂に燕を捐て、趙に歸す。將軍自ら計を爲すは則ち可なるべきも、而も亦何を以てか先王の將軍を遇せし所以の意に報せん。

樂毅、燕の惠王に報遺する書に曰く、臣、不佞、王命を奉承して以て左右の心に順ふ能はず、先王の明を傷ひ足下の義を害するあらんを恐れ、故に遁逃して趙に走る。今足下、人をして之を數むるに罪を以てせしむ。臣、王侍御者が先王の臣を畜幸せし所以の理を察せず、又臣の先王に事へし所以の心を白かにせざるを恐れ、故に敢て書を以て對ぶ。臣聞く、賢聖の君は、祿を以て親者に私せず、其功多き者は之を賞し、其能當る者は之を處くと。故に能を察して官を授くる者は、功を爲すの君也、行を論じて交を結ぶ者は、名を立つるの士なり。臣竊に先王の舉動を觀るに、世主に高ぶるの心あるを見る、故に節符を魏に假り、身を以て燕に察至るを得たり。先王、過つて舉げて之を賓客の中に廁へ、之を群臣の上に立て、父兄に謀らずして、以て亞卿と爲

す。臣竊に自ら知らず、自ら以爲へらく命を奉じ教を承け幸に罪無かる可しと。故に命を受けて辭せず。先王之に命じて曰く、我、齊に積怨深怒あり、輕弱を量らずして、齊を伐つ以て事と爲さんと欲すと。臣曰く、夫れ齊は、霸國の餘業にして、最勝の遺事なり。兵甲を練り、戦攻に習ふ。王若し之を伐たんと欲せば、必ず天下と之を圖れ。天下と之を圖るには趙に結ぶに若く莫し。且つ又淮北、宋の地は、楚魏の欲する所也。趙若し許して四國を約し之を攻めば、齊、大に破る可き也と。先王以て然りと爲し、符節を具へ、南、臣を趙に使はす。臣願つて反命し、兵を起し齊を撃つ。天の道、先王之靈威を以て、河北の地、先王に隨_{服從}つて之を濟上に擧ぐ_{發ス}。濟上の軍、命を受けて齊を撃ち、大に齊人を敗り、輕卒銳兵、長驅して國に至る。齊王遁れて莒に走り、僅かに身を以て免かる。珠玉財寶、車甲珍器、盡く收めて燕に入り、_{燕の器分}物を寧臺_燕に設ね、大呂_大を元英_燕宮に陳し、_{齊ニ取ラ}故鼎は磨室_燕宮に反り、_莒丘_莒の植木は、齊汝上_莒を植う。五伯より已來、功未だ先王に及ぶ者あらざる也。先王以て

志に_{コト}謙しと爲す、故に地を裂いて之を封じ、小國の諸侯に比するを得しむ。臣竊に自ら知らず、自ら以爲へらく命を奉じ教を承け幸に罪無かる可しと、是を以て命を受けて辭せず。臣聞く、賢聖の君は、功立つて廢せず、故に春秋_名に善はれ、_蚤知_の士_ノ先見_ハ、名成つて毀らず、故に後世に稱せらる。先王之怨に報い耻を雪ぎ、萬乘の強國を夷_{オモテ}げて、_齊八百歳の善積_{貨財重寶}を收め、群臣を弃つるの日_{燕王ノ卒}に_{至るに及}び、餘教未だ衰へず、政を執り事に任ずるの臣、法令を修め、庶孽_{妾庶}を慎み、施いて_前人_隸に及ぶが若き、皆以て後世に教ふ可し。臣之を聞く、善く作す者は、必ずしも善く成さず、始を善くする者は、必ずしも終を善くせずと。昔、伍子胥は、説、閻閭に聽かれて、吳王、迹を遠くし郢に至る_{閻閭子胥ノ脱チ楚チ俊ツ。而ルニ}夫差_{ハ子}是とせざるや、_{劍ヲ賜ヒ子胥}之に_賜夷_{馬革}を賜ひ_{子胥ノ屍}て、之を江に浮ぶ。吳王_夫、先_{時ノ}論の以て功を立つ可きを寤らず、故に子胥_屍を_江沈めて悔いず。子胥_{ハ主}、先_也の量器を同じうせざるを蚤見_先せず、是を以て江に入つて化佛_成せざるに至る。夫れ身

離カを免かれ功を立て、以て先王の功カ迹を明かにするは、臣の上計也。毀辱の誹謗に離りて先王の名を墮オすは、臣の大に恐るゝ所也。不測の罪に臨み、幸カ俸を以て利と爲すは、義の敢て出でざる所也。臣聞く、古の君子は、交り絶ゆるも悪聲を出さず、忠臣は國を去るも、其名を潔うせずと。臣不佞と雖も、數々教を君子に奉ず。侍御者王スナの左右の説に親しみ、疏遠臣の行を察せざらんを恐る。故に敢て書を獻じ以聞す。唯だ君王の意を留められんことをと。

是に於て燕王、復た樂毅の子ナ樂間を以て、昌國君と爲す。而して樂毅往來して復た燕に通ず。燕趙以て客卿と爲す。樂毅、趙に卒す。樂間、燕に居る三十餘年。燕王喜、其相栗服の計を用ひて、趙を攻めんと欲して、昌國君樂間に問ふ。樂間曰く、趙は四戰四方ニ敵ヲツケテ戰フタイフの國也、其民、兵に習へり。之を伐つは不可と。燕王聽かず、遂に趙を伐つ。趙、廉頗をして之を擊たしめ、大に栗腹の軍を鄙に破り、栗腹樂乘を禽にす。樂乘は樂間の宗族宗なり。是に於て樂間、趙に奔る。趙遂に燕を圍む。燕重ねて地を割き

以て趙と和す。趙乃ち國ナ解いて去る。

燕王、樂間を用ひざりしを恨む。樂間既に趙に在り。乃ち樂間に書を遣つて曰く、紂の時、箕子用ひられず、而犯諫して怠らず、以て其聽かれんことを冀ふ。商容亦紂ヲ諫紂ニ達せず、身祗身ヲに紂ノ爲メ辱しめらる、ソレ以て其變紂ノ心ヲ變ずるを冀ふ。紂レカズ民の志入らず民志外ニ、獄囚自ら出づるに及び其亂レタルノ、然る後二子退隱せり。故に紂は樂暴凶の累を負ひ、二子は忠聖の名を失はず。何となれば、此ニ其國愛患ヲ分ニ其力を盡したればなり。今、寡人、愚なれども、紂の暴の若くならず、燕民、亂るれども、殷民の甚しきが若くならず。室に語面自カラザル言語あれども、相盡くして以て隣里に告げず室中ニテ起リシ事ハ、と。二者樂間、燕王ノ己ヲ惡ムチ知リ作ラ諫メザリ、寡人、君の爲めに取らざる也。樂間、樂乘、燕の其計を聽かざりしを怨み、二人卒に趙に留まる。趙、樂乘を封じて武襄君となす。其明年、樂乘、廉頗、趙の爲めに燕を圍む。燕、禮を重くして以て和す。乃ち解く。後五歲、趙の孝成王卒す。襄王、樂乘をして廉頗に代らしむ。廉

頗、樂乘を攻む。樂乘走る。廉頗亡げて魏に入る。其後十六年にして秦、趙を滅ぼす。
 其後二十餘年、高帝高祖、趙を過ぎ、樂毅に後世子あるかを問ふ。對へて曰く、樂毅ありと。高帝之を樂郷に封じ、號して華成君と曰ふ。華成君は樂毅の孫なり。而して樂氏の族に、樂瑕公、樂臣公あり。趙の且に秦に滅ぼされんとするや、亡げて齊の高密地名に之く。樂臣公、善く黃帝、老子の言を修め、齊に顯聞し、賢師と稱せらる。
 太史公曰く、始め齊の蒯通及び主父偃、樂毅の燕王に報ずる書を読んで、未だ嘗て書を廢して泣かずんばあらざりし也。樂臣公は黃帝、老子を學ぶ。其本師を號して河上丈人と曰ふ。其の出づる所を知らず。河上丈人は安期生に教へ、安期生は毛翁公に教へ、毛翁公は樂瑕公に教へ、樂瑕公は樂臣公に教へ、樂臣公は蓋公に教ふ。蓋公は齊の高密膠西にて教へ、曹相國曹の師と爲る。

廉頗藺相如列傳 第二十一

廉頗は、趙の良將也。趙の惠文王十六年、廉頗、趙の將と爲り、齊を伐つて大に之を破り、晉陽を取る。拜して上卿となる。勇氣を以て諸侯に聞ゆ。

藺相如は、趙の人也。趙の宦者の令ナ繆賢の舍人たり。趙の惠文王の時、趙楚の和氏の璧を得。秦の昭王之を聞き、人をして趙王に書を遣らしめ、願はくは十五城を以て璧に易へんと請ふ。趙王、大將軍廉頗及諸大臣と謀り、秦にナ予へんと欲する、秦の城得可からずして徒に欺かれんを恐る。予ふる勿らんと欲する、即ち秦兵の來らんを患ふ。計未だ定まらず。人の秦に報せしむ可き者を求むれども、未だ得ず。宦者の令ナ繆賢曰く、臣の舍人藺相如、使す可しと。王問ふ、何を以て之を知ると。繆賢對へて曰く、臣嘗て罪あり、竊に計り、燕に亡げ走らんと欲す。臣の舍人ナ相如、臣を止めて曰く、君何を以て燕王を知ると。臣語つて曰く、臣嘗て大王に従ひ、燕王と境上に

會す。燕王、私に臣が手を握りて曰く、願はくは友を結ばんと。此を以て之を知る。故に往かんと欲すと。相如、臣に謂つて曰く、夫れ趙強くして燕弱く、而して君、趙王に幸寵せらる。故に燕王、君に結ばんと欲するなり。今、君、乃ち趙を亡げて燕に走らば、燕は趙を畏るれば、其勢必ず敢て君を留めずして、却君を束ねて趙に歸さん。君如かず、肉袒して斧質斧に伏して罪を請はんには、サス則ち幸に罪脱するを得んと。臣其計に従ふ。大王も亦幸に臣を赦せり。臣竊に以て其人勇士にして智謀なりと爲す。宜しく使せしむべしと。是に於て王、藺相如を召し見て問うて曰く、秦王、十五城を以て寡人の壁に易へんと請ふ。予ふ可きや不不やと。相如曰く、秦は強くして趙は弱し、許さざる可からずと。王曰く、吾が壁を取つて、我に城を予へずば、奈何せんと。相如曰く、秦、城を以て壁を求むるを、趙許さずば、曲は趙に在り、趙が壁を予ふるを、秦、趙に城を予へずば、曲は秦に在り。之の二策を均比するに、寧ろ許して以て秦に曲を負はせんかなと。王曰く、誰か使す可き者ぞと。相如曰く、王、必ず人無くば、臣

願はくは壁を奉じて往かん。城をして趙に入れしめて、壁を秦に留めん。城趙入らずんば、臣請ふ壁を完うして趙に歸らんと。趙王是に於て遂に相如をして壁を奉じて西、秦に入らしむ。

秦王、章臺に坐して相如を見る。相如、壁を奉じて秦王に奏す。秦王大に喜び、傳へて以て美人及び左右に示す。左右皆萬歳と呼ぶ。相如、秦王の、趙に城を償ふに意なきを視、乃ち前んで曰く、壁に瑕瑕有り、請ふ王に指示せんと。王、壁を相如に授く。因つて壁を持し却立して柱に倚る、怒髪上つて冠を衝く。秦王に謂つて曰く、大王、壁を得んと欲し、人をして書を發し趙王に至らしむ。趙王悉く群臣を召して議す。皆曰く、秦は貪にして其強を負み、空言を以て壁を求む。償城恐らくは得可からじと。議して秦に壁を予ふるを欲せず。臣以爲へらく、布衣の交りすら尙ほ相欺かず、況んや大國をや。且つ一壁の故を以て強秦の驢心驢に逆ふは、不可なりと。是に於て趙王乃ち齋戒齋すること五日、臣をして壁を奉じ拜して書を庭庭に送らしむ。何となれば、大國

の威をオチ畏れて以て敬を修めんとすれば也。今、臣至る。大王、臣を列觀に見秦ノ衆臣ト同列ニシテ見ルナリ、禮節甚だ倨る。壁を得るや、之を美人に傳へ、以て弄臣に戯る。臣、大王の趙王に城邑を償ふに意なきを觀る。故に臣、復た壁を取る。大王必ず臣ルノ特ヲを急ニ奪セんと欲せば、臣の頭、今、壁と俱に柱に碎けん。相如、其壁を持ち、柱を睨み、以て柱に攀たんと欲す。秦王、其の壁を破らんを恐れ、乃ち辭謝して固く請ふ、有司を召して、圖地地圖を案じ、指して此より以往十五都を趙に予へんといふ。ドサレ相如は、秦王時に詐伴を以て趙に城を予ふる爲トするも、實は得可からざるを度り、乃ち秦王に謂つて曰く、和氏の壁は、天下共に傳へて寶とする所也。趙王恐れ、敢て獻せずんばあらす。ドサレ趙王が壁を送る時、齋戒進精すること五日。ハサレ今、大王も亦宜しく齋戒すること五日、九寶九儀を廷に設くべし。レバ臣乃ち敢て壁を上らんと。秦王之を度るに、終に強ひてナ奪ふ可からずと。遂に許し、齋すること五日、相如を廣成の傳舍止息所に合せしむ。相如は秦王の齋すと雖も、決カキす約に負き城を償はざるを度り、乃ち其從

者をして褐毛織ノ粗服を衣、其壁を懷き、徑道近路より亡げて、壁を趙に歸さしむ。秦王齋すること五日の後、乃ち九寶の禮を廷に設け、趙の使者藺相如を引く。相如至り、秦王に謂つて曰く、秦は繆公より以來二十餘君、未だ嘗て約束を堅明にせし者あらざる也。臣誠に王に欺かれて趙に負くを恐る。故に人をして壁を持して歸り、間ヒかに趙に至らしむ。且つ秦は強うして趙は弱し、大王ニ介ヒトの使を遣り趙に至らしめば、趙立オチに壁を奉じて來らん。今、秦の強を以てして、先づ十五都を割き趙に予へば、趙豈に敢て壁をニ留めて罪を大王に得んや。臣、大王を欺くの罪當に誅せらるべきを知る。臣請ふ、湯鑊釜ヲに就かん。唯だ大王、群臣と熟計して之を議せよと。秦王、群臣と相視て嘻ハる。左右或は相如を引き去らんと欲す。秦王因つて曰く、今、相如を殺すも、終に壁を得る能はずして、秦趙の驩を絶たん。如かず因つて厚く之を遇して趙に歸らしめんには。趙王豈に一壁の故を以て秦を欺かんやと。卒に廷に相如を見、禮を畢して之を歸す。相如既に歸る。趙王、以て賢大夫、使して諸侯に辱しめられじ

と爲し、相如を拜して上大夫となす。秦も亦城を以て趙に予へず、趙も亦終に秦に壁を予へず。

其後、秦、趙を伐ち、石城を拔き、明年、復た趙を攻め、二萬人を殺す。秦王、使者をして趙王に告げしむ、王と好^{ヨシク}をなし西河の外の池に會せんと欲すと。趙王、秦を畏れ、行く母らんと欲す。廉頗、藺相如計つて曰く、王行かずば、趙の弱にして且つ怯なるを示すなりと。趙王遂に行く。相如從ふ。廉頗送つて境に至り、王と訣して曰く、王行け。道里^{ミチ}を度るに、會遇の禮畢つて、還るに三十日を過ぎじ。三十日にして還らずんば、則ち請ふ太子を立て、王と爲し、以て秦の望を絶たんと。王之を許す。遂に秦王と池に會す。秦王、酒を飲み酣にして曰く、寡人竊に趙王の音^音を好むを聞く。請ふ瑟を奏せよと。趙王、瑟を鼓す。秦の御史^ス前み書して曰く、某年月日、秦王、趙王と會飲し、趙王をして瑟を鼓せしむと。藺相如前んで曰く、趙王竊に秦王の善く秦聲を爲すを聞く。請ふ盆^ツ缶^フを秦王に奉じ以て相娛樂せんと。秦王怒つて許

さす。是に於て相如前み缶を進め、因つて跪き秦王に請ふ。秦王缶を擊つを肯んせず。相如曰く、五歩の内、相如請ふ^我頸血を以て大王に濺ぐを得んと^{身ヲ驚テ、秦王ヲ殺サントノ意}。左右、相如を刃せんと欲す。相如、目を張つて之を叱す。左右皆靡く。是に於て秦王、譯はず、爲めに一たび缶を擊つ。相如、顧みて趙の御史を召し書せしめて曰く、某年月日、秦王、趙王の爲めに缶を擊つと。秦の群臣曰く、請ふ趙の十五城を以て秦王の壽を爲せと。藺相如も亦曰く、請ふ秦の咸陽を以て趙王の壽を爲せと。秦王、酒を竟るまで、終に勝を趙に加ふる能はず。趙も亦盛んに兵を設けて以て秦を待つ。秦敢て動かす。既に罷めて國に歸る。相如の功の大なるを以て、拜して上卿と爲す、^{相如}位、廉頗の右に在り。廉頗曰く、我、趙の將となり、攻城野戰の大功あるに、藺相如は徒に口舌を以て勞を爲し、而して位、我が上に居る。且つ相如は素賤人なり、吾、羞ぢ、之が下たるに忍びずと。宣言して曰く、我、相如を見ば、必ず之を辱しめんと。相如聞いて、與に會するを肯んせず。相如、朝する時毎に、常に病と稱し、廉頗と列を争ふを欲

せず。已にして相如出で、廉頗を望見す。相如、車を引いて避け匿る。是に於て相如舍人相與に相如諫めて曰く、臣の、親戚を去つて君に事ふる所以は、徒に君の高義を慕へば也。今、君、廉頗と列を同じうし、廉君、悪言を宣ふれば、君畏れて之に匿れ、恐懼殊に甚し。且つ庸人尙ほ之を羞づ、況んや將相に於てをや。臣等不肖なり、請ふ辭し去らんと。聞相如、固く之を止めて曰く、公の廉將軍を視る、秦王に孰れぞと。曰く、廉頗ハ若かざる也と。相如曰く、夫れ秦王の威を以てして、相如之を廷に叱して、其群臣を辱しむ。相如、驚なりと雖も、獨り廉將軍を畏れんや。顧みて吾之を念ふに、強秦の敢て兵を趙に加へざる所以の者は、徒に吾等兩人の在るを以て也。今、兩虎共に闘は、其勢俱に生きじ。吾、此を爲す所以の者は、國家の急を先にして私讎を後にせんとするが以也と。廉頗之を聞き肉袒して荆楚を負ひ、賓客に因つて蘭相如の門に至り、罪を謝して曰く、鄙賤の人己チ、將軍の寛うする寛恕ナの此に至るを知らざりし也と。卒に相與に驢して、刎頸共ニ頸ヲ加ヘラレル即チ生死ヲ與ニスルの交りを爲す。

是の歲、廉頗、東、齊を攻めて、其一軍を破る。居ること二年、廉頗復た齊の幾を伐つて之を拔く。後三年、廉頗、魏の防陵、安陽を攻めて之を拔く。後四年、蘭相如、將として齊を攻め、平邑に至りて罷む。其明年、趙奢、秦の軍を蘭與の下に破る。趙奢は、趙の田部の吏田ノ租稅ヲ收ムル者也。租稅を收むるに、平原君の家、出すを肯んせず。趙奢、法を以て之を治め糾ス、平原君の事を用ふる者九人を殺す。平原君怒り、將に奢を殺さんとす。奢因つて説いて曰く、君は趙に於て貴公子たり。今、君の私家を縦にして公に奉せずんば、則ち法削されん。法削されば則ち國弱く、國弱くば則ち諸侯兵を加へ、諸侯兵を加へば、是れ趙無からん。君安んぞ此富を有するを得んや。君の貴を以てして、公に奉すること法の如くせば則ち上下平かに、上下平かならば則ち國強く、國強くば則ち趙固くして、君、貴戚たり、豈に天下に輕んせられんやと。平原君以て賢となし、之を王に言ふ。王之を用ひ、國賦を治めしむ。國賦國賦太だ平かに、民富みて府庫實つ。

秦、韓を伐ち、閼與に軍す。王、廉頗を召して問うて曰く、救ふ可きや不いやと。對へて曰く、道遠くして險狹、救ひ難しと。又樂乘を召して問ふ。樂乘對ふること廉頗の言の如し。又召して趙奢に問ふ。奢對へて曰く、其路遠くして險狹、之を譬へば猶ほ兩鼠の穴中に闘ふがごとく、將勇なる者勝たんと。王乃ち趙奢をして將となり之を救はしむ。兵、邯鄲を去る三十里にして、軍中に令して曰く、軍事を以て諫むる者有らば死せんと。秦の軍、武安の西に軍す。秦の軍鼓譟して兵を勒部す。武安の屋瓦盡く振ふ。趙軍中、候一人あり、言ふ、急に武安を救へと。趙奢立キチコロに之を斬り、壁を堅うして留まり、二十八日行かず、復た壘を益増す。秦の間者來り入る。趙奢、善く食はしめて之を遣る。間者以て秦の將に報す。秦の將大に喜んで曰く、夫れ國を去る三十里にして軍行かず、乃ち壘を増す。閼與は趙の地に非ざらんと。趙奢既に已に秦の間者者を遣り、乃ち甲を卷いて輕裝スルテ云之に趨く、二日一夜にして至る。善く射る者をして閼與を去る五十里にして軍せしむ。軍壘成る。秦人之を聞き、甲を悉して至る。趙奢軍士許

歴、軍事を以て諫めんと請ふ。趙奢曰く、之を内れよと。許歴曰く、秦人は趙の師の至るを意オモはず。此れ其來る氣盛んならん。將軍必ず厚く其陣を集めて以て之を待て。然らずんば必ず敗れんと。趙奢曰く、請ふ令を受けんと。許歴曰く、請ふ鉄質の誅に就かんと。趙奢曰く、後令を邯鄲に胥てと。許歴、復た諫めんと請ふ、曰く、先づ北山の上に據る者は勝ち、後れて至る者は敗れんと。趙奢許諾す。即ち萬人を發して之に趨く。秦の兵後れて至り、山を爭へども上るを得ず。趙奢、兵を縦つて之を擊ち、大に秦の軍を破る。秦の軍解けて走り、遂に閼與の圍を解いて歸る。趙の惠文王、奢に號を賜ひ、馬服君と爲し、許歴を以て國尉と爲す。趙奢是に於て廉頗、藺相如と位を同じうす。

後四年、趙の惠文王卒し、子の孝成王立つ。七年、秦、趙の兵と、長平に相距つぐ。時に趙奢已に死して、藺相如病篤し。趙、廉頗をして將として秦を攻めしむ。秦數々趙の軍を敗る。趙の軍、壁を堅くし戰はず。秦數々戰を挑めども、廉頗肯んせず。趙王、

秦の間者を信ず。秦の間の言に曰く、秦の惡む所は、縞り馬服君趙奢の子、趙括の將と爲らんを畏るゝ耳と。趙王因つて括を以て將となし、廉頗に代らしむ。藺相如曰く、王は名を以て括を使ふ、コトヲ柱コトヲに膠ニカハして瑟を鼓するが若き耳、柱ハ之ヲ動かシテ以テ絃ヲ調フベシ若シ之チ一處ニ膠着スレバ變態ノ調ヲ失フ也。括は徒に能く其父の書傳を讀むのみ、變態ニ合ふを知らざる也。趙王聽かず、遂に之を將とす。趙括、少き時より兵法を學び兵事を言ふ。以へらく天下能く當る莫しと。嘗て其父奢と兵事を言ふ。奢難する難點ヲ打ツ也。能はず。然れども善しと謂はず。括の母、奢に其故を問ふ。奢曰く、兵は死地なり、而るに括は易く之を言ふ。趙をして括を將とせざらしめば則ち已む、若し必ず之を將とせば、趙の軍を破る者は必ず括ならんと。括將に行かんとするに及び、其母上書して王に言つて曰く、括は將たらしむ可からずと。王曰く、何が以ぞと。對へて曰く、始め妾、其父奢趙に事ふ。時ハ將たりしも、身づから飯飲を奉じて食を進むる所の者賢は十を以て數へ、友とする所の者は百を以て數ふ。大王及び宗室の賞賜せる所の者は、盡く以て軍吏士大夫に予ふ。命を

受くるの日は、家事を問はず。今括、一旦、將と爲り、東向して朝するに、軍吏敢て之を仰ぎ視る者無く係レルヲ云フ。王の賜ふ所の金帛は、歸つて家に藏し、而して日に便利の田宅の買ふ可き者を視て之を買ふ。王以て其父に何如と爲す。父子、心を異にす。願はくは王遣る勿れと。王曰く、母、之を置け。吾已に決すと。括の母因つて曰く、王終に之を遣らんとせば、即し稱はざる如きあるも、妾随つて坐坐する無きを得んやと。王許諾す。趙括既に廉頗に代り、悉く約束を更へ、軍吏を易置す。秦の將白起之を聞き、奇兵を縱ち、佯り敗走して、其糧道を絶ち、其軍を分斷して二と爲す。趙士卒、心を離す。四十餘日、軍餓う。趙括、銳卒を出し自ら搏戰す。秦の軍、趙括を射殺す。括の軍敗れ、數十萬の衆遂に秦に降る。秦悉く之を阬にす。趙前後亡ふ所ノ士、凡そ四十五萬。明年、秦の兵遂に邯鄲を圍む。歲餘、幾んど脱するを得ず。楚魏諸侯の來り救ふに頼り、乃ち邯鄲の圍を解くを得たり。趙王、亦括の母の先言を以て竟に括ノ母ヲ誅せず。

邯鄲の圍解けてより五年にして、燕、栗腹の謀を用ひて曰く、趙の壯者は長平に盡き、
 其孤シヨは未だ壯シヨならずと。兵を擧げて趙を撃つ。趙、廉頗をして將たらしめ、擊つ
 て大に燕の軍を鄣に破り、栗腹を殺して、遂に燕を圍む。燕、五城を割いて和を請ふ。
 乃ち之を聽す。趙、財文を以て廉頗を封じ、信平君と爲し、假、相國と爲す。廉頗の
 長平に免せられて歸るや、勢を失ふの時、故の客盡く去れりしも、復た用ひられて將
 と爲るに及び、客又復た至る。廉頗曰く、客退けと。客曰く、吁、君何ぞ見るの晩オチ
 や。夫れ天下は市場道道を以て交はる。君、勢有れば、我則ち君に従ひ、君、勢無けれ
 ば則ち去る。此れ固より其理也。何の怨かあらんやと。居ること六年、趙、廉頗をし
 て魏の繁陽を伐たしめ、之を抜く。趙の孝成王卒し、子の悼襄王立つや、樂乘をして
 廉頗に代らしむ。廉頗怒つて、樂乘を攻む。樂乘走る。廉頗遂に魏の大梁に奔る。其
 明年、趙乃ち李牧を以て將となして、燕を攻めて武遂、方城を抜く。廉頗、梁に居る
 之を久しうして、魏、信用する能はず。趙、數々秦の兵に困しむを以て、趙王、復た廉

頗を得んを思ひ、廉頗も亦趙に用ひられんを思ふ。趙王、使者をして廉頗の尙ほ用ふ
 可きや否やを視しむ。廉頗の仇ナ郭開、多く使者に金を與へて之廉を毀らしむ。趙の
 使者既に廉頗を見る。廉頗、之が爲めに一飯に斗米九合、肉十斤一斤ハ我が四、十七分ニ當ル、甲を被
 り馬に上り、以て尙ほ用ふ可きを示す。趙の使還り王に報じて曰く、廉將軍老いたり
 と雖も、尙ほ善く飯す飯ヲ食フナリ。然れども臣と坐し、之を頃シテして、三たび遺矢遺すと。
 趙王以て老いたりと爲し、遂に召さず。楚、廉頗ガ魏に在りと聞き、陰に人をして之
 を迎へしむ。廉頗一たび楚の將と爲る、功無し。曰く、我、趙人を用ひんを思ふと。
 廉頗卒に壽春に死す。

李牧は、趙の北邊の良將也。常に代の鴈門に居り、匈奴に備ふ。便宜を以て吏を置き、
 市市中租は皆莫也府に輸入して、士卒の費と爲し、日に數匹牛を撃つて士を饜し、射
 騎を習はせ、烽火寇ヲ報ズル爲ノノを謹み、間諜を多くし、厚く戰士を遇し、約を爲して曰く、
 匈奴即し入り類テ盜せば、急に入りて收保せよ。敢て匈奴捕虜する者あらば斬らんと。

匈奴入る毎に、烽火を謹み、輒ち入りて收保し、敢て戦はず。是の如くすること數歲なり、亦チ畜類亡失せず。然れども匈奴は李牧を以て怯と爲す。趙の邊兵と雖も亦以爲へらく吾が將は怯なりと。趙王、李牧を讓む。李牧故の如し。趙王怒つて之を召し、他人をして代り將たらしむ。歲餘、匈奴來る毎に出でて戦ふ。出で戦うて數々利あらず。失亡多くして、邊邊境ノ人民、田畜耕作するを得ず。復た李牧を請ふ。牧、門を杜ぢて出でず、固く疾と稱す。趙王乃ち復た強ひて起たせ、兵に將たらしむ。牧曰く、王必ず臣を用ひば、臣は前の如けん、夫テ宜シクバ乃ち敢て令を奉せんと。王之を許す。李牧至り、故の約の如くす。匈奴數歲得る所無く、終に以て怯と爲す。邊士は日に賞賜を得るも而も用ひられず、皆一戦を願ふ。是に於て乃ち選車を具へ、千三百乘を得、選騎、萬三千匹、戰功ニヨリテ賞金百金の士五萬人、殺者手十萬人を得、悉く勸して戦を習はしめ、大に畜牧を縦ち、人民、野に滿つ。匈奴小しく入る、伴り亡げて勝たず、數千人を以て之に委す後ニ案テ。單于匈奴之を聞き、大に衆を率ゐて來り入る。李牧多く奇陳奇を爲し、

左右の翼を張り、之を擊ち、大に破り、匈奴十餘萬騎を殺し、稽蓋を滅ぼし、東胡を破り、林胡を降す。單于奔走す。其後十餘歲、匈奴敢て趙の邊城に近づかず。趙の悼襄王元年、廉頗既に亡げて魏に入る。趙、李牧をして燕を攻めしめ、武遂、方城を拔く。居ること二年、龐煖趙、燕の軍を破り、劇辛を殺す。後七年、秦、趙を破り、將大扈輒を武遂城に殺し、首を斬ること十萬。趙乃ち李牧を以て大將軍と爲し、秦の軍を宜安に擊ち、大に秦の軍を破つて、秦の將桓齮を走らす。趙、李牧を封じて武安君と爲す。居ること三年、秦、番吾趙ノ地名を攻む。李牧擊つて秦の軍を破り、南、韓魏を距ぐ。趙王遷七年、秦、王翦をして趙を攻めしむ。趙は李牧、司馬尙をして之を禦がしむ。秦多く趙王の寵臣郭開に金を與へ、反間を爲さしめて言ふ、李牧、司馬尙反せんと欲すと。趙王乃ち趙蔥及び齊の將顏聚をして李牧に代らしむ。李牧、命を受けず。趙、人をして微に李牧を捕得して之を斬らしめ、司馬尙を廢す。後三月、王翦因つて急に趙を擊ち大に破り、趙蔥を殺し、趙王遷及び其將顏聚を虜にして、遂に趙

を滅ぼす。
 太史公曰く、死を^レ知れば^レ必^ス勇^ニなり。死^スなる者^ノ難^キに非^ズ、死^スなる者^ニ處^スるの難^キなり。藺相如、壁^ヲを引き柱^ヲを睨み、及^テ秦王^ノの左右^ヲを叱^スるに方^ツてや、勢^ヲ、誅^ニに過ぎ^ズ。然^レども士[、]或^ハは怯懦^ニにして、敢^テて發^セせず。相如、一^ニたび其氣^ヲを奮^ヒひ、威^ヲを敵國^ニに信^ベ、退^{いて}頗^ニに讓^リ、名[、]太山^{より}も重^シ。其^ノ智勇^ニに處^スる、之^ヲを兼^ムぬと謂^フ可^キかな。

田單列傳 第二十二

田單は、齊の諸田^中の疏屬^也也。湣王の時、單、臨菑の市掾^{市官}と爲^リしも、知ら^れず。燕、樂毅をして伐^つて齊を破^{らし}むるに及び、齊の湣王出奔^し、已^ににして莒城を保^つ。燕の師長驅^{して}齊を平^ぐ、而^{して}田單は安平に走る。其^ノ宗人^一族^ヲをして盡^く其車軸^ノの末^ヲを斷^つて鐵籠^ヲを傅^けしむ^ル。已^ににして燕の軍、安平を攻^め、齊城^ヲ壞^る。齊人^走り塗^也を争^ふ。轆^車折^れ車^敗れたるを以^て人^燕に虜^にせらる。唯^だ田單の宗人^{のみ}鐵籠^ヲを以^ての故^にに脱^るを得[、]東[、]即墨を保^つ。燕既^にに盡^く齊の城を降^す、唯^だ獨^り莒^と即墨^{との}のみ下^らず。燕の軍、齊王、莒^に在^りと聞^き、兵^ヲを并^せて之^ヲを攻^む。齊^ノ救^援ノ^メ來^リシ^楚ノ^淳齒^分ダ^{ント}欲^スル^ヨリ^既に^齊湣^王を^莒に^殺す。單^因つて^堅く守^つて燕の軍^ヲを距^ぎ、數^年下^らず。燕、兵^ヲを引^{いて}東[、]即墨を圍^む。即墨の大夫出^でて、與^に戰^ひ、敗^れ死^す。城^中相與^に田單^ヲを推^{して}曰^く、安平の戰^に田單の宗人^{のみ}、鐵籠^ノ

以に全きを得たり。田兵に習ふと。立て、以て將軍と爲し、即墨を以て燕を距ぐ。之を頃シバクして燕の昭王卒し、惠王立つ。樂毅と隙有り。田單之を聞き、乃ち反間を燕に縦ち、宣言して曰く、齊王已に死し、城の拔けざる者二耳。樂毅、誅を畏れて、敢て歸らず。齊を伐つを以て名と爲せども、實は兵を連ね南面して齊に王たらんと欲す。齊人未だ附かず、故に且く緩く即墨を攻め以て其事を待つ。齊人の懼るる所は、唯だ他將の來りて即墨の殘ソコはれんを恐るゝなりと。燕王以て然りと爲し、騎劫をして樂毅に代らしむ。樂毅、因つて趙に歸す。燕人士卒怒る。而して田單乃ち城中の人をして食すること必す其先祖を庭に祭らしむ。飛鳥悉く城中に翔舞して下り食む。燕人之を怪しむ。田單因つて宣言して曰く、神來り下つて我に教ふと。乃ち城中の人に令して曰く、當に神人あつて我が師と爲るべしと。一卒あり、曰く、臣以て師と爲る可きかと。因つて反り走る。田單乃ち起つて其卒引き還し、東郷東郷して坐せしめ、之に師事す。卒曰く、臣、君を欺く。臣、誠臣に無能なりと。田單曰く、子言ふ勿れと。因

つて之を師とし、約束を出す毎に、必す神師と稱す。乃ち宣言して曰く、吾唯だ懼るるは、燕の軍の、得る所の齊の卒を削り、之を前行陣ハナチに置き、我と戦ひ、爲爲、即墨の敗れんことなりと。燕人之を聞き、其言の如くす。城中の人、齊の諸降者の盡く削らるるを見るや、皆怒つて堅く守り、唯だ得られんを恐る。單又反間を縦つて曰く、吾、燕人の吾が城外の家墓を掘り、先人を僂ハツカしめんを懼る、寒心す可しと。燕の軍盡く地墓を掘り、死人を焼く。即墨の人、城上より望見して、皆涕泣し、其の出戦を欲し、怒自ら十倍せり。田單、士卒の用ふ可きを知り、乃ち身づから版插版を操り、士卒と功を分つ。妻妾をも行伍の間に編み、盡く飲食を散じ、士を饗す。甲卒をして皆内ニ伏せしめ、老弱女子をして城に乘らしめ、使を遣りて降を燕に約す。燕の軍皆萬歲と呼ぶ。田單又民の金を收めて、千溢溢を得、即墨の富豪をして燕の將に遣らしめて曰く、即墨即し降らば、願はくは吾が族家の妻妾を虜掠する無く、安堵安堵せしめよと。燕の將大に喜び、之を許す。燕の軍此に由り益々懈る。田單乃ち城中を收めて、千餘牛を得、絳繒

赤地の衣を爲り、畫くに五彩五の龍文龍を以てし、兵刃を其角に束ねて、尾に脂を灌ノぎ草を束ね、其端を焼き、城に數十穴を鑿つて、夜、牛を縦ち、壯士五千人、其後に隨ふ。牛尾熱し、怒つて燕の軍に奔る。燕の軍夜大に驚く。牛尾の炬火、光明炫爛たり。燕の軍之を視るに皆龍文なり。觸る、所盡く死傷す。五千人因つて枚行軍ノ際聲ヲ出サヌを銜爲メニ口ニ銜ムみ之を撃つ。而して城中鼓譟して之に従ひ、老弱皆銅器を撃つて聲を爲す。聲、天地を動カかす。燕の軍大に駭き敗走す。齊人遂に其將騎劫を夷殺す。燕の軍擾亂奔走す。齊人、亡クぐるを追ひ北ぐるを逐ひ、過ぐる所の城邑、皆燕に呼いて田單に歸し、兵日に益々多クく、勝に乗ず。燕は日に敗亡し、卒に河上に至る。而して齊の七十餘城、皆復た齊と爲る。乃ち襄王を莒に迎へ臨菑に入れて政を聽かしむ。襄王、田單を封じて、號して安平君と曰ふ。

太史公曰く、兵は正を以て合ひ、奇を以て勝つ。之を善くする者は、奇を出すこと窮り無く、奇正違つて相生すること環カの端無きが如し。夫れ始めは處女の如く、適也人、

戸を開く備ヘザル也、後には脱兎の如く、適也距ぐに及ばずとは、其れ田單の謂か。

初め淖齒の、湣王を殺すや、莒人、湣王の子法章を求めて、之を太史媯の家を得たり。

其時法章 人の爲めに園に水灌ぐ。媯の女憐れんで善く之を遇す。後、法章私に情を以て女に告ぐ。女遂に與に通ず。莒人共に法章を立て、齊王と爲し、莒を以て燕を距ぐに及びて、太史氏の女遂に后と爲る、此所謂君王后也。

燕の初め齊に入るや、畫邑の人王蠋の賢を聞き、軍中に令して曰く、畫邑を環る三十里には入ること無かれと。王蠋の故を以てなり。已にして人をして蠋に謂はしめて曰く、齊人多く子の義を高しとす。吾、子を以て將と爲し、子を萬家邑に封せんと。蠋固く謝す。燕人曰く、子聽かずんば、吾、三軍を引いて畫邑を屠らんと。王蠋曰く、忠臣は二君に事へず、貞女は二夫を更へずと。齊王、吾が諫を聽かず、故に退いて野に耕す。國既に破亡す、吾、存する能はず。今又之を劫かすに兵を以てし、君の將となるは、是れ桀を助けて暴を爲す也。其の生きて義無きよりは、固に來らるゝに如か

すと。遂に其頸を樹枝に經り、自ら奮ひ^ト死す。齊の亡^シ大夫之を聞いて曰く、王蠋は布衣なれども、義として燕に北面せず。況んや位に在り祿を食む者をやと。乃ち相聚まり、莒に如き、^{齊王}諸子を求めて、立て、襄王と爲す。

魯仲連鄒陽列傳 第二十三

魯仲連は、齊の人也。奇偉^{クキ}倜儻^{トウタウ}の畫策を好みて、仕官任職を肯んせず、好んで高節を持す。趙に遊ぶ。趙の孝成王の時にして、秦王、白起をして趙の長平の軍を破らしむる、前後四十餘萬なり。秦兵遂に東、邯鄲を圍む。趙王恐る。諸侯の救兵敢て秦の軍を撃つ莫し。魏の安釐王、將軍晋鄙をして趙を救はしめしも、秦を畏れ蕩陰に止まりて進まず。魏王、客將軍、新垣衍をして間に邯鄲に入り、平原君に因つて趙王に謂はしめて曰く、秦の急に趙を圍むを爲す所ものは、前には齊の湣王と張を争ひ帝と爲り、已にして復た帝を歸ししが、今、齊の湣王已に益々弱く、今に方つては唯だ秦のみ天下に雄たり。^ハ此れ必ずしも邯鄲を食るに非ず、其意、復た帝と爲るを求めんと欲するなり。趙、誠に使を發し秦の昭王を尊んで帝と爲さば、秦は必ず喜んで兵を罷めて去らんと。平原君猶預^豫して、未だ決する所あらず。

此時、魯仲連適々趙に遊ぶ。秦、趙を圍むに會ふ。魏の趙をして秦を尊んで帝と爲さしめんと將欲するを聞き、乃ち平原君に見えて曰く、事將に奈何せんとするかと。平原君曰く、勝や何ぞ敢て事を言はん。前に四十萬の衆を外に亡ひ、今又、内、邯鄲を圍まれて之ヲ解キ去る能はず。魏王、客將軍新垣衍をして、趙をして秦を帝とせしめんとす。今其人、是に在り。勝や何ぞ敢て事を言はん。魯仲連曰く、吾始め君を以て天下の賢公子と爲したりしも、吾乃ち今然る後君の天下の賢公子に非ざるを知る也。梁の客ナ新垣衍は安くに在る。吾請ふ君の爲めに責めて之を歸さんと。平原君曰く、勝、請ふ紹介を爲して、之を先生に見えしめんと。平原君遂に新垣衍を見て曰く、東國に魯仲連先生なる者有り。今其人此に在り。勝請ふ紹介を爲し、之をして將軍に交はらしめんと。新垣衍曰く、吾聞く魯仲連先生は齊國の高士也。衍や人臣にして、使事、職あり。吾、魯仲連先生を見るを願はずと。平原君曰く、勝、既に已に之を泄らせりと。新垣衍許諾す。魯仲連、新垣衍を見て言ふなし。新垣衍曰く、吾、此圍城の中に居

る者を觀るに、皆平原君に求むるある者也。今、吾、先生の玉貌を觀るに、平原君に求むるある者に非ざる也。曷爲れぞ久しく此圍城の中に居て去らざると。魯仲連曰く、世、鮑焦周時ノを以て、從頌從容也たる無くして死せりと爲すは、皆非也。彼ハ高尙ニヤ當時ノ世道人心ヲ矯正セントシテヨリシテ 衆人知らざれば、則ち自分一身の爲めなりしとなす。魯連自ラ鮑焦ニ比スルナリ彼の秦は禮義を棄て、首ヲ斬功を上ぶの國也。其士を權ケテ使し、其民を虜使す。彼即肆然と志肆して帝となり、過つて政を天下に爲さば、則ち連は東海を踏んで死する有らん耳。吾之が民と爲るに忍びざる也。將軍に見ゆるを爲す所のものは、以て趙を助けんと欲する也と。新垣衍曰く、先生之を助くる、將に奈何せんとする。魯連曰く、吾將に梁及び燕をして之を助けしめんとす。齊楚は則ち固より之を助けんと。新垣衍曰く、燕は則ち吾請ふ以て従はんも、若し乃ち梁ならば、則ち吾は乃ち梁人也、先生惡んぞ能く梁をして之を助けしめんやと。魯連曰く、梁は未だ秦の帝と稱するの害を睹ざるが故耳。梁をして秦の帝と稱するの害を睹しめば、則ち必ず趙を助けんと。新垣衍曰

て弔せんと欲す。夷維子、鄒の孤主孤主に謂つて曰く、天子弔するハ、主人必ず將に殯棺メタル棺に倍後ニス、ル也、北面を南方に設け、然る後天子南面して弔せんとする也。鄒の群臣曰く、必ず此の若くせんとせば、吾、將に劍に伏して死せんとすと。固に敢て鄒に入れざりき。鄒魯の臣、生きては其君ノ生則ち事へ養ふを得ず、君死しては則ち購貨財ヲ購ト曰ヒ衣服ヲ購ト曰得ず。然れども且つ潘王天子の禮を鄒魯に行はんと欲すれば、鄒魯の臣潘王納るゝを果さず。今、秦は萬乘の國也。梁も亦萬乘の國也。俱に萬乘の國に據り、各々王と稱するの名あるを、其一戰して勝つを睹て、従つて之を帝とせんと欲す。是れ三晋韓魏趙の大臣をして鄒魯の僕妾に如かさらしむるなり。且つ秦已む無くして帝たらば、則ち且に諸侯の大臣を變易せんとす。彼、將に其の不肖とする所を奪うて、其の賢とする所に與へ、其の憎む所を奪うて、其の愛する所に與へんとす。彼又將に其子女、讒妾佞をして諸侯の妃姫と爲し、梁の宮に處らしめんとす。梁王安んぞ晏然と無事して已むを得んや。而して將軍又何を以てか故寵故ノ如キ寵愛を得んや。

ど。是に於て新垣衍起つて再拜し謝して曰く、始め先生を以て庸人凡庸ノ人と爲し、が、吾乃ち今日、先生の天下の士たるを知る。吾、請ふ出で、敢て復た秦を帝とするを言はじと。秦の將之を聞き、爲めに軍を却くる五十里なり。適々魏の公子無忌、晋鄙の軍を奪ひ以て趙を救ひ秦の軍を撃つに會ふ。秦の軍遂に引いて去る。是に於て平原君、魯連を封せんと欲す。魯連辭讓す。使者三たびすれども、終に受くるを肯んせず。平原君乃ち置酒し、酒酣にして、起つて前みて千金を以て魯連の壽を爲す。魯連笑つて曰く、所謂天下の士に貴ぶ者は、人の爲めに患を排き難を釋き、紛亂を解いて而も報賞取る無ければ也。即報賞取るあらば、是れ商賈の事也。連、爲すに忍びざる也と。遂に平原君を辭して去り、終身復た見えず。

其後二十餘年、燕の將攻めて齊、聊城を下す。聊城の人、或は之を燕王に讒す。燕の將誅を懼れ、因つて聊城を保守して、敢て燕歸らず。齊の田單、聊城を攻むる歳餘、士卒多く死せるも、聊城下らず。魯連乃ち書ツツを爲つて、之を矢に約し結ビ付ケル也以て城中

に射、燕の將に遺る。書に曰く、吾之を聞く、智者は時に倍いて利を棄てず、勇士は死を怯れて名を滅せず、忠臣は身を先にして君を後にせずと。今、公、一朝の忿を行ひ、燕王の臣なきを顧みざるは、忠に非ざる也。身を殺し聊城を亡ぼして、威、齊に信びざるは、勇に非ざる也。功敗れ名滅し、後世に稱せらるゝ無きは、智に非ざる也。三者をば世主は臣とせず、説士は載せず。故に智者は再び計らず、勇士は死を怯れず。今公死生、榮辱、貴賤、尊卑、此時にして、此時再び至らず。願はくは公詳に計つて俗と同じうする無かれ。且つ楚は齊の南陽を攻め、魏は齊平陸を攻むれば、齊は南面の心無し、以爲へらく南陽を亡ぶの害は小にして、濟北即ち聊城を得るの利の大きなに若かすと。故に計を定め審かに之に處す。今秦人、兵を下さば、魏は敢て東面せず、衛秦の勢成り、楚國の形勢危ふからん。齊は南陽を棄て右壤を斷つとも、濟北聊城を定むる、計つて猶ほ且つ之を爲さん。且つ夫れ齊の必ず聊城を決する、公再び計る勿れ。今、楚魏交々齊に退けられて、燕の救ひは至らず、全齊の兵を以て天

下の規計無きを、聊城と共に期年の敵に據らば、則ち臣、公の得る能はざるを見ん。且つ燕國は大亂れ、君臣計を失ひ、上下迷惑す。栗腹燕の大將、十萬の衆を以て、五たび外に折け、萬乘の國を以てして、趙に圍まれ、壤土削られ主困しみ、天下の僂笑と爲る。國敵えて禍多く、民、心を歸する所なし。今公、又敵聊城の民を以て、全齊の兵を距ぐ。是れ墨翟城守ニ巧ナル宋ノ人の守也。人肉を食ひ骨を炊ぎ、士は外に反するの心無し、是れ孫臋の兵也。能、天下に見はる。然りと雖も公の爲めに計るに、車甲車馬を全うして以て燕に報するに如かず。車甲を全うして燕に歸らば、燕王必ず喜ばん。身を全うして國に歸らば、士民公ヲ見ルコト父母を見るが如けん。交友交臂を攘げて世に議し、公功業を明かにす可し。上は孤主を輔けて以て群臣を制し、下は百姓を養ひ以て説士を資け、國を矯め俗を更へ、功名立つ可き也。若シ公ニ其意亡くんば、亦燕を捐て世を弃て、東、齊に游ばんか。齊必地を裂き封を定め、富、陶衛陶朱公、衛公子荆に比し、世世、孤と稱して、齊と久しく存する、又一計也。此兩計は何レ名を顯はし實を厚うす

る也。願はくは公詳に計つて審に一に處れ。且つ吾之を聞く、小節を規る者は榮名を成す能はず、小耻を惡む者は大功を立つる能はずと。昔者管夷吾は、桓公を射て、其劔鉤に中てしは、篋^箠也。公子糾を遣うて、死する能はざりしは、怯^怯なり。束縛^桎楮^手にせられしは、辱^辱なり。此三行の若きは、世主、臣とせず、郷里者も通^往せず。郷に管子をして幽囚せられて出でず、身死して齊に反らざらしめば、則ち亦、名、辱人賤行たるを免かれず、威獲^奴すら且つ之と名を同じうするを羞ぢしならん、況んや世俗をや。故に管子は、身縲^縲目^目の中に在るを耻ぢずして、天下の治まらざるを耻ぢ、公子糾^メに死せざるを耻ぢずして、威の諸侯に信びざるを耻づ。故に三行の過を兼ねて、五霸の首となり、名、天下に高うして、光、鄰國を燭^燭らせり。又曹子沫は魯の將と爲り、三戰三北して、地を亡ふ五百里なり。郷に曹子をして計つて反顧せず、讖して踵を還^還らさず、頸を刎ねて死せしめば、則ち亦、名、敗軍の禽將たるを免かれざりしならんを、曹子、三北の耻を棄て、退いて魯君と計り、桓公、天下を朝し諸侯を

會するや、曹子、一劔の任を以て、桓公の心を擯^擯楯^楯の上に枝^刺さんとし、顔色變せず、辭氣悻^悻れず、^{其結}三戰して亡ひし所、一朝にして之を復^取しつ、天下震動し、諸侯驚駭し、威、吳越に加はる。此二士の若きは、小廉を爲して小節を行ふ能はざりしに非ず、以爲へらく、身を殺し軀を亡ぼし、世を絶ち後を滅し、功名立たざるは、智に非ずと。故に忿怒の怨を去つて、終身の名を立て、忿^忿恨^恨の節^節を棄て、累世の功を定めたり。是を以て業、三王と流を争うて、名、天壤と相^争る、也。願はくは公、一を擇んで之を行へと。燕の將、魯連の書を見、泣くこと三日、猶^猶預^預して自ら決する能はず。燕に歸らんと欲する、已に隙あり、誅を恐れ、齊に降らんと欲する、齊に^齊人^人ヲ殺虜する所甚だ衆く、已に降つて後に辱しめられんを恐れ、喟然として歎じて曰く、人に刃せられんよりは、我、寧ろ自刃せんと、乃ち自殺す。聊城亂る。田單遂に聊城を屠り、歸つて魯連^事を^齊王^王言ひ、之を爵せんと欲す。魯連逃れて海上に隠れ、曰く、吾、富貴にして人に誚^誚せんよりは、寧ろ貧賤にして世を輕んじ志を肆^肆にせんと。

鄒陽は、齊の人也。梁に遊び、故の吳人莊姓也、夫子也、淮陰の枚生枚の徒と交はり、上書して名ヲ知、羊勝、公孫詭の間に介る。勝等、鄒陽を嫉み、之を梁の孝王に惡言す。孝王怒り之を吏に下し、將に之を殺さんと欲せんとす。鄒陽客游し、讒を以て禽へられ、死して累を負ふを恐れ、乃ち獄中より上書して曰く、臣聞く、忠なれば報せられざる無く、信なれば疑はれずと。臣常に此語以て然りと爲しき。然レド徒に虚語耳。昔者荆軻は燕子、太丹の義を慕ふ、精誠天白虹を貫けば、太子丹之を畏れぬ。衛先生は秦の爲めに長平の事を畫る、其誠天太白星が昴宿二十八を蝕して犯ス、昭王之を疑へり。夫れ精荆軻、衛先生ノ精神天地を變ずれども、其信、兩主燕丹トに喻られず。豈に哀しからずや。今、臣、忠を盡し誠を竭し、議を畢し、王知を願へども、王左右者不明にして、卒に吏の訊に従ひ、世に疑はる。是れ荆軻、衛先生をして復た起らしむるも、燕秦悟らざるモ也。願はくは大王之を孰然察せよ。昔、卞和は寶を獻じ、楚王之を削り、李斯は忠を竭し、胡亥之極刑す五刑ヲ具ヘ。是を以て箕子は伴り狂し、接輿は世を辟く。此

患に遣ふを恐れし也。願はくは大王、卞和、李斯の意を孰察して、楚王、胡亥の聽ナリを後にし、臣をして箕子、接輿の笑ふ所と爲らしむる無かれ。臣聞く、比干は心を剖かれ、子胥は鴟夷馬革製ノ壺ニ尸ヲ盛ルせられ江ニ投きと。臣始め之信せず、乃ち今之を知る。願はくは大王孰察して、少しく憐みを加へよ。諺に曰く、白頭ニナル新ラシク交ウの如く車蓋を傾けテ故舊の如きありと。何となれば則ち知ると知らざると也。故に昔、樊於期は秦を逃げ燕に之き、荆軻に首を藉カし自分ノ首ヲ斬ツ、以て太丹の事に奉じ、王奢は齊を去り魏に之き、城に臨んで自刎し、以て齊を却けて魏を存せり。夫れ王奢、樊於期は、齊秦に新にして燕魏に故なりしに非ず、二國を去り兩君ノ爲に死せる所以は、行、志に合うて義を慕ふ窮まり無かりければ也。是を以て蘇秦は天下に信せられざりしも、燕の尾生信ヲ守リテ死セル人と爲り燕ニアリテハ信、自圭中山ノ將は戦うて六城を亡ひ、其結果中山ノ君ニ殺サレドセシテ魏の爲めに中山を取りき。何となれば則ち誠に以て相知るあれば也。蘇秦、燕に相たり、燕人之を王に惡す、王、劍を按じて讒者怒り、却ッテ蘇秦ニ食はすに馱驥馱を以

てし、白圭、中山に顯はれ、中山の人之を魏の文侯に惡す、文侯魏之に投するに夜光の璧を以てせり。何となれば則ち兩主二臣は心を割き肝を拆いて互相信す、豈に浮辭根無に心移らんや。故に女は美惡ト無く、宮に入つて妬まれ、士は賢不肖ト無く、朝〇〇に入つて嫉〇〇まる。昔者司馬喜は宋に賸脚足ヲ斬せられシ、卒に中山に相たり、范雎は魏に摺脅脇ヲ摺せられシ、卒に應侯となれり。此二人の者は、皆必然の畫を信自信ヲ、朋黨類の私ヲを捐て、孤獨の位を挾む、故に自ら嫉妬の人に免かる、能はざりし也。是を以て申徒狄は自ら河に沈み、徐衍は石を負うて海に入る。世に容れられざるも、義として苟も此周黨を朝に取りて以て主上の心を移さざりき。故に百里奚は食を路に乞ひしを、繆公之に委ぬるに政を以てし、箕賦は牛を車下に飯カひしを、桓公之に任ずるに國を以てせり。此二人の者は、豈に宦を朝に借り、譽を左右に假り、然る後二主之を用ひしならんや。心に感じ行ひに合し、膠漆よりも親しく、昆弟兄弟も離す能はず、豈に衆口に惑はんや。故に偏聽一方ノ言ヲ聽を〇〇生じ、獨〇〇任〇〇亂〇〇を作

す。昔者、魯は季孫の説を聽いて孔子を逐ひ、宋は子罕の計を信じて墨翟を囚へぬ。夫れ孔墨の辯を以てするも、自ら譏諷を免がる、能はずして、二國以て危ふかりき。何となれば則ち衆口、金を鏢し、積毀、骨を銷せばなり。是を以て秦は戎人由餘を用ひて中國に覇たり、齊は越人蒙を用ひて、威宣威王を〇〇躍〇〇せり。此二國、豈に俗に拘はり世に牽かれて阿偏阿諛の辭に繫らんや、公公平聽〇〇並〇〇觀〇〇し、名を當世に垂れしなり。故に意合へば則ち胡越も昆弟となる、由余、越人蒙是れなり。合はざれば則ち骨肉も出逐逐して收め用す、朱朱象象管管蔡蔡周周公公ノ〇〇兄弟〇〇是れなり。今、人主賊に能く齊秦の義を用ひ、宋魯の聽を後にせば、則ち五伯、稱するに足らず、三王、爲し易き也。是を以て聖王は覺悟し、子之子ノ〇〇心〇〇を捐て、能く田常齊ノ簡公ノ〇〇賢〇〇を説ばず、比干の後孫子を封じ、孕婦胎の墓を修む、故に功業復た天下に就就る。何となれば則ち善を欲して厭く無ければなり。夫の晋の文公は其讎讎に親しみ、諸侯に疆疆たり、齊の桓公は其仇仇を用ひて、天下を一匡せり。何となれば則ち慈仁感勤にして、賊、

心に加はり、虚辭を以て借る可からざれば也。夫の秦は商鞅の法を用ひて、東、韓魏を弱め、兵、天下に彊きに至りて、卒に之を車裂し、越は大夫種の謀を用ひて、勁吳を禽にし、中國に覇となりて、卒に其身を誅せり。是を以て孫叔敖は三たび相位を去つて悔いず、於陵の子仲は三公を辭して、人の爲めに國に濳ぎき。今、人主誠に能く驕傲の心を去つて、報ゆ可きの意を懷き、心腹を披きて情素を見し、肝膽を墮つて德厚を施き、終に之臣チと窮達して、士に物ヲ愛む無くんば、則ち桀の狗も堯に吠えしむ可くして、蹠チの客も、由由許を刺さしむ可し。況んや萬乘の權に因り、聖王の資資を假るをや。然らば則ち荆軻の七族を滅シめ、要離の妻子を燒キか如は、豈に道ふに足らんや。臣聞く、明月の珠、夜光の璧も、闇暗を以て人に道路に投ずれば、人、劍を按じ相カ呵みざる無しと。何となれば則ち因縁無くして前に至ればなり。蟠木曲リクノ根根柢根輪囷委曲離詭盤にして、而も萬乘の器天子ノ輿車と爲るは、何となれば則ち左右カ先づ之が容容を爲すを以てなり。故に因無くして前に至れば、隋侯の珠、夜光の璧を出すと

雖も、猶ほ怨を結んで徳とせられず。故に人ありて先づ談ずれば、則ち枯木朽株を以てするも、功を樹て、忘れられず。今夫れ天下の布衣窮居の士、身、貧賤に在れば、堯舜の術を包ね、伊管伊尹の辯を挟み、龍逢、比干の意を懷き、忠を當世の君に盡さんと欲すと雖も、而れども素根柢素の容なく、精思を竭し、忠信を開き、人主の治を輔けんと欲すと雖も、則ち人主、必ず劍を按じて相カ呵みるの跡あり。是れ布衣をして枯木朽株の資と爲るを得ざらしむる也。是を以て聖王の世を制し俗を御するや、獨り陶鈞鈞の型の上に化して、卑亂の語に牽かれず、衆多の口に奪はれず。故に秦の皇帝は、中庶子蒙嘉の言に任せ、以て荆軻の説荆軻ニ對スを信じて、七首クチ竊に發し始皇帝殺サレント、周の文王は涇渭に獵し、呂尙を載せて歸り、以て天下に王たり。故に秦ノ始は左右を信じて殺されんとし、周は鳥集鳥を用てして王たり文王ノ太公ヲ得タルハ舊故ニ。因ラズ鳥ノ暴ニ集マルガ若シ。何となれば則ち其の能く攀拘攀の語を越え、域外の議論議論を馳せ、獨り昭曠昭明の道を觀しが以也。今、人主、諂諛の辭に沈み、帷裳左右近習の制に牽かれて帷裳ニ牽制、不

編の士逸才をして牛、驥驥と卑下を同じうスルガせしむ。此れ鮑魚が世を忿つて、富貴の樂タラシクに留トまらざりし所以なり。臣聞く、盛飾して衣冠ヲ飾リ朝に入る者は、利を以て義を汗アガさず、名號を砥礪研ギ磨クナリする者は、欲を以て行ひを傷らすと。故に縣名ガ勝母にして、曾子ニ其縣入らず、邑號ガ朝歌紂ノ作リシにして、墨子、車を迴せり。今、天下の寥廓の士度量をして、威重の權を攝し、位勢の貴を主とし、故に面を回マげ行ひを汗し、以て諂諛の人ニに事へて、左右に親近するを求めしめんと欲す。則ち士は堀穴窟巖巖の中に伏死せん耳、安んぞ肯て忠信を盡して闕下に趨く者あらんやと。書、梁の孝王に奏す。孝王、人をして之を獄出さしめ、幸に上客と爲せり。
 太史公曰く、魯連、其指意、大義に合せずと雖も、然れども余、其の布衣の位ニ在つて、蕩然廣大として志を肆にし、諸侯に誦風せず、當世に談説し、卿相の權を折キきしを多とす。鄒陽、辭、不遜と雖も、然れども其の物を比し類を連ぬる、其悲しむに足る者有り。亦抗直テ撓ニまらずと謂ふ可きかな。吾、是を以て之を列傳に附す。

屈原賈生列傳 第二十四

屈原は、名は平、楚の同姓也。楚の懷王の左徒官となる。博聞強志見聞廣ク記憶、治亂ノ事に明かに、辭令文に嫻ナリへり。入つては則ち王と國事を圖議して以て號令を出し、出でては則ち賓客に接遇し諸侯に應對す。王甚だ之に任ず。上官大夫、之と列を同じうして、寵を争ひて心に其能を害む。懷王、屈原をして憲令憲を造爲せしむ。屈平、草薺下を屬し書ク、未だ定まらず。上官大夫見て之を奪はんと欲す。屈平與へず。因つて之を讒して曰く、王、屈平をして令を爲らしむるは、衆知らざる莫し。一令の出づる毎に、平其功に伐ハつて曰く、以爲ふに我に非ずんば能く爲る莫しと。王怒つて屈平を疏んず。屈平、王の聽の聰ならずして、讒諂の明を蔽ひ、邪曲の公を害し、方正の容れられざるを疾ニむ。故に憂愁幽思して離騷を作る。離騷は、猶ほ離愛要のごとし。夫れ天は人の始め也。父母は人の本也。人窮すれば則ち本に反る。故に勞苦倦極すれば

ば、未だ嘗て天を呼ばずんばあらず、疾痛慘怛疾痛慘怛なれば、未だ嘗て父母を呼ばずんばあらざる也。屈平、道を正しうし行ひを直くし、忠を竭し智を盡し、以て其の君に事へしを、讒人之を問難す、窮すと謂ふ可し。信にして疑はれ、忠にして謗らる。能く怨むる無からんや。屈平の離騷を作る、蓋し怨より生せしなり。詩經 中ノ國風は色を好んで淫せず、詩經 中ノ小雅は怨誹して亂せず、離騷の若きは、之を兼ねると謂ふ可し。上は帝帝譽治を稱し、下は齊桓公桓を道ひ、中ごろは湯武湯武を述べ、以て世事を刺り、道德の廣崇、治亂の條貫を明かにし、畢く見はれざるはなし。其文は約簡、其辭は微、其志は潔、其行は廉、其の文を稱する小にして、其指所極めて大、類を擧ぐる邇うして義を見す遠し。其志や潔、故に其の物を稱する芳ばしく、其行ひや廉、故に死して容れられず自ら疎んせらる。淖也 汗泥の中に溺ぎ、濁穢を蟬蛻蟬蛻ク脱スルナリし、以て塵埃の外に浮游す、世の滋垢滋垢を獲ず、皜然皜然として泥して滓滓れざる者也。此志を推せば、日月と光を争ふと雖も可也。

屈平既に絀絀けらる。其後、秦、齊を伐たんと欲す。齊は楚と從親す。惠王之を思へ、乃ち張儀をして詳詳り秦を去り、幣を厚うし質を委ね楚に事へしめて曰く、秦は甚だ齊を憎む。而而齊は楚と從親す。楚誠誠に能く齊に絶たば、秦願はくは商於の地六百里を獻せんと。楚の懷王貪ぼりて張儀を信じ、遂に齊に絶ち、使をして秦に如如き地を受けしむ。張儀之を詐つて曰く、儀は王と六里を約す、六百里を聞かすと。楚の使怒つて去り、歸つて懷王に告ぐ。懷王怒り、大に師を興して秦を伐つ。秦、兵を發し之を擊つて、大に楚の師を丹淅に破り、首を斬ること八萬、楚の將屈匄屈匄を虜にし、遂に楚の漢中の地を取る。懷王乃ち悉く國中の兵を發し、以て深く入りて秦を擊ち、藍田に戰ふ。魏之を閉き、楚を襲ひ鄧に至る。楚の兵懼れ、秦より歸る。而して齊竟に怒つて楚を救はず。楚大に困しむ。明年、秦、漢中の地を割き楚に與へて以て和す。楚王曰く、地を得るを願はず。願はくは張儀を得て甘心せんと。張儀聞いて乃ち曰く、一个儀を以てして漢中の地に當らば、臣請ふ往いて楚に如如かんと。儀楚に如く。又因りて事を

用ふる者臣斯尙に幣を厚くして、詭辯を懷王の寵姫鄭袖に設く。懷王竟に鄭袖に聽き、復た釋して張儀を去らしむ。

是の時、屈平既に疏んせられて、復た位に在らざりしが、齊に使して願反歸し、懷王を諫めて曰く、何ぞ張儀を殺さざると。懷王悔い、張儀を追ふ。及ばず。其後、諸侯共に楚を擊つて、大に之を破り、其將唐昧を殺す。時に秦の昭王、楚と婚し、懷王と會せんと欲す。懷王行かんと欲す。屈平曰く、秦は虎狼の國、信す可からず。行く無きに如かずと。懷王の稚子ノ子蘭、王に行くを勸むらく、奈何ぞ秦の歡心を絶たんと。懷王卒に行き、武關に入る。秦、兵を伏し其後を絶ち、因つて懷王を留め、以て地を割くを求む。懷王怒つて、聽かず、亡げて趙に走る。趙内れず。復た秦に之く。竟に秦に死して、歸葬す。長子頃襄王立つ、其弟ノ子蘭を以て令尹と爲す。楚人既に子蘭を咎むるに、懷王を勸め秦に入れて反らざりしを以てす。

屈平既に之を嫉む。放流せらるると雖も、楚國を瞻顧し、心を懷王に繋げ、王

反さんと欲するを忘れず、君の一たび悟り、俗の一たび改まるを冀幸しつ、其の君を存し國を興して之を反覆せんと欲し、離一篇の中、三たび志を致す。然れども終に奈何ともす可き無し。故に以て懷王ノ反す可からず、卒に此れを以て懷王の終に悟らざるを見る也。人君者は愚智賢不肖と無く、忠臣を求め以て自ら爲めにし、賢を擧げ以て自ら佐くるを欲せざるは莫し。然れども國を亡ぼし家を破るは相隨屬して、聖君が國を治むるは累世にして見はれざるは、其の所謂忠なる者不忠にして、所謂賢なる者不賢なれば也。懷王、忠臣の分を知らざるを以て、故に内、鄭袖に惑はされ、外張儀に欺かれ、屈平を疎んじて、上官大夫、令尹子蘭を信じ、兵は挫げ地は削られ、其六郡を亡うて、身は秦に客死し、天下の笑と爲る。此れ人を知らざるの禍也。易卦井ノに曰く、井井泄うして食は飲れず。コレ忠臣川ホラ、爲メ我が心の惻を爲す。以て汲む可し。王の明なる竝に其福を受くと。楚王ノ王の不明なるは、豈に福とするに足らんや。

令尹子蘭之聞き屈平ノ已チ嫉ム、大に怒り、卒に上官大夫をして屈原を頃襄王に短らしむ。頃襄王怒つて之を選す。屈原、江濱に至り、髪を被り澤畔サハに行吟沈吟シテしむ。顔色、憔悴顔領ヤツシし、形容、枯槁枯木ノ如クす。漁父見て之に問うて曰く、子は三閭王族三姓ヲ掌ル職大夫に非ずや。何の故にして此に至れると。屈原曰く、舉世混濁して、我獨り清み、衆人皆酔うて、我獨り醒む。是を以て放たると。漁父曰く、夫れ聖人は、物に凝滞せずして、能く世と推移す。舉世混濁せば、何ぞ其流に随つて其波を掲げざる。衆人皆酔はゞ、何ぞ其糟酒ノを餉ケラうて其醜リウを嚙らざる。何の故に瑾美玉ノ名を懷き瑜美玉ノ名を握つて、自ら放たれしむるを爲すと。屈原曰く、吾之れを聞く、新に沐する洗フ者也は必ず冠を弾き拂ヒ、新に浴ニする者也は必ず衣を振チて其埃ふと。人又誰か能く身の察察潔清を以て、物の汶汶塵埃を受くる者ぞ。寧ろ常流長に赴いて、江魚の腹中に葬られんのみ、又安んぞ能く皎皎潔白ノ貌の白きを以てして、世の温蠖汚穢を蒙カらんやと。

乃ち懷沙沙礫ヲ懷イの賦を作る。其辭に曰く、陶陶盛陽ノ貌たる孟夏四月、草木莽莽茂盛たり。而ルニ我ハ國ノ家ノ爲メニニ懷ロを傷め永く哀しみ、汨ヨリ忽トとして南土ユに徂ク。胸ケして目モ眩スル紛ク行ク手ガ深ク且ツたり、孔ナハだ静ニにして幽墨モク、聲ナなり。夫ニ我ガ宛ホレ結ホレ紆シ軫シにして、慙ウレヒに離テうて之れ長く鞠マまる。情ニに撫ヒ志ヲを効シ、首ニ俛シ身ヲ誣シして以て自ら抑ムふ。方方物ノを刑シり以て圓ノ物ト爲スも、常度常ノ未ダ替ヘれず。蓋シ初本元初の由由所所を易ムふるは、君子ノの鄙シしむ所ナレ、工畫所ヲを章ニし墨繩を職シして、前度ヲを未ダ改メず。内、直ニにして質材重厚なるは、大人ノの盛トする所、巧匠巧工斲ラらずんば、孰カ其揆正規を察セん。玄文黒キ文幽暗處ニ、矇盲人ハ之ヲを章カならずと謂ヒ、離婁古ノ明の徹視細微ノミルモ、瞽瞽は以て自分ガ明無しと爲ス。白ヲを變ジて黒ト爲シ、上ヲを倒シ以て下ト爲シ、鳳凰ハ狡伏籠籠に在リ、雞雉ハ翔舞す。玉石ヲを同糅スルナリし、一ノ概升カにして相量ス。夫ノ黨人の鄙妬なる心鄙陋ニシ、羌ア彼等吾ガ臧善き所ヲを知らず。重ニに任ジ盛ヲを載スオレれども、陷滯沈滯して濟サず仕途ガ瑾ヲを懷キ瑜ヲを握レども、窮

して余が示す所を得ず會得セザル也。邑犬群り吠ゆるは、怪しむ所に吠ゆる也。駿駿也を誹り
 桀桀也を疑ふは、固より庸態凡人ノ也。衆文質、内に疎疎ければ、衆、吾の異采殊異ノを
 知らず、ニ徒材樸材樸也委積して、余の有する所材ノ真を知る莫し。仁を重ね義をカキ護
 厚以て豊ユメを爲せども、聖重華舜ノ梧梧也達達也ふ可からず、孰か余の従容自得ナル所を知ら
 ん。古より聖固固ニ並ばざるあり、豈に其故を知らんや。湯禹殷湯、夏禹ノ如如キは久遠にし
 て、邈として慕ふ可からざる也。我ハ只自ラガ遠遠へるを懲らし恐りを改め、心を抑へて自ら強
 め、新カ溘溘也昏昏きに離離ふも遷志ヲ移サらずガ志志のニ後世後世ノ象象られんを願ふなり。路に進み
 北に次る、日、昧昧暗キとして其れ將に暮れんとす。憂を含み哀しみをクシ虞悲哀ヲ以テ、之
 を限るに大故死を以てせんかな。亂意ヲ理ムルヲ前前に曰く、浩浩廣大たる沅水、湘水、分れ
 流れて汨コト疾疾たり。脩路長幽拂草木ノ際際にして、道、遠忽道遠ク際たり。會會ち陰陰じ口ヲ閉
 恒に悲しみ、永く歎慨す。世既に吾を知るモ莫し、人心邪曲ナル謂謂く可くもあらず、
 情を懐き質を抱き、獨りテ匹匹者者無し。伯樂馬ノ既既に歿す、驥驥將將焉焉か程程らん。

人生、命あり、各々錯安んずる所あり。心を定め志を廣うす、余何をか畏懼せん。曾
 ち傷み愛に哀しみ、永く歎喟す。世溷溷れて吾を知らず、心謂く可くもあらず。死の讓
 る可からざるを知る、願はくは身愛愛む勿勿けん。明にし以て後後君子に告ぐ、吾將將に是以
 て君ノ亂亂事事ヲ可ラザル類類と爲爲さんとすと。
 是に於て石を懐き、遂に自ら汨汨羅羅に投じ以て死す。屈原既に死するの後、楚に宋玉、
 唐勒、景差の徒なる者あり、皆辭を好んで賦を以て稱せらる。然れども皆屈原の従容
 辭令を祖とし、終に敢て直諫するモ莫し。其後、楚、日に以て削らる、こと數十年、
 竟に秦に滅ぼさる。屈原、汨羅に沈みてより後百有餘年、漢に賈生あり、長沙王の太
 傅たり、湘水を過ぎ、書を投じ以て屈原を弔ふ。

賈生、名は誼、雒陽の人也。年十八、能く詩を誦し書を屬する文ヲを以て、郡中に
 聞ゆ。吳廷尉、河南の守たり、其秀才を聞いて、召して門下に置き、甚だ幸愛す。孝
 文皇帝初めて立ち、河南の守吳公が、治平、天下第一たり、故、李斯と邑を同じうし

て、常て^{カク}李斯學事せりと聞くや、乃ち微して廷尉と爲す。廷尉乃ち言ふ、買生、年少く、頗る諸子百家の書に通ずと。文帝召して以て博士と爲す。是の時、買生、年二十餘、最も少しと爲す。詔令の議下る毎に、諸老先生言ふ能はず、買生盡く之が對^{カク}を爲す、人人各々其意の出さんと欲する所の如し。諸生是に於て乃ち以爲へらく、能^{買生}及ばずと。孝文帝之を説び、超遷して一歳中に太中大夫に至る。

買生以爲へらく、漢^ガ興つて孝文に至るまで、二十餘年、天下和洽す、而して固より當^{カク}に正朔^也を改め、服色を易へ、制度を法^{カク}り、官名を定め、禮樂を興すべしと。乃ち悉く其事の儀法を草具^下す。色は黄を尙び、數は五を用ひ、官名を爲^{カク}り、悉く秦の法を更む。孝文帝初めて位に即き、謙讓して未だ^{此ニ及}遑^{アニ}あらず。諸の律令の更定せられ、及列侯をして悉く國に就かしむる^ナ、其説、皆買生より之を發す。是に於て天子議して以て買生は公卿の位に任ふと爲す。絳^{絳侯}灌^灌、東陽侯^如馮敬の屬盡く之を害む。乃ち買生を短つて曰く、雒陽の人^{買生ヲ}、年少くして初學なり、専ら權を擅にし諸事

を紛亂せんと欲すと。是に於て天子後に亦之を疏んじ、其議を用ひず。乃ち買生を以て長沙王の太傅と爲す。

買生既に辭して往き、行々、長沙の卑濕^{ナル地}を聞き、自ら以^まへらく壽長きを得じと。又適^也を以て去る^{マシ}、意自得せず。湘水を渡るに及び、賊を爲^{カク}り以て屈原を弔す。其辭に曰く、共^也しく^{天子}嘉惠を承け、罪を長沙に俟つ。側^{カク}に聞く屈原ハ、自ら汨羅に沈むと。造^也り^{汨羅ノ}湘流に託し、敬^{カク}んで先生を弔ふ。先生世の罔極^無に遭ひ、乃ち厥の身を隕^{カク}す。嗚呼哀しい哉、時の不祥^{芽出タカラ}に逢ふ。鸞鳳は伏竄^{カク}し、鷓鴣^{フクロフ、}は翔翔^{カケ}す。闕^{カク}茸^{不肖}人は尊顯せられ、讒諛^{カク}者は志を得、賢聖^{聖人}は逆曳^待せられ、方正^者は倒植^倒せらる。世人伯夷を貪と謂ひ、盜跖を廉と謂ひ、莫邪^{寶劍}を頓^{カク}しと爲し、鉛刀を銛^利しと爲す。于嗟嚶嚶^{カク}たらん、生の故無き。周九鼎を幹^{カク}棄して、康瓠^{大瓠}を寶とし、能^{カク}牛に騰駕し、蹇驢^蹇を驂^{カク}にし、驥^駿は兩耳を垂れ、鹽車に服す。章甫^冠を履^{カク}に薦^{カク}く、漸く久しかる可からず。嗟^{カク}苦ましいかな先生、

獨り此の咎に離ふ。訊告トクに曰く、已んぬる矣、國其れ我を知る莫し。獨り堙鬱トクとして、其れ誰にか語らん。鳳は漂漂トクとして其れ高く遊ぎ、夫れ固に自ら縮まつて遠く去る。九淵トクを襲ぬるの神龍は、湧トクとして深く潛み目て自ら珍としトク、融煖トク光明に彌トクざかり以て隱處すトク、夫れ豈に蠟トクと蝮トクと蝮トクとに從はんや。貴ぶ所は聖人の神徳、濁世に遠ざかりて自ら藏る。騏驎トクをして係羈するを得可からしめば、豈に夫の犬羊に異なりと云はんや。先般トク、行トクして紛紛トクたり、其れ此トク尤トクに離ふ、亦夫子トクの辜トク也。九州を騰トクて君を相トクく、何ぞ必ずしも此都を懷はん。鳳皇は千仞の上に翔り、徳輝を覽て之に下る、細徳トクの險微トクを見ば、翻トク羽を搖増し逝いて之を去る。彼の尋常の汗漬トクは、豈に能く吞舟の魚トクを容れんや、江湖に横はるの鱣トクも、固に將に螻トクに制せらんとすと。

賈生、長沙王の太傅と爲り、三年、鵞トクあり、飛んで賈生の舍に入り、坐隅に止まる。楚人、鵞を命けて服トクと曰ふ。賈生既に適トクを以て長沙に居る。長沙は卑濕

なり、自ら以爲へらく壽長きを得じと。之を傷悼して、乃ち賦を爲り、以て自ら心廣トク也。其辭に曰く、單闕の歲トク、四月孟夏トク、庚子ノ日トク、日施にして、服トク手が舍に集り、坐隅に止まり、貌甚だ間暇トク。異物來り集まる、私に其故を怪しみ、書を發いて之を占ふ。策トクに其度トクを言ふ、曰く野鳥入り處る、主人將に去らんとすと。服に請ひ問ふ、予去つて何くにか之く、吉か、我に告げよ、凶ならば其舊を言へ、淹數トクの度、予に其期を語げよと。服乃ち歎息し、首を擧げ翼を奮ふ、口言ふ能はず、請ふ對ふるに臆トクを以てせんと。萬物變化し、固に休息する無し、幹流トクして遷り、或は推して還り、形氣轉續して、化變すること蠃蟬トクのトク而トク、其トク、其トクとして窮まり無し。胡んぞ言ふに勝ふ可けん。禍は福の倚る所、福は禍の伏する所、憂喜トク、同一門に聚り、吉凶域を同じうす。彼の吳は彊大にして、夫差以て敗れ、越は會稽に棲み、句踐世に覇たり、斯トクの游遊トク遂に成り、卒には五刑を被り、傅說胥靡トクにせられしも、乃ち武丁に相たり。夫れ禍の福に與ける、何ぞ糾纏トクに異ならん。

禍命ナレ説く可からず、孰か其極を知らん。水激すれば則ち旱疾ハヤキニシテ、矢激すれば則ち遠し。萬物回薄回轉シテし、振蕩振動相轉ず。雲蒸し雨降り、錯繆錯トフ也相紛る。大專大鈞物を繫す範ハ鑄造スル、ナリ造化ヲ云。扶軋扶軋ナリ垠無し、天は與也也預め慮る可からず、道は與也謀る可からず、遲數遅速は命あり、悪くんぞ其時を識らん。且つ夫れ天地を爐と爲し、造化を工と爲し、陰陽を炭と爲し、萬物を銅と爲す。合散消息、安くんぞ常則あらん。千變萬化、未だ始より極まり有らず。忽然として人と爲る、何ぞ控擗玩弄愛するに足らん。化して異物と爲る、又何ぞ思ふるに足らん。小知は自ら私し、彼を賤み我を貴ぶ。通人は大觀し、物、可ならざる無し。貧夫は財を徇め、列士は名を徇め、夸者は權に死し、品庶人は生を馮る。怵利ニ誘ハレテ追貧賤ニ道の徒、或は西東に趨るも、大人は曲せず、億變するも齊同す。拘士一方ニ拘泥は俗に繫がれ、樞樞木せられて囚拘ハトラの如く、至人は物を遺て、獨り道と俱にす。衆人は或或或々として、好惡、意に積み、真人は淡漠淡泊にして、獨り道と息ふ。知を釋て形を遺れ、超然として

自○喪○ひ○、寥○廓○忽○荒○心廣大無邊として、道と翱翔し、流に乗れば則ち逝き、坻水中ノ小洲を得れば則ち止まる、軀を縦にし命を委ね、私に己に與せず。其生くるや浮べるが若く、其死するや休ふが若し。澹乎淡乎として深淵の静けきが若く、汜乎浮乎として繫がざるの舟の若し。生の故を以て自ら寶とせず、空を養ひ而して遊ぶ。徳人は累累ひ無く、命を知つて愛へず。細故些細ニ帯削刺梗草木ノト、何ぞ以て疑ふに足らんやと。後歲餘、賈生徵されて見ゆ。孝文帝方アサに釐祭祀を受け、宣室未央殿前に坐す。上、鬼神の事に就感ずる所に因つて、鬼神の本を問ふ。賈生具ツツサに然る所以の狀を道ひ、夜半に至る。文帝席を前スむ。既にして罷む。帝曰く、吾久しく賈生を見ず、自ら以爲へらく之に過ぐと。而レ今及ばざる也と。居る之を頃シテして、賈生を拜し梁の懷王の太傅と爲す。梁の懷王は、文帝の少子、愛せられて書を好む。故に賈生をして之に傅たらしむ。文帝、復た淮南厲王の子四人を封じ、皆列侯と爲す。賈生諫めて以爲へらく、患の興る此コトより起らんと。賈生數々上疏し、諸侯の或は數郡を連ぬるは、古の制に非

ず、稱トク之を削る可しと言ふ。ドサレ文帝聽かず。居ること數年、懷王、騎し馬より墮ちて死す。後子孫なし。賈生自ら、傳と爲り無狀なりしを傷み、哭泣すること歲餘、亦死す。賈生の死する時、年三十三。孝文崩し、孝武皇帝立つに及び、賈生の孫二人を擧げ、郡守に至らしむ。而して賈嘉最も學を好み、其家を世世にす。余と書を通ず。孝昭の時に至り、列せられて九卿と爲る。

太史公曰く、余、離騷、天問、招魂、哀郢等ノを讀んで、其志を悲しみ、長沙に適き、屈原自ら沈みし所の淵を觀て、未だ嘗て涕を垂れて其の人と爲りを想見せずんばあらず。賈生の之を弔ふを見るに及びてや、又怪しむ、屈原、彼其材を以て諸侯に遊ばし、何の國か容れざらん、而るに自ら是の若くならしむるを。服烏の賦を讀むに、死生を同じうし、去就を輕んせり。余又爽然自失として自失す。

呂不韋列傳 第二十五

呂不韋は、陽翟の大賈人大商なり。諸國往來して賤安に販カひ貴高に賣り、家に千金を累ぬ。秦の昭王四十年、太子死す。其四十二年、其次子安國君を以て太子と爲す。安國君、子二十餘人あり。安國君、甚だ愛する所の姬あり。立て、以て正夫人と爲し、號して華陽夫人と曰ふ。華陽夫人、子なし。安國君の中男、名は子楚、子楚の母は夏姬と曰ひ、愛なし。子楚、秦の爲めに趙に質子たり。秦、數々趙を攻む。趙甚だ子楚を禮せず。子楚は秦の諸庶孽孫妾腹ノにして、諸侯に質たり。車乘、進用饒ユカクならず、居處困シクしくして、意を得ず。呂不韋、邯鄲に質シし、之を見て憐れんで曰く、此れ奇貨、居オく可し善キ儲ケ物ナリ買ヒト。乃ち往いて子楚を見、説いて曰く、吾能く子の門を大にせんと。子楚笑つて曰く、且シテく自ら君の門を大にし、而して乃ち吾が門を大にせよと。呂不韋曰く、子、知らざる也。吾が門は子の門を待つて大なるなりと。子楚、

心に謂ふ所を知り、乃ち引いて與に坐し深語す。呂不韋曰く、秦王老いつ、安國君、太子と爲るを得たり。竊に聞く、安國君は華陽夫人を愛幸すと。而ル華陽夫人は子なし。ドサレ能く適嗣嗣を立つる者は、獨り華陽夫人耳。今、子の兄弟は二十餘人、子は又中に居り、且甚だ幸せられずテ、久しく諸侯に質たり。即し大王薨じ、安國君立つて王と爲らば、則ち子は幾んど長子及び諸子の旦暮王前に在る者と、太子たるを争ふを得る無からんと。子楚曰く、然り。之を爲す奈何と。呂不韋曰く、子、貧しくして此に客たれば、以て親に奉獻し及賓客に結ぶ資程あるに非ず。不韋、貧しと雖も、請ふ千金を以て子の爲めに西游し、安國君及び華陽夫人に事へ、子を立て、適嗣と爲さんと。子楚乃ち頓首して曰く、必ず君が策の如くならば、請ふ秦國を分ち君と之を共にするを得んと。

呂不韋乃ち五百金を以て子楚に與へ進用と爲し、賓客に結ばしめ、而して復た五百金を以て、奇物玩好を買ひ、自ら奉じて西、秦に遊び、華陽夫人の姉に見ゆるを求めて、

皆其物を以て華陽夫人に獻す。因つて言ふ、子楚は賢智なり、諸侯賓客と結ぶこと、天下に徧し。常に曰く、楚は夫人を以て天と爲し、日夜泣いて太子及び夫人を思ふと。夫人大に喜ぶ。不韋因つて其姉をして夫人に説かして曰く、吾之を聞く、色を以て人に事ふる者は、色衰ふれば愛弛ぶと。今、夫人、太子に事へて、甚だ愛せらるゝも子無し。此時を以て、蚤く自ら諸子中の賢孝なる者に結び、擧立して以て適嗣也と爲して之を子とせざるや。夫在せば、則ち重尊なり、夫百歳の後、子とする所の者王と爲らば、終に勢を失はじ。是れ所謂一言にして萬世の利也。繁華の時を以て本を樹てずんば、即ち色衰へ愛弛ぶの後、一語を開かんと欲すと雖も、尙ほ得可けんや。今、子楚賢にして、自ら、中男たれば、次で適嗣也と爲るを得ず、其母又幸を得ざるを知り、自ら夫人に附く。夫人、誠に此の時を以て抜いて以て適嗣也と爲さば、夫人は則ち竟世終世秦に寵あらんと。華陽夫人以て然りと爲し、太子の間暇を承け、從容として言ふ、子楚として趙に質たる者は絶た賢なり。來往する者皆之を稱譽すと。乃ち因つて涕泣し

て曰く、妾幸に後宮に充てらるゝを得るも、不幸にして子無し。願はくは子楚を得て立て、以て適嗣と爲し、以て妾が身を託せんと。安國君之を許す。乃ち夫人と玉符玉印を刻し、約して以て適嗣と爲す。安國君及び夫人、因つて厚く子楚に餽遺物し、而して呂不韋に請うて之を子楚傳へしむ。子楚此を以て名譽益々諸侯に盛んなり。呂不韋、邯鄲の諸姫ノ中絶好善く舞ふ者を取つて與に居り、身めるあるを知る。子楚、不韋に従うて飲み、見て之を説説び、因つて起つて書書を爲し之を請ふ。呂不韋怒る。翻念ふに不韋已に家を破り、子楚の爲めにす。皆是以て奇を釣らんと欲すればなりと。乃ち遂に其姫を獻す。姫自ら身めるあるを匿す。大期分の時期期に至り、子、政を生む。子楚、遂に姫を立て、夫人と爲す。秦の昭王五十年、王齕をして邯鄲を圍ましむ。邯急なり。趙、子楚を殺さんと欲す。子楚、呂不韋と謀り、金六百斤を行ひ守者の吏に予へ、脱亡して秦の軍に赴くを得、遂に以て歸るを得たり。趙、子楚の妻子を殺さんと欲す。子楚の夫人は、趙の豪家の女ムスなれば、匿るを得、故を以て母子竟に活くるを得たり。

秦の昭王五十六年カニ薨す。太子安國君立つて王と爲る。華陽夫人を王后と爲し、子楚を太子と爲す。趙も亦子楚の夫人及び子政を奉じ秦に歸す。秦王立つて一年にして薨す、諡して孝文王となす。太子子楚代つて立つ、是を莊襄王となす。莊襄王、養はるゝ所の母華陽后を華陽太后と爲し、眞の母夏姫を尊んで以て夏太后と爲す。莊襄王元年、呂不韋を以て丞相と爲し、封じて文信侯と爲す、河南洛陽十萬戸を食ましむ。莊襄王、位に即き三年にして薨す。太子政立つて王と爲る。呂不韋を尊んで相國と爲し、號して仲父と稱す。秦王年少し。太后時時竊に私に呂不韋に通す。不韋の家僅萬人。是の時に當り、魏に信陵君あり、楚に春申君あり、趙に平原君あり、齊に孟嘗君あり、皆士に下り賓客を喜び以て相傾く。呂不韋、秦の強きを以てして如かざるを羞ぶ、亦、士を招致し、厚く之を遇す。食客三千人に至る。是の時、諸侯に辯士多し。荀卿の徒の如き、書を著はし天下に布く。呂不韋乃ち其容をして人人各聞く所を著はさしめ、策論して以て八覽、六論、廿二紀、二十餘萬言を爲り、以爲へらく天地萬物古今

の事を備ふと。號して呂氏春秋と曰ふ。咸陽の市門に布陳列ス、千金を其上に懸け、諸侯の游士賓客を延き、能く一字を増損する者あらば、千金を予へんと。

始皇帝益々壯なり、太后淫して止まず。呂不韋、覺られて禍の己に及ばんを恐れ、乃ち私に大陰の人嫪ラウアイ毒者を求めて以て舍人と爲し、時に倡樂ミダラを縦ち、毒をして其陰を以て桐輪桐製ノ車輪を關ちて坐敷ノ行かしめ、太后をして之を聞かしめ、以て太后に啗ウはす。太后聞き、果して私に之を得んと欲す。呂不韋、乃ち嫪毒を太后進め、詐りて人をして腐罪を以て之を告げしむ。不韋、又陰に太后に謂つて曰く、事、腐と詐らば則ち中宮に給事するを得可しと。太后乃ち陰に厚く腐者をツカサ主る吏に賜ひ、詐りて之を腐者ヲ論せしめ、其鬚眉を抜いて、宦者と爲し、遂に太后に侍するを得しむ。太后私に與に通じ、絶た之を愛す。身ウめるあり。太后、人の之を知らんを恐れ、詐りトウナす、當に時を避け宮を徙し雍トイ所に居るべしと。嫪毒、常に從ふ。太后賞賜甚だ厚く、事皆嫪毒に決す。嫪毒の家僮數千人、諸客、宦仕を求め、嫪毒の舍人と爲るも

の千餘人。始皇七年、莊襄王の母、夏太后薨す。孝文王の后を華陽太后と曰ひ、孝文王と壽陵に會葬合し、夏太后の子莊襄王は芷陽に葬り、故コトナに夏太后を獨り別に杜杜東に葬る。夏太后曰く、東に吾が子を望み、西に吾が夫を望む。後百年ナ、旁に當に萬家の邑有るべしと。始皇九年、嫪毒は實は宦者に非ずテ、常に太后と私に亂行し、子、二人を生み、皆之を匿し、太后と謀つて、王即し薨せば、己子を以て後と爲さんと曰ふと告ぐるものあり。是に於て秦王チ吏に下し毒治味せしに、具ツツに情實を得たり。事、相國呂不韋に連なる。九月、嫪毒の三族を夷ウげ、太后生む所の兩子子を殺して、遂に太后を雍に遷し、諸の嫪毒の舍人は、皆其家を没して、之を蜀に遷す。王、相國を誅せんと欲せしかども、其の先王に奉せる功大に、及及賓客辯士の不爲めに游説する者衆きが爲めに、王不法に致すに忍びず。秦王の十年十月、相國呂不韋を免す。齊人茅焦ト曰秦王に説くに及び、秦王乃ち太后を雍に迎へて、咸陽に歸復せしめ、而して文信侯を出し國に河南に就かしむ。歲餘テ諸侯の賓客使者、道に相望み、文信

侯^ノ請^ヲを請ふ。秦王其の變を爲さんを恐れ、乃ち文信侯に書を賜うて曰く、君、秦に何の功あつて秦、君を河南に封じ、十萬戸を食ましむる。君、秦に何の親あつて號して仲父と稱する。其れ家屬と徙り蜀に處れと。呂不韋自ら度るに稍^{ナリ}く^ハ、侵^マられたれば、其^ノ誅せられんを恐れ、乃ち酖^ヲを飲んで死す。秦王怒を加へし所の呂不韋、燔毒皆已に死したれば、乃ち皆燔毒の舍人の蜀に遷れる者を復歸す。始皇十九年、太后薨す。謚して帝太后と爲し、莊襄王と正陽に會葬^スす。

太史公曰く、不幸及び燔毒、貴く封せられ、^ハ長信侯^ト、文信侯と號す。人の燔毒^ノを告ぐるや、毒之を聞く。秦王左右^ノに^テ、^ナ驗せしめ、未だ^ナ其^ノ罪發せす。上、雍に之^キを郊^ニ祀す。毒、禍の起らんを恐れ、乃ち黨と謀り、太后の璽^ヲを矯め卒を發し、以て斷年宮に反す。王^ノ吏を發し、毒を攻む。毒敗れて亡走す。追うて之を好時^ノ地に斬り、遂に其^ノ宗^ヲを滅ぼす、而して呂不韋は此に由つて細^ニ屈せり。孔子の所謂^ニ、^ハ色^ニを^テ取^リて^テ、^ハ必^ズ不^レ聞^スと^ハ、^ハ其^ノれ^ハ呂^ノ乎^カ。

曹沫は、魯の人也。勇力を以て魯の莊公に事ふ。莊公、力を好む。曹沫、魯の將となり、齊と戦つて、三たび敗北す。魯の莊公懼れ、乃ち遂邑の地を獻じ以て齊和す。猶ほ復た^テ曹沫^ヲ以て將となす。齊の桓公、魯と柯^ノ地に會して盟ふを許す。桓公、莊公と、既に境上に盟ふ。曹沫、匕首^ヲを執り、齊の桓公を劫かす。桓公の左右^ノ敢て動く莫くして問うて曰く、子將に何を欲せんとするかと。曹沫曰く、齊は強く魯は弱くして、夫國の魯を侵すや亦^ハ以^テ甚^シし。今、魯城壞れ、即ち齊の境に壓さる。君其れ之を圖れと。桓公乃ち許し、盡く魯の侵地を歸す。桓公既に已に言ふや、曹沫、其匕首を投じ、壇を下つて北面し、群臣の位^ニに就いて、顔色變せず、辭令故の如し。桓公怒り、其約に倍かんと欲す。管仲曰く、不可なり。夫れ小利を貪ぼり以て自ら快うするも、信を諸侯に棄て、天下の援を失ふ^ハ、之を興ふるに如か^キ乎^ト。是に於て桓公乃ち遂に魯の

刺客列傳 第二十六

675 六十二第傳列客刺

侵地を割く。曹沫、三戰して亡ふ所の地、盡く復た魯に予へらる。其後百六十有七年にして吳に專諸の事有り。

專諸は、吳の堂邑の人也。伍子胥の楚を亡げて吳に如くや、專諸の能を知る。伍子胥、既に吳王僚に見え、説くに楚を伐つのを以てす。吳の公子光曰く、彼の伍員の父兄、皆楚に死したれば、員、楚を伐てと言ふは、自ら爲めに私讎を報いんと欲するなり、能く吳の爲めにするには非ずと。吳王乃ち止む。伍子胥、公子光の吳王僚を殺さんと欲するを知り、乃ち曰く、彼の光は將に内志有らんとす、未だ説くに外事を以てす可からずと。乃ち專諸を公子光に進む。光の父は、吳王諸樊と曰ひ、諸樊の弟三人、次を餘祭と曰ひ、次を夷昧と曰ひ、次を季子札と曰ふ。諸樊、季子札の賢を知つて、太子を立てず、次を以て三弟に傳へ、卒に國を季子札に致さんと欲す。諸樊既に死し、餘祭に傳ふ。餘祭死し、夷昧に傳へ、夷昧死し、當に季子札に傳ふべきを、季子札逃れて、立つを肯んせず。吳人_{止ムテ}乃ち夷昧の子僚を立て、王となす。公子光曰く、

兄弟の次_弟を以てせしめんか、季子當に立つべし。必ず子を以てせんか、則ち光は眞の適嗣_嫡、當に立つべきなりと。故に嘗て陰に謀臣を養ひ、以て立つを求む。光、既に專諸を得、善く之を客待す。

九年にして楚の平王死す。春、吳王僚、楚の喪に因らんと欲し、其二弟_{公子蓋餘}、屬庸をして兵に將として楚の潛地_名を圍ましめ、延陵の季子を晋に使はして以て諸侯の變を觀しむ。楚、兵を發し、吳の將蓋餘、屬庸の路_路を絶つ。吳の兵還るを得ず。是に於て公子光、專諸に謂つて曰く、此時失ふ可からず。求めずんば何ぞ獲ん。且つ光は眞の王嗣なり、當に立つべし。季子、來ると雖も、吾を廢せじと。專諸曰く、王僚殺す可き也。母は老い子は弱く、而して兩弟は兵に將とし楚を伐つて、楚、其後を絶つ。方今、吳、外は楚に困しんで、内は空しく、骨鯁の臣_{抗直}無し。是れ我を如何ともする無しと。公子光頓首して曰く、光の身は子の身也と。四月丙子、光、甲士を窟室_{地下}の中に伏せて、酒を具へ王僚_來を請ふ。王僚、兵を陳せしめ、宮より光の家に至る。門